

長岡京跡左京第479次 発掘調査報告

2 0 0 3

財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京跡左京第479次
発掘調査報告

2 0 0 3

財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター



(1) 北調査区礫敷遺構SX32 (南東から)



(2) 北調査区礫敷遺構SX32 (真上から)



(1) 北調査区長岡京期全景 (南東から)



(2) 南調査区長岡京期全景 (北東から)



南調査区長岡京期全景（南東から）



(1) 井戸SE05完掘状況 (南から)



(2) 井戸SE05底部の曲物 (南東から)



(3) 井戸SE05断ち割り状況 (南から)

序 文

長岡京市では長岡京跡をはじめ数多くの遺跡が重複して発見されており、これまで開発などに伴う発掘調査によって、数多くの遺跡が調査されてきました。その状況はまさに埋蔵文化財の宝庫といっても過言ではありません。

本書は神足芝本でおこなった、乙訓消防庁舎建設に伴う発掘調査の概要です。当地には長岡京跡をはじめ、縄文時代の芝本遺跡、弥生時代から古墳時代を中心とする時代の雲宮遺跡が重複して所在していることが判明しています。

今回の調査では長岡京期と平安時代以降の遺構が検出されましたが、この成果を近接する周辺の調査成果といかに平面的・総合的に検討し掌握するかということが今後の重要な課題となります。

また、このような地点ごとの様相を明らかにすることが、遺跡の全体像を復原する上で今後欠くことのできない重要な成果であると言えます。

最後になりましたが、当調査にあたり市民の皆様にはさまざまな面でご協力を賜りました。ここに感謝いたします。また、調査の準備から終了まで、ご指導・ご鞭撻いただきました関係各機関、関係者の皆様にも厚くお礼申し上げますとともに、今後ともなお一層のご支援をお願い申し上げます。

平成15年8月

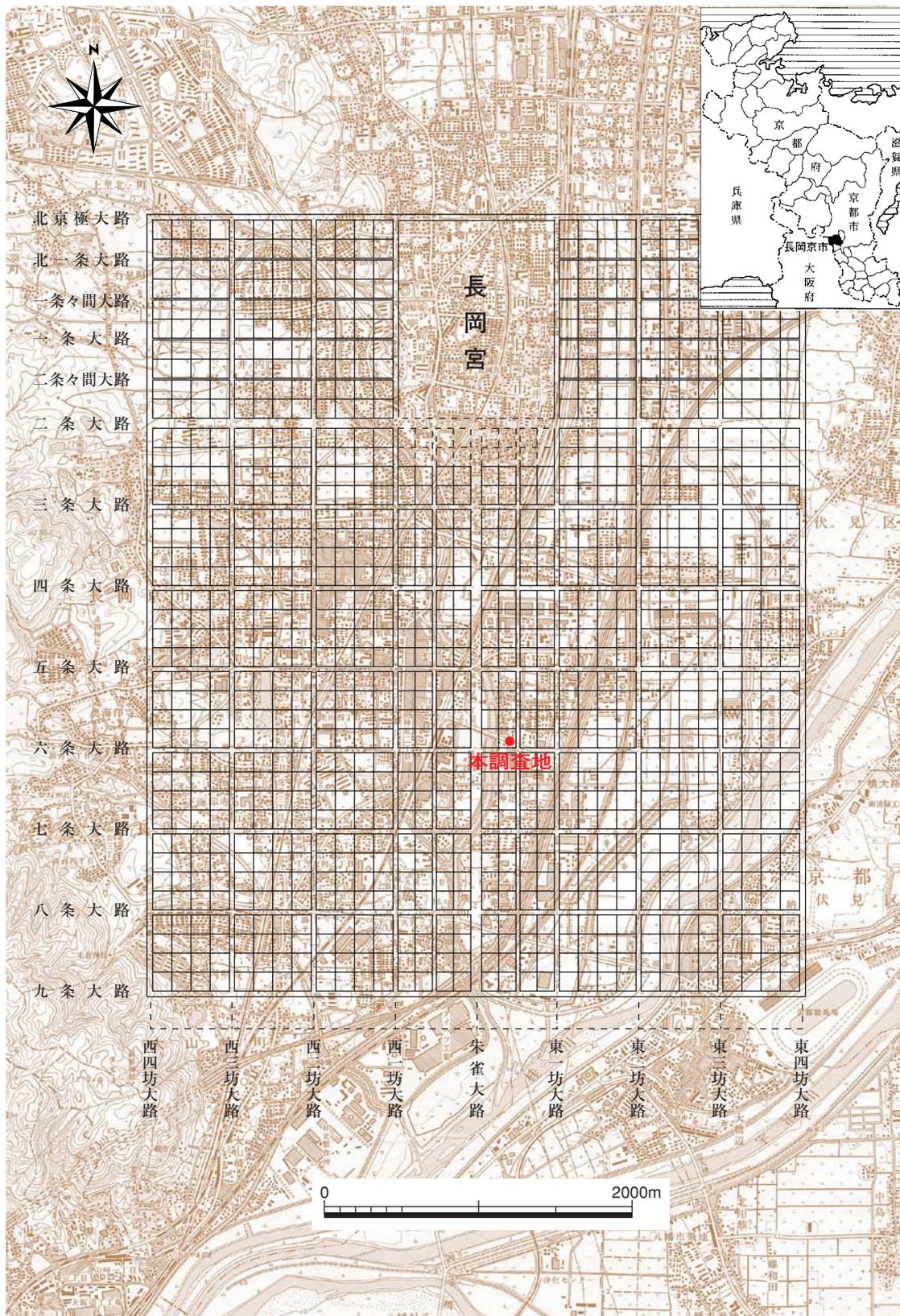
財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

理事長 芦田 富男

凡 例

1. 本書は、京都府長岡京市神足芝本地内において、2002（平成14）年12月2日から翌年3月28日まで実施した長岡京跡左京第479次調査の調査報告書である。
2. 調査は乙訓消防組合の管理棟建設工事に伴うものであり、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。現地調査は、同センター調査係主査中島皆夫が担当した。
3. 調査対象となった遺跡は、長岡京跡の左京六条一坊五町、雲宮遺跡、芝本遺跡である。
4. 本調査の正式名称は、長岡京跡左京第479次（7ANMST-7地区）調査である。長岡京跡の調査次数は左京域での通算調査件数を示す。また、調査地区名は、前半が奈良国立文化財研究所の分類表示、後半が高橋美久二「長岡京跡昭和51年度発掘調査概要」『京都府概報』（1977年）の旧字名による地区割りと地区内での調査回数を意味する。MSTは神足小字芝本の地区名略表記である。
5. 本書で使用した長岡京跡の条坊名称は、山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第4号（1992年）の復原案に従った。また、地形区分については、基本的に「長岡京市域地形分類図」『長岡京市史』資料編一（1991年）によっている。
6. 本調査では建設される管理棟の配置に伴い北調査区（面積134 ）と南調査区（面積600 ）を設定し、調査作業は南調査区より開始した。
7. 2003（平成15）年2月27日より、本調査の北調査区に隣接する場所で左京第484次調査（面積48 ）を行っている。本書では左京第484次調査の検出遺構についても記述した。
8. 本書では国土座標旧測地系の第 系を使用した。
9. 本書挿図の土層名で<>を付けて示した記号は、『新版標準土色帳』（1997年版）のJIS表記法による土色である。
10. 本文の（注）に示した長岡京に関する報告書のうち、使用頻度の高いものについては、『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第2集（1985年）に従って略記した。
11. 礫敷遺構SX32については、京都産業大学の井上満郎氏、財団法人向日市埋蔵文化財センターの中塚良氏より数々のご教示を頂いた。
12. 遺物写真は中島、同センター係長小田桐淳が撮影を行った。
13. 本書は執筆を中島が、編集を中島、同センター総括主査山本輝雄が担当した。

※ 表紙カット 南調査区出土の鉄鋌



第1図 長岡京と調査地の位置 (1/40000)

本文目次

序文	i
凡例	ii
1 はじめに	1
2 調査経過	2
3 検出遺構	3
(1) 基本層序		
(2) 検出遺構		
A. 近世以降の検出遺構		
B. 平安時代前後の検出遺構		
C. 長岡京期の検出遺構		
D. 弥生時代の検出遺構		
4 出土遺物	25
(1) 平安時代以降の出土遺物		
(2) 長岡京期の出土遺物		
(3) 古墳時代以前の出土遺物		
5 まとめ	33
(1) 左京六条一坊五町		
(2) 長岡京跡の井戸		
A. 井戸側の分類		
B. 井戸側類型と井戸の深さ		
C. まとめ		

図 版 目 次

- 巻頭図版 1 (1) 北調査区礫敷遺構SX32 (南東から)
(2) 北調査区礫敷遺構SX32 (真上から)
- 巻頭図版 2 (1) 北調査区長岡京期全景 (南東から)
(2) 南調査区長岡京期全景 (北東から)
- 巻頭図版 3 南調査区長岡京期全景 (南東から)
- 巻頭図版 4 (1) 井戸SE05完掘状況 (南から)
(2) 井戸SE05底部の曲物 (南東から)
(3) 井戸SE05断ち割り状況 (南から)
- 図版 1 (1) 北調査区平安時代以降全景 (南東から)
(2) 礫敷遺構SX32 (南西から)
- 図版 2 (1) 礫敷遺構SX32検出状況 (西から)
(2) 礫敷遺構SX32第5・6区検出状況 (東から)
(3) 礫敷遺構SX32東半部 (東から)
(4) 礫敷遺構SX32 (東から)
- 図版 3 (1) 左京第484次調査区から第1区
(2) 第1区から第2区
(3) 第2区から第3区
(4) 第3区から第4区
(5) 第4区から第5区
(6) 第5区から第6区
- 図版 4 (1) 北調査区長岡京期全景 (北東から)
(2) 北調査区長岡京期全景 (西から)
(3) 北調査区長岡京期全景 (南東から)
- 図版 5 (1) 南調査区長岡京期全景 (北東から)
(2) 南調査区長岡京期全景 (南東から)
- 図版 6 (1) 井戸SE05・溝SD20~22 (東から)
(2) 井戸SE05・柵SA06~08 (北から)
(3) 土坑SK12 (西から)
(4) 溝SD23 (北から)

- 図版 7 (1) 井戸SE05堆積状況 (南から)
(2) 井戸SE05須恵器出土状況 (南から)
(3) 井戸SE05曲物出土状況 (南西から)
(4) 井戸SE05曲物出土状況 (南から)
(5) 井戸SE05井戸側と底部 (南から)
(6) 井戸SE05井戸側内完掘状況 (南から)
- 図版 8 (1) 井戸SE05井戸側北西部 (南東から)
(2) 井戸SE05井戸側北東部 (南西から)
(3) 井戸SE05井戸側南東部 (北西から)
(4) 井戸SE05井戸側南西部 (北東から)
- 図版 9 (1) 井戸SE05井戸側外部と掘形 (南から)
(2) 井戸SE05井戸側内部と掘形 (南から)
- 図版 10 (1) 掘立柱建物SB19 (南東から)
(2) 溝SD31 (東から)
- 図版 11 (1) 平安時代から中世の土器
(2) 平安時代から中世の金属製品
- 図版 12 (1) 礫敷遺構SX32出土獣骨顎部
(2) 礫敷遺構SX32出土獣骨
- 図版 13 井戸SE05出土土器
- 図版 14 (1) 溝SD40出土墨書土器
(2) 井戸SE05・溝SD23出土製塩土器
- 図版 15 (1) 「東」線刻土器
(2) 壺M底部
(3) 軒平瓦
(4) 櫛
(5) 鋌
(6) 神功開寶
- 図版 16 (1) 曲物
(2) 曲物接合部
(3) 曲物内面

挿 図 目 次

第1図	長岡京と調査地の位置 (1/40000)	iii
第2図	発掘調査地位置図 (1/5000)	1
第3図	調査区配置図 (1/1000)	2
第4図	調査区土層断面図 (1/100)	5・6
第5図	礫敷遺構SX32断面図 (1/40・1/200)	8
第6図	礫敷遺構SX32実測図 (1/40)	9・10
第7図	礫敷遺構SX32杭・段差・窪み実測図 (1/200)	11
第8図	第4～6区礫検出状況 (東から)	12
第9図	第6区礫と杭・板 (東から)	12
第10図	北調査区长岡京期検出遺構図 (1/200)	14
第11図	溝SD40土層図 (1/50・1/400)	15
第12図	溝SD34～38・41・42土層図 (1/50・1/400)	15
第13図	南調査区长岡京期検出遺構図 (1/200)	16
第14図	井戸SE05実測図 (1/50)	17
第15図	井戸SE05井戸側部材模式図	18
第16図	井戸側部材法量計測図	19
第17図	土坑SK12実測図 (1/50)	19
第18図	柵SA06実測図 (1/50)	20
第19図	柵SA07実測図 (1/50)	20
第20図	柵SA08実測図 (1/50)	20
第21図	溝SD20～22土層図 (1/50・1/400)	21
第22図	溝SD10・11・23・24土層図 (1/50・1/400)	21
第23図	掘立柱建物SB19・溝SD25実測図 (1/100)	22
第24図	溝SD25・27・28土層図 (1/50・1/400)	23
第25図	溝SD31土層図 (1/50・1/400)	23
第26図	北調査区弥生時代検出遺構図 (1/200)	24
第27図	出土遺物実測図－1 (1/4)	25
第28図	出土遺物実測図－2 (1/2)	26
第29図	出土遺物実測図－3 (1/4)	28
第30図	出土遺物実測図－4 (1/2・1/8)	29
第31図	出土遺物実測図－5 (1/4)	30

第32図	出土遺物実測図－6 (1/4)	31
第33図	出土遺物実測図－7 (1/4)	31
第34図	出土遺物実測図－8 (1/4)	32
第35図	出土遺物実測図－9 (1/2)	32
第36図	北調査区・左京第484次調査区長岡京期遺構変遷図 (1/400)	33
第37図	南調査区長岡京期遺構変遷図 (1/400)	34
第38図	周辺地域の長岡京期検出遺構図 (1/1000)	35
第39図	井戸側類型図－1 (1/100)	37
第40図	井戸側類型図－2 (1/100)	38
第41図	井戸側の平面規模と井戸の深さ	40
第42図	長岡京跡井戸分布図	42

付 表 目 次

付表－1	礫長軸の分布	12
付表－2	礫種構成	12
付表－3	第1～2区礫種別重量	12
付表－4	各区礫敷の面積と体積	12
付表－5	長岡京期検出遺構一覧表	13
付表－6	井戸SE05井戸側部材法量表	18
付表－7	長岡京期出土遺物比率	27
付表－8	井戸側類型一覧表	37
付表－9	井戸側と井戸掘形対応表	42
付表－10	長岡京跡井戸一覧表	43
付表－11	報告書抄録	48

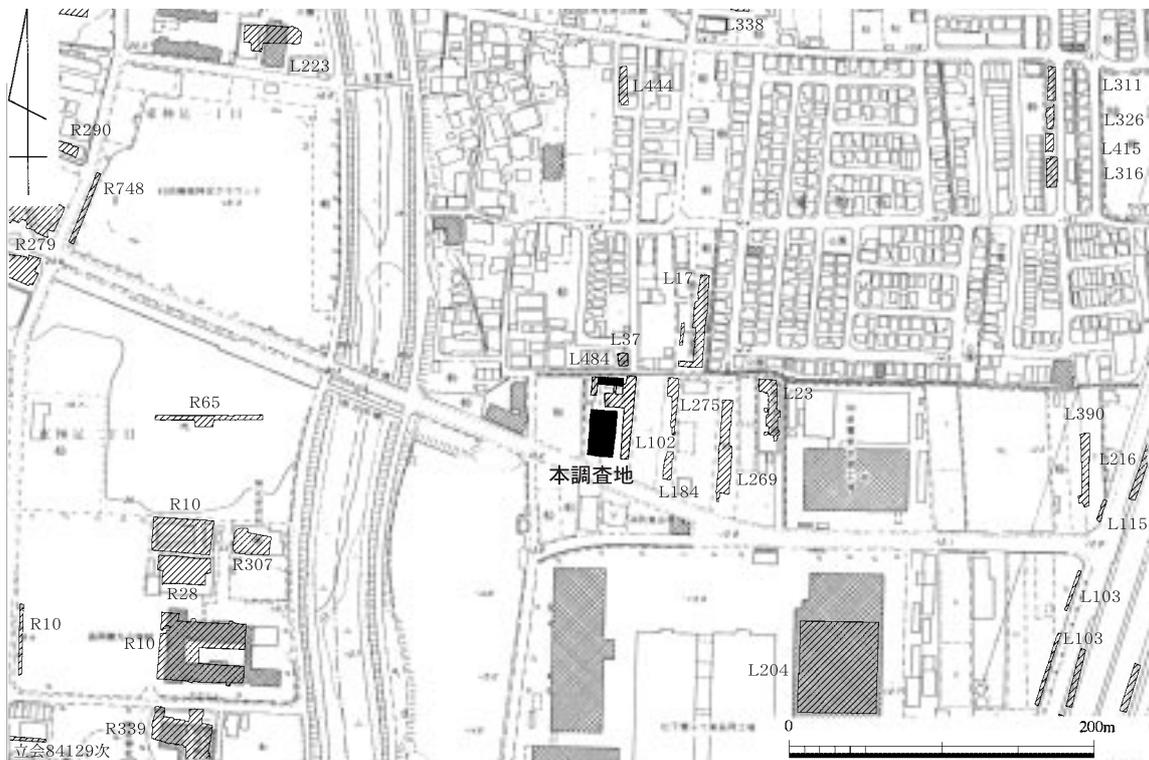
1 はじめに

本調査は乙訓消防組合の管理棟建設工事に伴うものである。調査地はJR長岡京駅の東約500mにあたり、西側約150mには小畑川が南流している。周辺地域の立地は小畑川扇状地に相当しており、これまでの周辺調査でも中世以降の細かい砂層が確認され、小畑川の土砂の影響を直接的に受けていた地域であることが分かる。

調査地は長岡京跡の左京六条一坊五町に推定される。周辺で行われた左京第275次調査^(注1)では東一坊坊間大路東側溝が、また、左京第269次調査⁽²⁾では六条大路北側溝が確認されており、これらの調査成果から当地が左京六条一坊五町の南東部に相当することが分かる。左京六条一坊五町の東半部では、これまでに左京第37・102次調査⁽³⁾・⁽⁴⁾（第2・3図）が行われており、とくに本調査と同じ敷地内で行われた左京第102次調査では底部に拳大の河原石を敷き詰めた横板井籠組井戸をはじめ、掘立柱建物1棟、柵1条、溝などが確認されていた。ただし、これらの検出遺構の大部分は五町の東辺中央部で確認されたもので、五町の南東部では遺構の分布が希薄であった。

当地は長岡京跡のほかに、縄文時代の散布地である芝本遺跡、弥生時代の集落遺跡である雲宮遺跡に含まれる。これまで左京第23・37・74・184・269・275次調査において縄文土器（滋賀里式前後）が出土しているが、当該期の明確な遺構は検出されていない。また、本調査地と隣接する左京第102次調査では縄文時代の遺物は出土しなかった。雲宮遺跡に関連して左京第102次調査では弥生時代中期の斜行溝が1条が検出されている。

また、前述の左京第102次調査では調査区の北端部で礫敷遺構が確認されており、出土遺物など



第2図 発掘調査地位置図 (1/5000)

2 調査経過

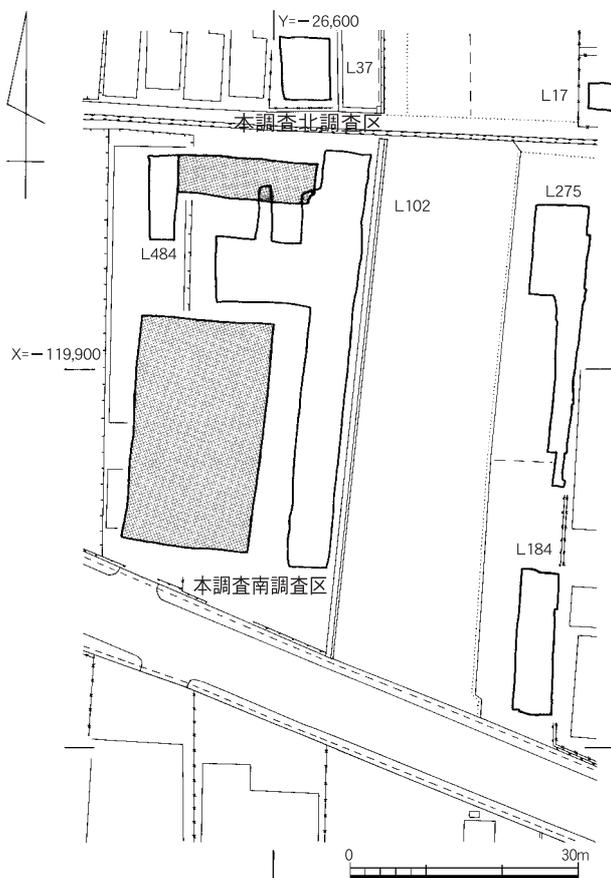
からこの遺構が中世のものと想定されていた。このように、本調査には、井籠組井戸を有する左京六条一坊五町の性格解明とともに、礎敷遺構や雲宮・芝本遺跡に関する資料の蓄積が期待されていた。

2 調査経過

調査対象地はその東半が長岡京市消防東分署の訓練用グラウンド、西半が（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター整理事務所跡地に相当する。調査区はこの敷地内に南北2棟の建物が建設されるため、134 程度の北調査区と約600 の南調査区が設定された。左京第102次調査の成果より、現状の地表面から長岡京期の遺構面まで深さ1.8m程度を有するものと想定できたことから、南北調査区における作業を順次行い、盛土・上げ土置場を確保する必要がある。

調査は2002（平成14）年12月2日から南調査区における作業に着手した。しかし、調査着手段階では西半の整理事務所跡地における作業を行うことができず、南調査区東半部の調査を先行させることとなった。翌年1月7日からは整理事務所跡地の重機掘削を開始し、南調査区の全域を調査対象とすることができた。南調査区における調査作業がほぼ終了したのは2月10日である。なお、南調査区の中心は第 座標系の $Y = -26,610$ 、 $X = -119,907$ に位置している。

2月12日からは南調査区の北半部を埋め戻し、残された北調査区の重機掘削、調査作業を行った。重機による埋め戻しの際、南調査区の南半部では井戸SE05を断ち割り掘形の土層観察を行っ



第3図 調査区配置図 (1/1000)

た。また、下層遺構の有無を確認するための面的な掘り下げ、基盤堆積層の断ち割り調査なども行っている。

北調査区では左京第102次調査でも確認されていた礎敷遺構を検出することができた。この礎敷遺構は北調査区のさらに西側へ続いていたため、2月27日からは礎敷遺構の西方への広がりを確認する目的で調査（左京第484次調査⁽⁸⁾）を行っている。左京第484次調査区は北調査区の西側に接しており、調査面積は48 を有する。

調査期間の後半期は降雨が多く、対象面積に比して各作業の進行状況は遅れ気味となった。しかし、3月10日に礎敷遺構の、3月20日には長岡京期以前の写真測量を終えることができた。そして、3月28日には南北調査区の埋戻し、機材撤

去など現地調査作業の全てが終了した。なお、北調査区の中心は第 座標系の $Y = -26,605$ 、 $X = -119,875$ に位置している。

以上のように本調査では南調査区、北調査区の順に調査を進めたが、本報告では基本的に北調査区から記述を行なう。また、北調査区に隣接して行った左京第484次調査については別に報告を行なう予定であるが、本書では検出遺構を中心に左京第484次調査の成果もあわせて報告する。

3 検出遺構

(1) 基本層序

A. 左京第102次調査

以前に隣接して行われていた左京第102次調査の基本層序は、耕作土（調査前に除去されていた）、灰褐色砂礫層（第1層）、淡灰色砂質土層（第2層）、茶褐色砂質土層（第3層）、黄褐色粘質土層（第4層）、青灰色粘質土層（第5層）、暗灰色粘質土層（第6層）の順に暗緑灰色粘土（第7層）のベースへ至る。第2層上面からは近代以降の土坑などが掘り込まれており、第5層には13世紀代の瓦器が、第6層には長岡京期の遺物が含まれていた。長岡京期、弥生時代の遺構はすべて第7層上面で検出されている。なお、左京第102次調査では調査区の北東隅で下層遺構の探査を目的に断ち割り調査が行われたが、第7層の下は遺物を含まない砂礫層が厚く堆積しており、安定した面は確認されていない。

B. 北調査区（第4図）

北調査区は左京第484次調査地の西壁基本層序を示す。上から第1層の盛土、第2層の耕作土、第3層の床土、第7層の淡黄灰色砂礫土、第8層の淡灰黄色シルト、第13層の淡茶灰色弱粘質土、第14層の暗茶灰色～黄灰色弱粘質土（マンガン含み）、第17層の淡灰色粘質土（砂含み）、第19層の淡灰褐色粘質土、第20層の淡灰茶色粘質土、第23層の暗灰褐色粘質土、第39層の淡黄褐色粘質土～淡緑灰色シルトに至る。左京第102次調査の基本層序のうち、中世遺物包含層の第5層が本調査の第14層、長岡京期遺物包含層の第6層が本調査の第23層に対応する。

C. 南調査区（第4図）

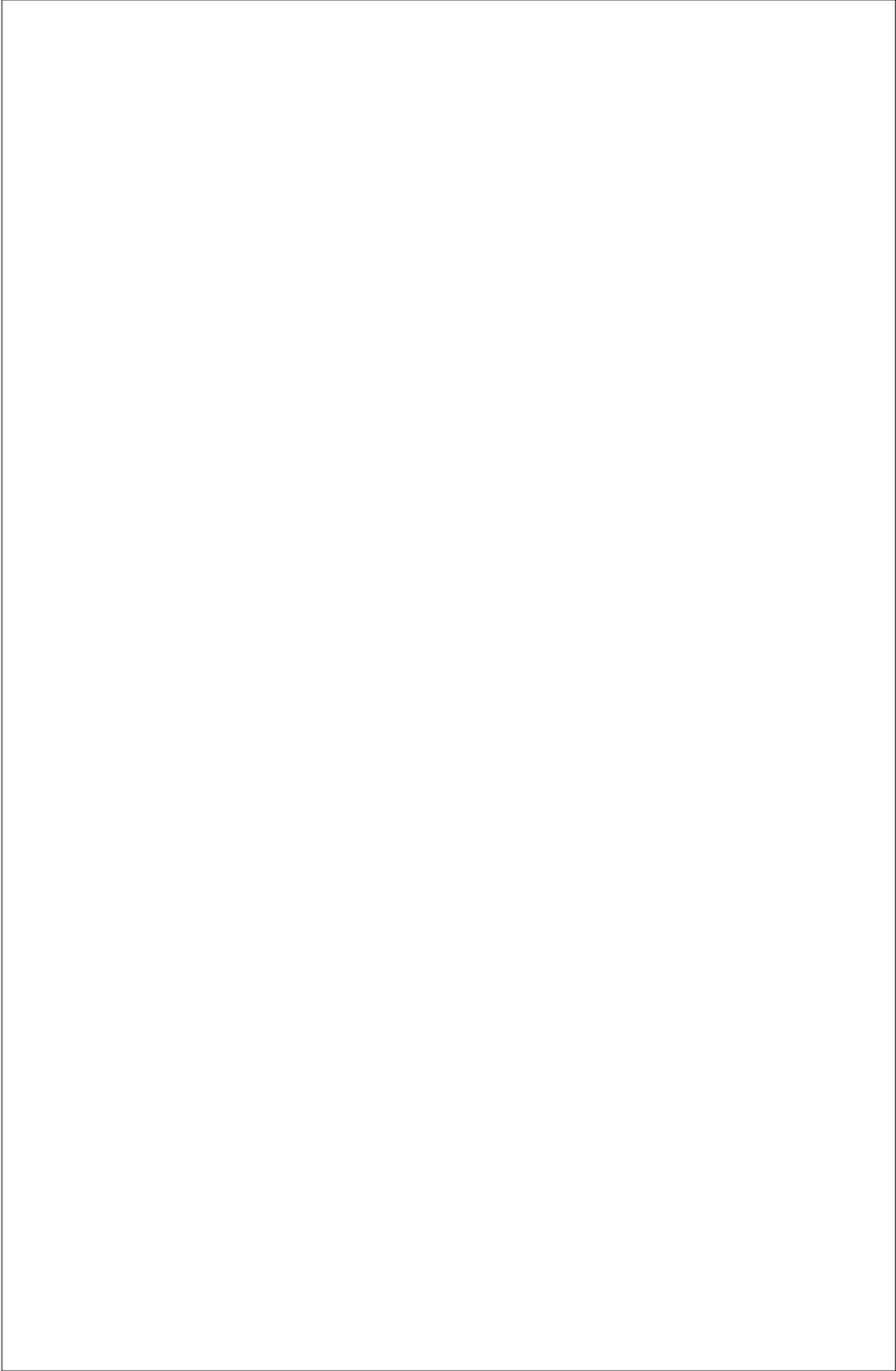
南調査区の南東部では上から第1層の盛土、第2・3層の耕作土、第4層の床土、第5層の淡灰黄色弱粘質土、第26層の暗茶灰色弱粘質土、第32層の淡茶褐色弱粘質土、第35層の暗茶褐色弱粘質土マンガン含み、第37層の淡灰茶色粘質土、第40層の淡黄灰色シルト～粘質土、第43層の濁淡灰茶色粘質土、第44層の淡灰黄色粘質土、第53層の淡黄灰色粘質土～淡緑灰色シルトに至る。第5層上面では近世以降の南北溝を確認している。第35層は中世遺物包含層と考えられ、少量ながら土師器小皿、瓦器椀などが含まれていた。また、第40層には長岡京期とともに平安時代の遺物が含まれている。第44層は長岡京期の遺物包含層であるが、出土遺物の量は調査区南半部が北半部に比べて多かった。長岡京期の遺構は全て第53層の上面で確認している。南調査区では第44層上面から約2.2m下、標高約10mまで断ち割り調査を行った。しかし、長岡京期の遺構面である第53層より下は非常に軟弱な堆積層が連続しており、湧水が激しい状態でもあり、遺構・遺物と

4 検出遺構

もに確認できなかった。北調査区との標高差は現地表面（第1層上面）で0.3m、長岡京期の遺構検出面である第53層上面では0.2mを測り、相対として北から南へ緩やかに傾斜する基盤地形を反映するものと考えられる。

第4 図土層名一覧

北調査区	南調査区
1 盛土	1 盛土
2 暗黒灰褐色弱粘質土<5B4/1>-耕作土	2 耕作土1
3 淡灰白色弱粘質土<N7/0>-床土	3 耕作土2
4 明茶褐色砂礫土<2.5YR4/6>	4 濁灰黄色弱粘質土<5Y6/1>-床土
5 淡灰色砂質土<10YR6/2>	5 淡灰黄色弱粘質土(砂質強し)<2.5Y7/2>
6 淡灰褐色~暗茶灰色砂礫土<N6/0>-流路SD30埋土	6 淡茶灰色砂礫土<2.5Y8/2>
7 淡黄灰色砂礫土<7.5Y7/2>	7 淡茶灰色弱粘質土(砂質強し)<2.5Y7/2>
8 淡灰黄色シルト(砂含み)青灰色粘土混り<7.5Y7/2>	8 淡茶褐色弱粘質土<7.5YR6/2>
9 淡灰黄色弱粘質土(砂混り)<N7/0>	9 淡黄緑灰色シルト<10YR6/6>
10 淡灰色弱粘質土(砂混り)<N7/0>	10 淡黄緑色シルト<10YR6/6>-近世溝
11 淡灰黄色砂礫土<5Y6/2>	11 濁黄灰色弱粘質土<2.5Y7/4>
12 淡灰黄色弱粘質土(砂含み)<7.5YR6/6>	12 暗茶灰色弱粘質土(砂礫含み)<10YR6/3>
13 淡茶灰色弱粘質土(砂含み)<10YR6/2>	13 暗茶褐色砂質土<7.5YR4/3>
14 暗茶灰色弱粘質土(マンガン含み)<10YR6/2>-中世包含層	14 淡黄灰色~緑灰色弱粘質土<10YR5/4>
15 暗黄灰色弱粘質土(砂・マンガン含み)<7.5YR6/6>	15 暗黄灰色~緑灰色砂礫土<10YR5/4>
16 淡灰褐色弱粘質土(砂混り)<N6/0>	16 淡黄灰色~緑灰色砂質土<10YR6/3>-近世溝
17 淡灰色粘質土(砂含み)<N6/0>	17 淡茶灰色シルト<7.5YR7/1>
18 暗灰褐色弱粘質土(砂混り)<N6/0>	18 淡灰黄色弱粘質土(礫含み)<2.5Y7/2>
19 淡灰褐色粘質土<2.5Y6/1>	19 淡茶灰白色弱粘質土<10YR6/3>
20 淡灰褐色粘質土(黄色土塊含み)<2.5Y6/1>	20 淡灰黄色砂質土<2.5Y7/2>
21 淡灰色粘質土(砂混り)<N5/0>-中世包含層	21 淡黄灰白色砂質土<2.5Y7/2>
22 暗茶褐色砂質土<7.5Y5/4>-礫敷遺構SX32	22 暗茶灰色砂質土<10YR6/3>
23 暗灰褐色粘質土<10YR6/1>-長岡京期包含層	23 淡黄褐色~緑灰色砂質土<10YR6/3>
24 淡茶褐色弱粘質土(砂混り)<7.5Y5/4>	24 暗茶褐色砂~灰白色シルト<10YR3/4>
25 暗灰色粘質土<10Y6/1>	25 淡茶灰色弱粘質土(砂質強し)<2.5Y7/2>
26 淡黒灰褐色粘質土(砂混り)<10YR5/1>-獣骨出土部分	26 暗茶灰色弱粘質土(砂質強し)<10YR6/3>
27 暗灰褐色粘質土<N4/0>-溝SD35埋土	27 暗黄緑灰色シルト礫混り<10YR6/6>
28 暗灰褐色粘質土<N4/0>-溝SD36埋土	28 暗茶灰色弱粘質土(砂質強し)<2.5Y7/2>
29 暗灰褐色粘質土<N4/0>-溝SD37埋土	29 淡黄緑色砂礫土<10YR6/6>
30 暗灰褐色粘質土<N4/0>-溝SD38埋土	30 暗黄緑色シルト<10YR5/3>
31 暗灰褐色粘質土<N4/0>-溝SD39埋土	31 淡茶灰白色弱粘質土<10YR6/6>
32 暗灰褐色粘質土(砂混り)<N4/0>-溝SD40埋土	32 淡茶褐色弱粘質土(鉄分・マンガン含み)<10YR5/3>
33 暗灰褐色粘質土<N4/0>-溝SD41埋土	33 淡黄灰色粘質土<10YR6/6>
34 暗灰褐色粘質土<N4/0>-溝SD42埋土	34 暗青灰褐色粘質土<10BG6/1>
35 暗灰褐色粘質土<N4/0>-溝SD45埋土	35 暗茶褐色弱粘質土(マンガン多し)<10YR6/3>-中世包含層
36 暗灰褐色粘質土<N4/0>-土坑SK48埋土	36 暗黄灰色粘質土<10YR6/6>
37 暗灰褐色粘質土(砂混り)<N4/0>-溝SD50埋土	37 淡灰茶色粘質土(砂含み)<10Y6/6>
38 淡青白色~緑褐色粘質土<10G7/1>-長岡京期遺構面	38 淡灰茶色弱粘質土<7.5YR7/1>
39 淡黄褐色~緑灰色粘質土<10YR7/8~10Y7/2>-長岡京期遺構面	39 淡灰褐色粘質土<2.5Y6/1>
	40 淡黄灰色シルト~粘質土<10YR6/6>-平安時代包含層
	41 淡灰茶色粘質土<5BG6/1>
	42 淡灰黄茶色粘質土<5BG6/1>
	43 濁淡灰茶色粘質土<5BG6/1>-長岡京期包含層
	44 淡灰黄色粘質土(鉄分多し)<5BG6/1>-長岡京期包含層
	45 淡青灰色粘質土<10BG6/1>-土坑SK12埋土
	46 暗青灰色粘質土(炭混り)<10G6/1>-土坑SK12埋土
	47 暗灰褐色粘質土<10BG6/1>-溝SD23埋土
	48 淡黄灰色シルト<2.5Y7/6>-井戸SE05埋土
	49 淡灰色粘質土<5BG6/1>-井戸SE05埋土
	50 淡緑黄灰色シルト<10Y7/2>-井戸SE05埋土
	51 淡灰褐色粘質土<5BG6/1>-長岡京期溝埋土
	52 淡灰白色粘質土<2.5Y8/1>-長岡京期溝埋土
	53 淡黄灰色粘土~淡緑灰色シルト<10Y7/2>-長岡京期検出面



第 4 図 調査区土層断面図 (1/100)

(2) 検出遺構

A. 近世以降の検出遺構

(a) 北調査区

自然流路SD30 (第4図) 調査区の北西部で自然流路を1条検出した。流路の方向は北西から南東方向で、流路は耕作土、床土直下の第7層から掘り込まれている。流路堆積の最も深い部分は長岡京期の遺構検出面である第39層にまで達していた。流路堆積層(第6層)は砂利・粗砂が主体を占めるが、少量ながらも拳大の礫が含まれていた。

(b) 南調査区

南北溝 (第4図) 壁面観察において調査区を南北に貫く溝を3条確認している。溝は耕作土・床土直下の第5層から掘削されており、水田耕作に伴う近世以降の素掘り溝と考えられる。

B. 平安時代前後の検出遺構

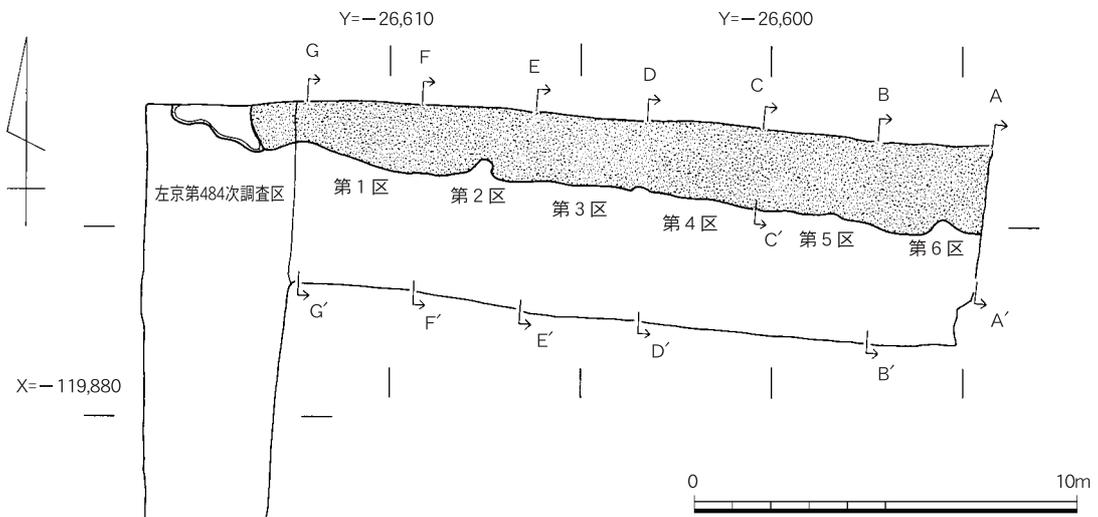
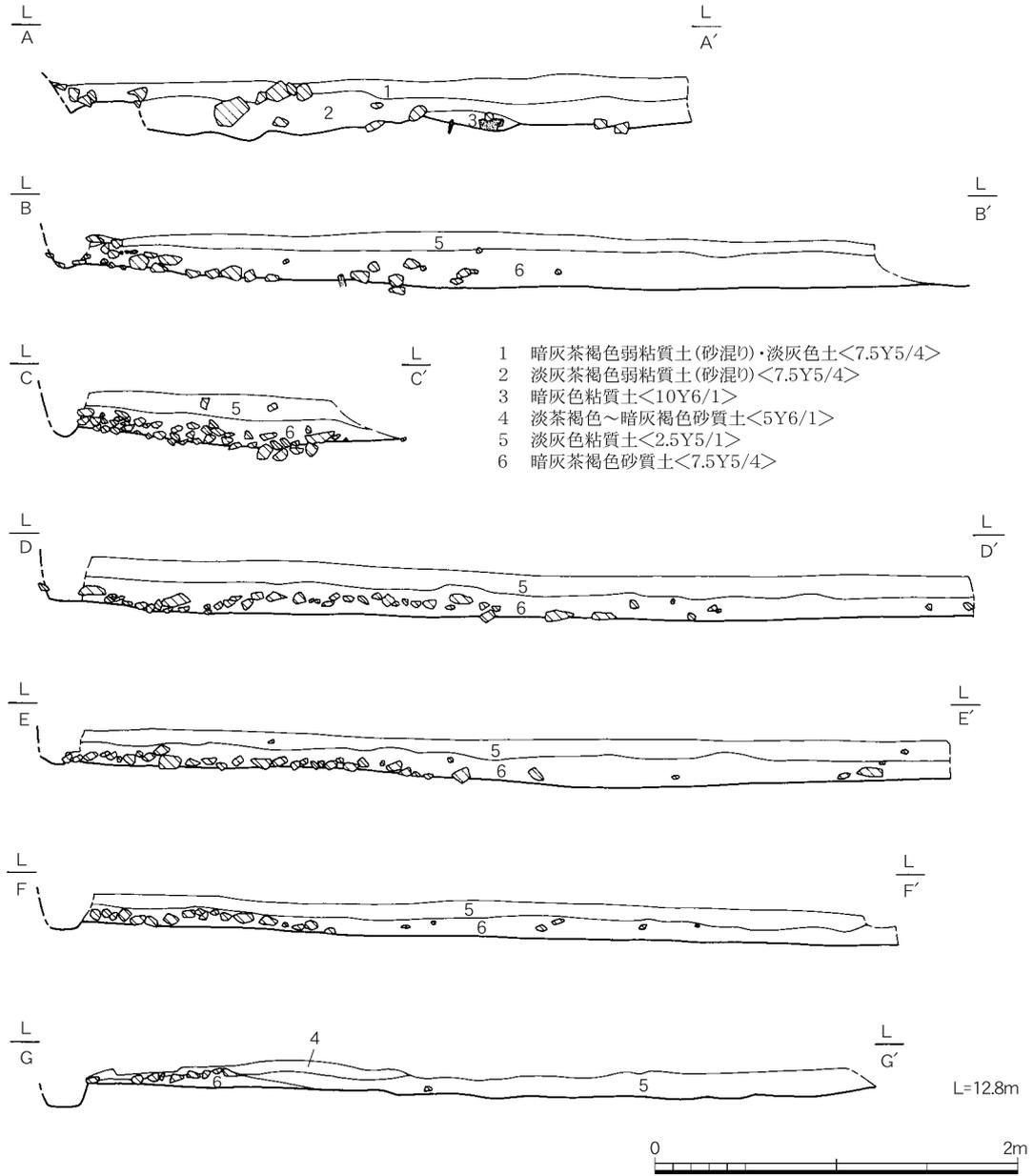
北調査区

礫敷遺構SX32 (第5～9図、付表-1～4) 調査区の北半部で礫の密集する状況を確認した。この遺構は左京第102次調査区の北端で確認されていた礫敷遺構SX10217に連続する。左京第484次調査区では礫敷が途切れる状況を確認しており、この部分を西限とした場合、礫敷遺構は左京第102次調査と併せて東西22m以上、南北約2.5mの範囲に及ぶものと考えられる。しかし、西限と想定した範囲は自然流路SD30の影響を受けており、礫敷遺構の西限がさらに西側に存在する可能性も残されている。

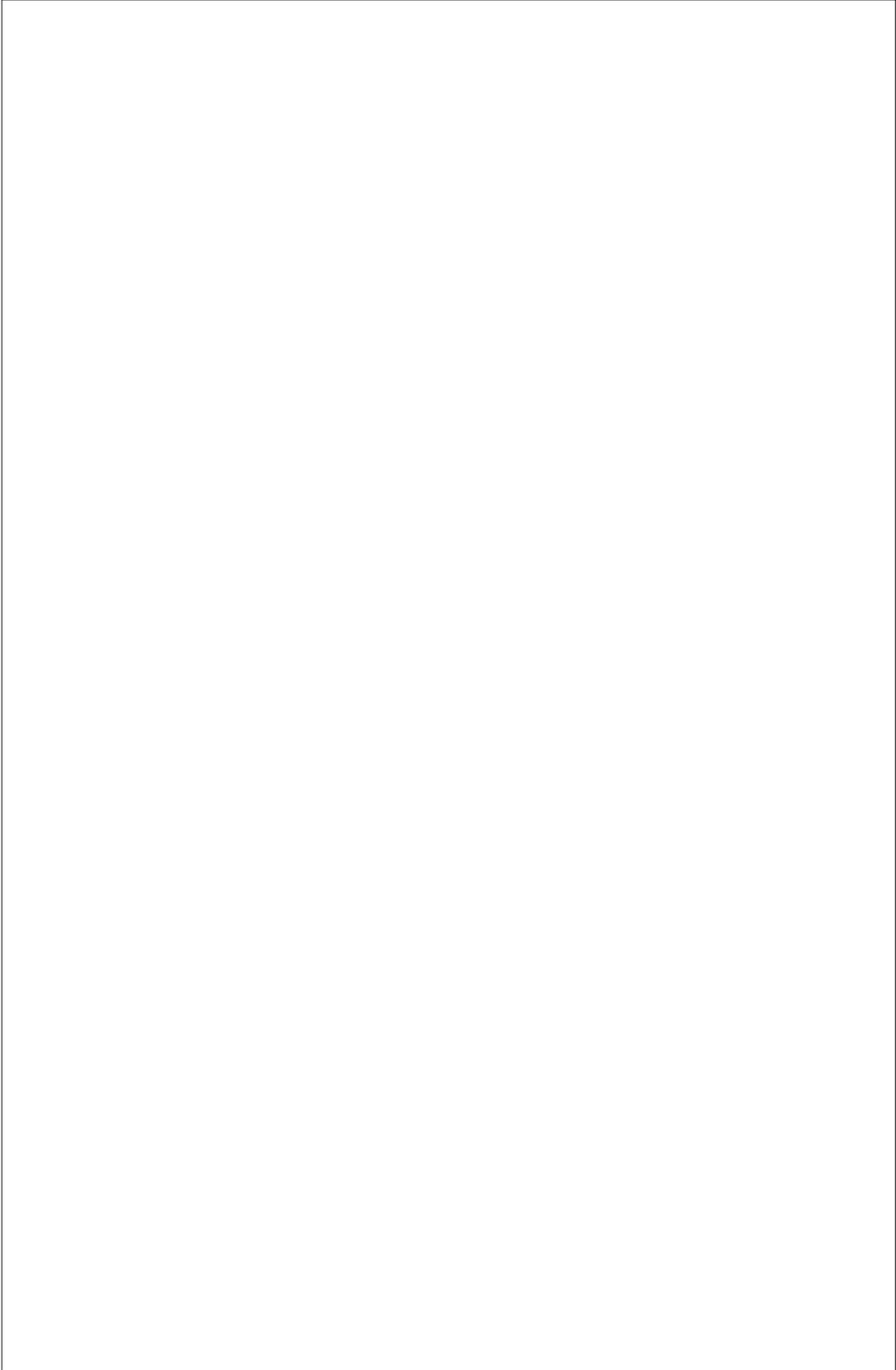
礫敷遺構SX32は明確な掘り込みを伴っておらず、とくに本調査では南辺のみの確認となったため、原位置を保つ礫の特定が非常に困難であった。原位置としたものは礫の密集具合、後述する細砂層との関連、そして礫検出作業中に確認した杭列との位置関係などから判断した(第7図)。礫敷遺構は単に礫だけで構成されているのではなく、選ばれた細砂が礫と礫の間を埋めるように認められ、細砂層が複数の礫層の間に充填されている部分も確認できた(第5図)。また、礫の直下や細砂層には棒材や板材を敷いた部分も認められる。一方、礫敷の上面は平坦ではなく、複数の礫層が波状の起伏を形成する部分、また、より細部を見れば雁行状に配された礫列も認めることができる。複数の礫層が厚く施され、礫敷内部に棒材や板材を伴い、波状・雁行状の礫配置が認められるのは礫敷遺構SX32の東半部に限られるもので、西半部の造作は平面的でより単純な構築状況であった。礫敷は西から東へ傾斜しているが、東西18m内の比高差は上面で0.15m、下面では0.25mを測る。東西で礫敷の状況が異なる要因として、ベース面が高い西側まで礫敷の上面を揃えるための嵩上げが想定できる。また、周辺地域を含めた滞水状況や地盤の軟弱さなどの影響も考慮しなければならないだろう。

礫敷遺構は礫と細砂からなる基本構造などから、東側ないし南東側への排水を効率的に行い、恒常的な滞水地盤を改善するために築かれたものと考えられる。礫敷遺構を覆う淡灰色粘質土には中世の土師器、瓦器や獣骨が含まれており、左京第102次調査の知見を考慮すれば礫敷遺構は中世段階に構築された可能性が想定される。しかし、礫敷遺構SX32の礫を完全に除去した段階で、

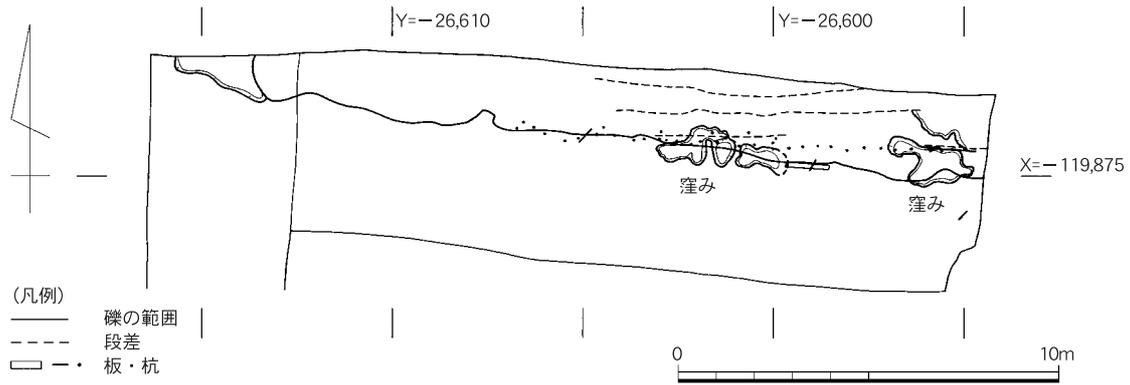
8 検出遺構



第5図 磔敷遺構SX32断面図 (1/40・1/200)



第 6 図 礫敷遺構 S X32実測図 (1/40)



第7図 磔敷遺構SX32杭・段差・窪み実測図 (1/200)

調査区の東半部では磔間に施された細砂と同様な土で埋められた窪みが確認され (第7図)、この窪みから平安時代中期の緑釉陶器が出土している。また、本調査区の磔敷遺構SX32は上層からの明確な掘り込みを確認することができず、長岡京期の溝群とはほぼ同じ面から築かれたと考えられる。磔敷遺構の構築時期を平安時代と考えた場合、淡灰色粘質土から出土した大量の中世遺物は後世の耕作に伴う攪拌によって磔と混ざり合ったものと想定できる。しかし、周辺調査では、これまでに平安時代の遺構がほとんど確認されていない。磔敷遺構の構築時期や性格をより厳密に解明するためにも、調査区より北側や東側における調査成果が待たれるところである。

磔敷遺構SX32では北調査区の西壁から東へ6 mまでの第1・2区 (左京第484次調査区を除く) と、東壁から西へ6 mまでの第5・6区の磔を全て取り上げている。付表-1は、磔の洗浄後に行った磔長軸の計測結果をまとめたものである。磔の総数は東側の第5・6区が西側の第1・2区に対して約1.5倍多く、より低い部分に大量の磔が投入されたことが分かる。しかし、長軸5 m毎の分布を見れば、20 mまでの磔の比率には有意な差を認めることができず、特に大振りな磔を選択して用いた状況は窺えない。ただし、第5・6区では20 mを超える巨磔があるのに対し、第1・2区は全て20 mまでのもので構成される点を指摘できる。

本調査の最終段階では、磔敷遺構SX32について (財) 向日市埋蔵文化財センターの中塚良氏に実見いただいた。その結果、第1・2区と第5・6区の磔種に大きな違いが認められないこと、磔種構成はチャートが過半を占め次いで砂岩が用いられていること、少量ながらも頁岩、泥岩、緑色岩なども認められることが明らかとなった (付表-2)。また、磔表面の風化具合や長軸が10 mまでの磔が大部分を占めることなどから、これらが小畑川の中・上流域のものであり、採石地点においてある程度選別された上で下流域にあたる当地へ運搬されてきたものと考えられる。

磔数の少ない西側の第1・2区では、磔の重量を計測することができた。計測方法は磔をチャート、砂岩、その他の3種類に分類し整理箱に詰めたものを1箱ずつ計測し、その値から整理箱の重さを除いた上で合算するというものである。第1・2区の磔敷設範囲は8.2 m程度であり、この部分に用いられた磔の全重量は約393kgを測る (付表-3)。また、磔種ごとの重量比はチャート52.4%、砂岩34%、その他が13.6%であり、付表-2に示した磔個数の比率とほぼ同じ値が得られている。

付表-1 礫長軸の分布

	1～5 cm	6～10	11～15	16～20	21～25	26～30	31～35	36～40	41～45
第1・2区	961	896	238	21	0	0	0	0	0
比率	45.4%	42.3%	11.2%	1.0%	0	0	0	0	0
第5・6区	1692	1129	353	45	4	3	3	0	1
比率	52.4%	35.0%	10.9%	1.4%	0.1%	0.1%	0.1%	0	0.1%未満

付表-2 礫種構成

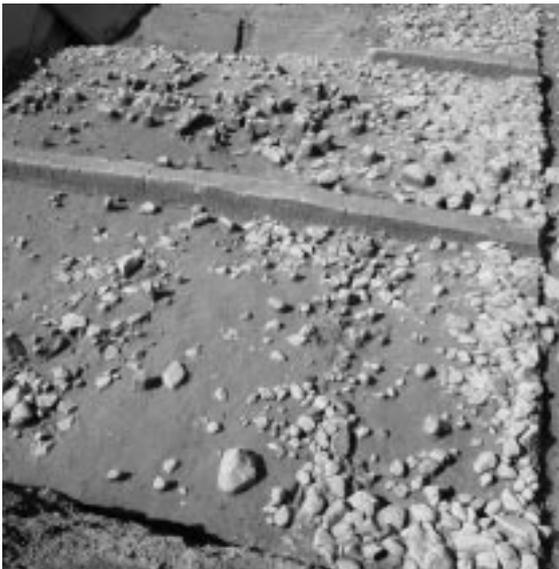
	チャート	砂岩	その他不明	合計
第1・2区	1081	763	272	2116
比率	51.1%	36.1%	12.9%	
第5・6区	1531	1217	482	3230
比率	47.4%	37.7%	14.9%	

付表-3 第1～2区礫種別重量

礫種	重さ(kg)	比率
チャート	205.78	52.4%
砂岩	133.64	34.0%
その他	53.32	13.6%
合計	392.74	

付表-4 各区礫敷の面積と体積

	L484区	第1区	第2区	第3区	第4区	第5区	第6区	L102区	合計
面積()	1.36	3.81	4.40	4.83	5.47	4.87	3.44	15.78	43.96
体積()	0.06	0.17	0.21	0.40	0.64	0.52	0.50	1.63	4.13
体積/面積	0.04	0.04	0.05	0.08	0.12	0.11	0.15	0.10	0.09



第8図 第4～6区礫検出状況(東から)



第9図 第6区礫と杭・板(東から)

付表-4では左京第102次調査区、本調査第1～6区、左京第484次調査区の礫が施された面積と、礫の厚さから得られた体積を示した。これまでに検出した礫敷遺構の総面積は43.96、そして推定体積は4.13にのぼる。礫敷の推定体積は左京第102次調査区が最も大きい、単位面積あたりの推定体積を比較すれば、本調査第6区が最も大きく、第4区から東により厚く礫が施されたことが分かる。左京第102次調査区より西側の礫敷遺構推定範囲は55程度と考えられる。これに単位面積あたりの平均体積0.09を乗すれば、この範囲に投入された礫の総量は4.95と予想できる。しかし、礫敷遺構は中世前後の耕作などに伴ってある程度の高さまで削平を受けている。また、礫間に施された細砂や材木などの構成材をも考慮すれば、礫敷遺構の構築に際してさらに多くの作業量が投入されたことは想像に難くない。

C. 長岡京期の検出遺構

(a) 概略

北調査区と左京第484次調査では溝13条、土坑1基、轍2条、柱穴を確認しており、溝を中心とする検出遺構は複雑に重複していた。これらの遺構は一時期のものではなく、その重複関係から最も新しい段階の東西溝SD40から古い段階の轍跡SD46・47まで4段階に分かれるものと考えた。一方、南調査区の検出遺構には井戸1基、土坑1基、溝12条、轍跡9条、柵3条、柱穴数基がある。検出遺構はおもに調査区の南半に集中しており、北半部では溝、轍跡に限られていた。これらの検出遺構についても北調査区と同様に、主に調査区を南北に貫く溝SD10・11・23・24との重複関係から以下の4段階に分けることができる。なお、調査区の北部で確認した柱穴は前述の溝より古い段階のものである（付表-5）。

付表-5 長岡京期検出遺構一覧表

北調査区・左京第484次調査区				南調査区				
時期	遺構番号	位置	遺構の方向	時期	遺構番号	位置	遺構の方向	
1期	溝SD40	X = -119,873.0	東西	1期	井戸SE05	Y = -26,603.1	—	
2期	溝SD33	Y = -26,598.1	南北			土坑SK12		Y = -26,605.5
	溝SD34	Y = -26,599.7	南北		柵SA06		Y = -26,602.1	南北3間
	溝SD35	Y = -26,603.2	南北			柵SA07	Y = -26,603.3	南北2間
	溝SD36	Y = -26,605.5	南北		柵SA08	X = -119,921.0	東西2間	
	溝SD37	Y = -26,607.7	南北		溝SD09	X = -119,920.6	東西	
	溝SD38	Y = -26,610.0	南北		溝SD20	X = -119,920.8	東西	
	溝SD39	Y = -26,609.0	南北		溝SD21	X = -119,917.9	東西	
	溝SD41	Y = -26,612.7	南北		溝SD22	X = -119,914.5	東西	
	溝SD42	Y = -26,615.0	南北		2期	溝SD10	Y = -26,606.6	南北
2期以前	土坑SK48	Y = -26,616.0	—			溝SD11	Y = -26,603.3	南北
3期		X = -119,872.7				溝SD23	Y = -26,613.7	南北
	溝SD43	Y = -26,614.0	南北			溝SD24	Y = -26,617.4	南北
3・4期	溝SD44	Y = -26,615.5	南北		3期	溝SD03	X = -119,908.8	東西
	溝SD45	X = -119,880.3	東西	建物SB19		Y = -26,608.6	東西棟	
4期	轍SD46	X = -119,876.1	東西			X = -119,906.0		溝SD25
	轍SD47	X = -119,877.0	東西	溝SD26		X = -119,906.3	東西	
4期				溝SD27		X = -119,903.6	東西	
				溝SD28		X = -119,901.5	東西	
				轍SD01		X = -119,894.9	東西	
				轍SD02		X = -119,896.5	東西	
				轍SD04	Y = -26,613.1	斜行		
				轍SD13	Y = -26,608.0	斜行		
				轍SD14	Y = -26,611.1	斜行		
				轍SD15	X = -119,907.0	東西		
				轍SD16	X = -119,907.2	東西		
				轍SD17	X = -119,908.5	東西		
轍SD29	X = -119,905.3	東西						
溝SD31	X = -119,915.2	東西						

注記（遺構座標値の計測位置）
 南北溝 溝の北端ないし調査区北壁
 東西溝 調査区西壁
 東西方向の轍 調査区西壁
 斜行方向の轍 轍の北端

(b) 北調査区

1期

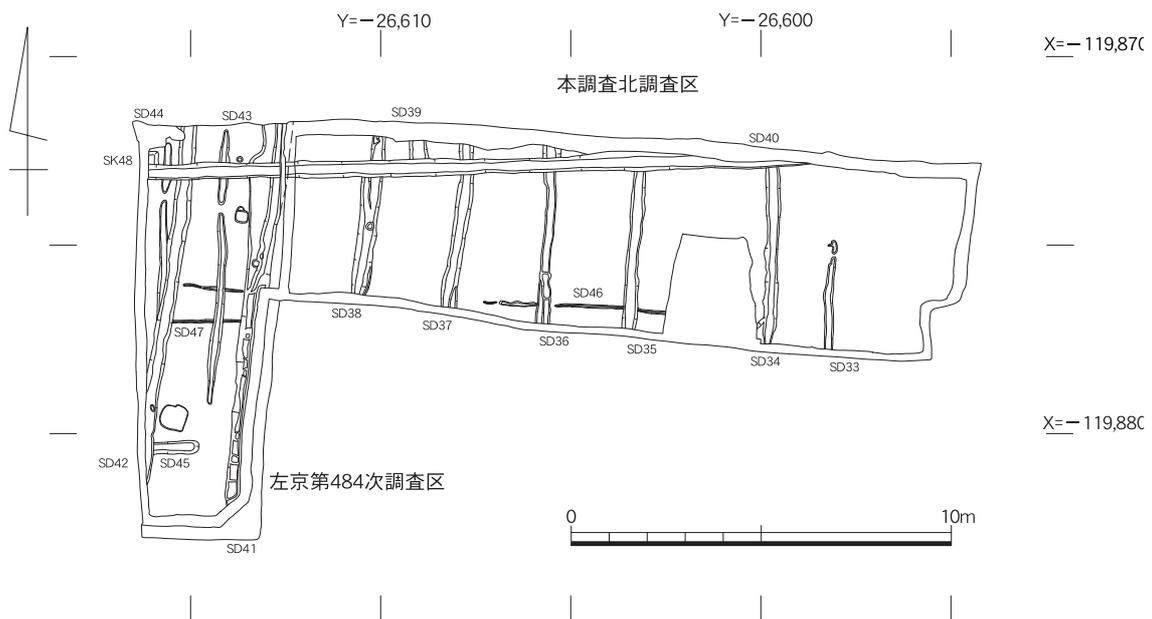
溝SD40 (第11図) 北調査区から左京第484次調査区の北辺を東西に貫く溝で、約15mにわたって確認することができた。溝は同一面で確認した他の遺構を切って構築されており、北調査区で最も新しい1期のものである。溝は幅0.3~0.5mで、溝底部は緩やかに西から東側へ傾斜していた。溝の断面形状は逆台形に近く、深さ0.1~0.3mを測る。溝SD40はほぼ真東西方向に配されており、後述の溝群はいずれもやや振った方向を示す。溝SD40の東端部からは須恵器杯Aの底部に「大」と墨書された土器が出土している。また、埋土には少量ながらも植物種子が含まれていた。溝SD40の埋土は灰褐色系を呈し炭化物の細片が多数含まれている。また、部分的ではあるが遺構面の土色に似た灰色土の粘土塊が含まれていた。

左京第102次調査では溝SD40の東側延長線上の範囲が調査されているが、礎敷遺構の範囲と重複しており溝は確認されていない。

2期

溝SD33~39・41・42 (第12図) 北調査区・左京第484次調査区では重複関係を持たない南北溝9条を確認した。これらの南北溝群を一時期のものとは断定できない。しかし、いずれも溝SD40に切られており、真北に対して8°前後東へ振る方向や溝底が北から南への傾斜、埋土の特徴など共通する要素が認められる。また、南北溝群のうち溝SD42が後述の溝SD44を切ることから、ここでは一括して2期の遺構としている。ただ、南北溝群相互の位置関係には規則性は認められず、溝心々間の距離は東の溝SD33から順に約1.7、3.6、2.3、2.3、1.6、0.9、2.6、2.8mと不揃いであった。

溝SD41・42は溝SD33~39に比べて幅広に掘削されており、とくに溝SD41の北半部は二段掘り状を呈していた。



第10図 北調査区长岡京期検出遺構図 (1/200)

溝SD34は調査区の南壁付近でやや西寄りに方向を変えており、左京第102次調査の溝SD30と一連の溝であることが分かる。

土坑SK48 (第10図) 左京第484次調査区の北西隅で確認した土坑で、さらに北西側に続いており、規模や形状など詳細は明らかにできなかった。溝SD40に切られているが、その他の遺構と重複関係を持たないため、2期以前のものと考えた。

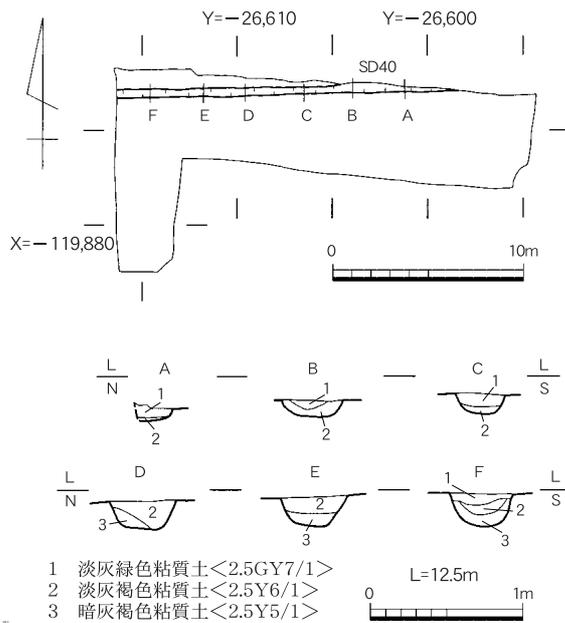
3期

溝SD43・44 (第10図) 左京第484次調査区で確認した小規模な南北溝で、幅0.15m前後、深さは0.1mに満たない。溝SD43・44の方位は北で東へ5°振っており、約1.5mの間隔で配されていた。西側の溝SD44が南北溝SD42に切れ、後述の轍SD47を切ることから3期の遺構とした。溝底は南へ向かって緩やかに傾斜している。

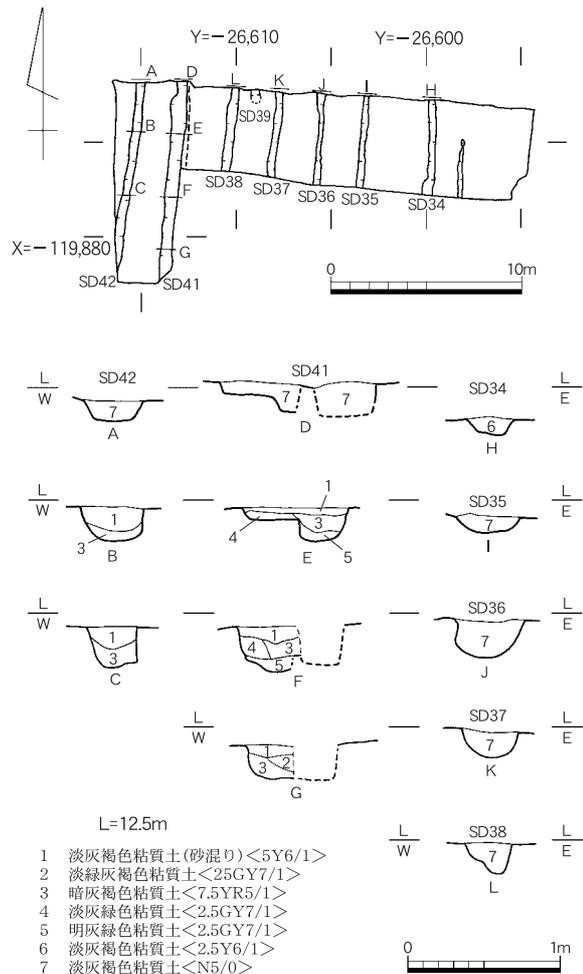
溝SD45 (第10図) 左京第484次調査区の南側で確認した東西溝である。溝は幅0.3m程度で深さ約0.2mを測る。溝SD42によって切られていたが、溝SD43・44や轍との重複関係を有さないため、仮に3期から4期のものとした。溝SD45は左京第102次調査の溝SD35に連続するものと考えられる。

4期

轍SD46・47 (第10図) 本調査の北調査区と左京第484次調査では東西方向の轍2条を検出した。轍の方向は西で北へ3°程度振っており、後述する南調査区の轍群のなかには共通する方向のものも認められる。轍SD46・47の間隔は約0.8mを測る。



第11図 溝SD40土層図 (1/50・1/400)



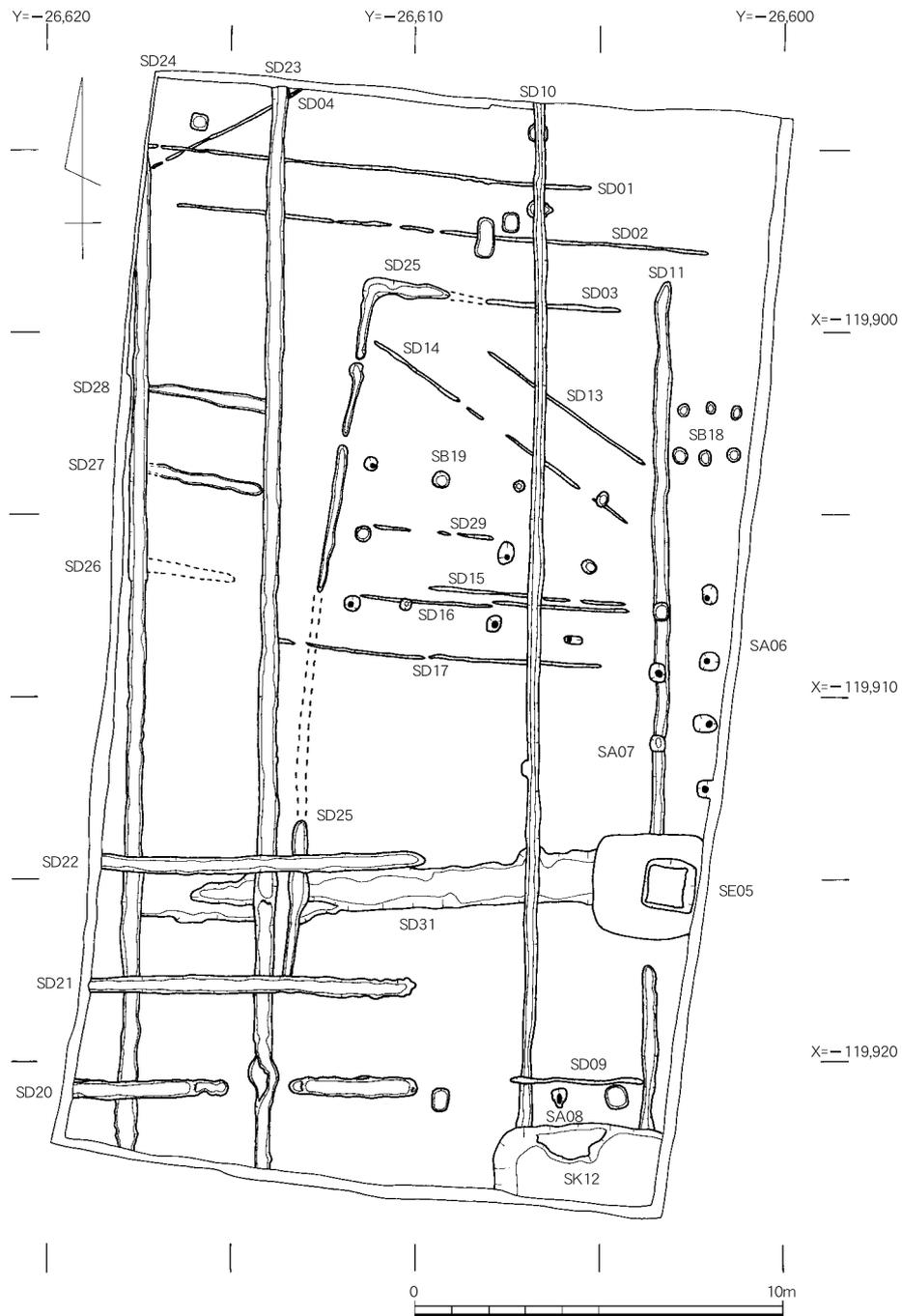
第12図 溝SD34~38・41・42土層図 (1/50・1/400)

(c) 南調査区

1期

井戸SE05（第14～16図、付表-6） 調査区東辺の南側で検出した井戸で、南北溝群との重複関係より最も新しい段階の遺構であることが分かる。以下、井戸上面の窪み、井戸側（底部の状況を含む）、井戸掘形、井戸側部材に分けて順に記述を行なう。

井戸上面の窪みは井戸側抜き取り坑と考えられ、平面形態は楕円形を呈する。南北1.6m、東西1.7m以上、深さ0.5m程度を測り、埋土には炭化物が多く含まれていた。また、窪みからは多くの

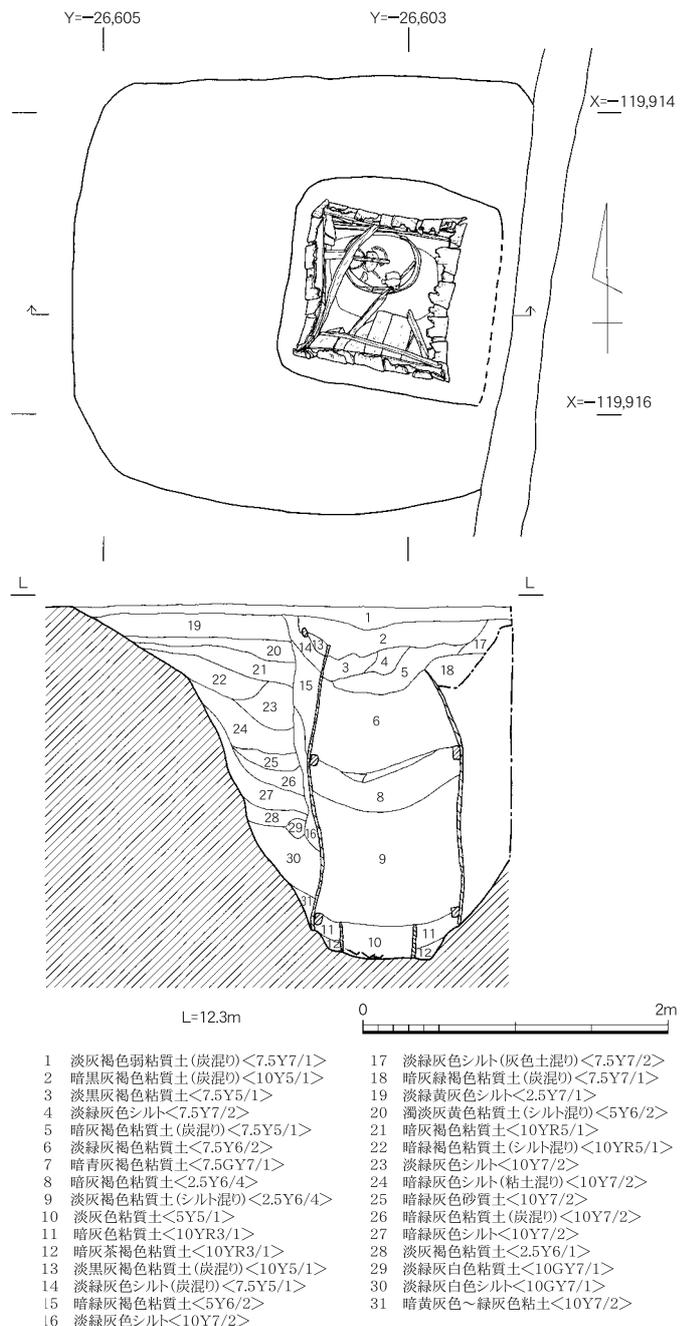


第13図 南調査区长岡京期検出遺構図 (1/200)

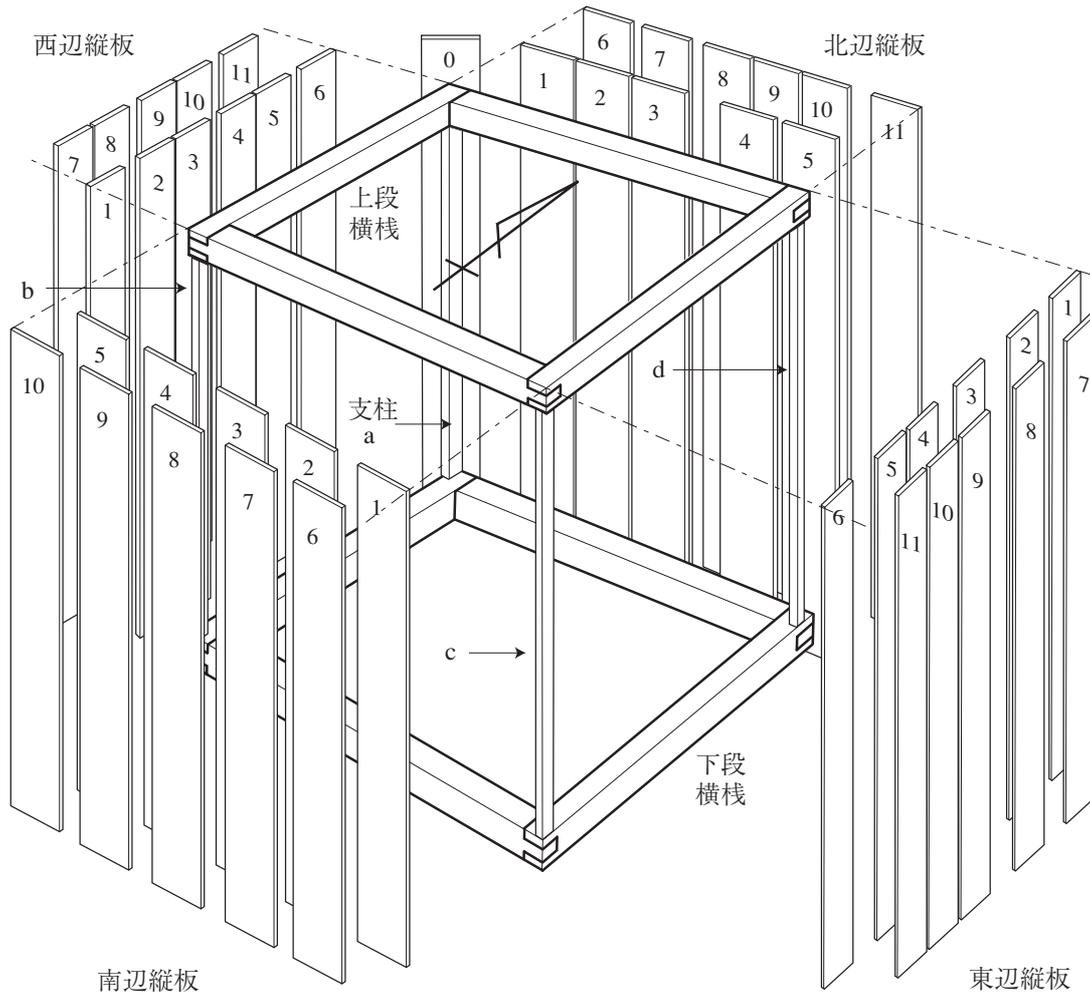
遺物が出土しており、なかでも製塩土器の割合が目立った。窪みは後述の井戸側中心よりも東側へ寄っており、井戸側の抜き取りが東側、東一坊坊間大路側へ試みられたことが分かる。

井戸側は内法0.9mの縦板組横棧どめ形式で、四隅には上下の横棧の間に細い支柱が設置されていた。残存する縦板の長さは上端から最下部まで最大2m、幅0.13~0.18m、厚さ1 前後を測る。横棧は上下2段を確認した。長さ0.9m、太さ4~9 の長方形材で、上下段の横棧の設置間隔は1.1mであった。井戸側は周囲からの土圧で内側に膨らんでおり、上段の横棧は高低差が0.2mを測るまで歪み、下段では南辺の棧が破損していた。また、4本の支柱のうち、北西と南西の支柱は本来の位置から大きく外れた状態で確認されている。井戸底部は円形に窪んでおり、検出面から底部中央までの深さは2.3mを測る。井戸底部の北西寄りには長軸0.5mの曲物が据え置かれており、水溜め用の設備と考えられる。井戸側内の埋土は淡緑灰褐色粘質土（第6層）から底部の窪みに堆積した暗灰茶褐色粘質土（第12層）まで、7層（曲物内の埋土含む）に大別することができる。井戸側内の埋土からは、中位にあたる第8層より須恵器甕の破片がまとまって出土した。また、第9層の下位では完形の土師器皿A・皿C、須恵器杯Bが、井戸の底部に据え置かれた曲物内からは完形の土師器皿Aや須恵器の壺蓋、壺Gなどが出土している。

井戸掘形は南北2.9m、東西3m以上の隅円方形を呈し、底部は井戸側縦板の下端より10 高い位置まで掘り下げられていた。井戸掘形埋土の最上層は緑黄灰色シルトであり、僅かに土師器、須恵器、製塩土器の破片が含まれている。暗灰褐色粘質土より下には緑灰色シルト・粘質土、灰褐色粘質土、黒茶灰色粘質土などが複雑に堆積していたが、遺物はほとんど含まれていなかった。



第14図 井戸SE05実測図 (1/50)



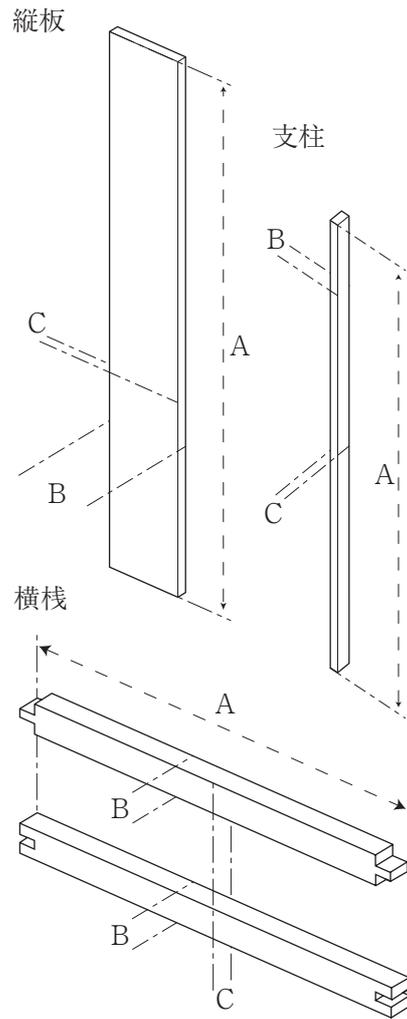
第15図 井戸SE05井戸側部材模式図

付表-6 井戸SE05井戸側部材法量表 (単位は)

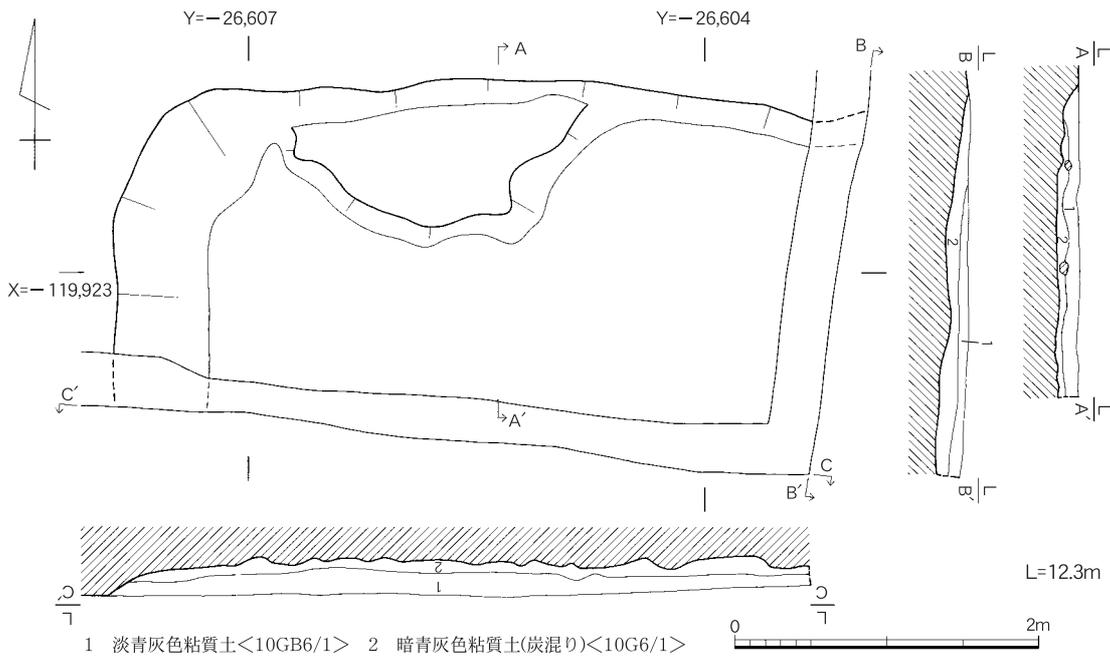
部材	位置	番号	A	B	C	備考	位置	番号	A	B	C	備考
横棧	上段	北	100	8	5	両端部出納	下段	北	100	8	4	両端部出納
		西	100	8	4.5	両端部入納		西	100	8	4.1	両端部入納
	南	100	8	5	両端部出納	南		100	7.5	4	両端部出納	
	東	100	9	4.6	両端部入納	東		100	8	4.2	両端部入納	
支柱	a	98	2	1.8		c	101	2.4	2			
	b	96	3.9	1.5		d	102	2.2	2.2			
縦板	北辺	1	168	13	0.5		南辺	1	191	14	0.7	
		2	176	18	1	下端両側を斜めに切り欠く		2	199	17	1.6	下端を斜めに切り欠く
		3	158	15	0.8			3	192	18	1.2	下端両側を斜めに切り欠く
		4	163	16	1			4	197	12	3.4	
		5	155	15	0.7	下端両側を斜めに切り欠く		5	159	16	1.3	
		6	184	15	1	下端両側を斜めに切り欠く		6	160	13	0.5	下端を斜めに切り欠く
		7	175	16	0.5	下端両側を斜めに切り欠く		7	206	16	2.2	
		8	170	14	1.2	下端を斜めに切り欠く		8	179	13	1.5	下端両側を斜めに切り欠く
		9	171	18	0.8	下端を斜めに切り欠く		9	198	14	0.3	
		10	163	13	0.6			10	161	14	0.7	下端を斜めに切り欠く
		11	166	14	1	下端両側を斜めに切り欠く						
	西辺	1	200	13	1.1		東辺	1	150	13	0.3	
		2	188	18	0.4			2	158	13	0.9	
		3	195	18	0.7	下端両側を斜めに切り欠く		3	166	14	1.1	
		4	188	16	1.2			4	198	16	0.5	下端両側を斜めに切り欠く
		5	174	17	0.3			5	167	13	0.6	
		6	168	16	0.3			6	188	14	1	
		7	186	15	0.5			7	178	13	0.8	下端両側を斜めに切り欠く
		8	184	13	0.6			8	179	18	0.3	
		9	174	17	0.8			9	177	15	0.5	
		10	195	17	1.4			10	180	14	0.4	
		11	185	16	1.1			11	177	15	0.5	
						隅	0	175	16	1		

井戸SE05では南調査区の調査最終段階に断ち割りをを行い、井戸側部材の観察と取り上げを行った。第15図には井戸SE05の井戸側構造を模式的に示し、付表-6に構成部材それぞれの法量を表記している。これら部材には転用材であることが分かるものは認められなかった。

横棧部材には両端が出柄のものが入柄のものがある。上下段の横棧はともに南北辺に出柄材を用いて構築されており、いずれも長さ1mに切り揃えられていた。支柱は最も太いものでも一辺4cm未満であり、四隅の支柱で上段横棧の重量を支えていたとは考えにくい。このため、横棧を縦板の側面圧力によってある程度設置、固定した後、補助的に施したものと考えられる。縦板は合計44枚を数える。縦板の枚数は南辺に限り10枚であったが、基本的に各辺11枚を用いる部材構成であったと推定できる。北西隅には1枚だけ縦板が配されるが、縦板が既に組み立てられた横棧に対して外側から設置された場合、この材の検出状況は北および西辺の縦板より後に設置されたと判断できる。なお、北西隅を除き各辺隅の縦板は他辺と重複しておらず、設置の前後関係は分からなかった。各辺の縦板は二重に設置されており、内側縦板の隙間や隣接する縦板の背後を埋めるように外側の縦板が配されている。

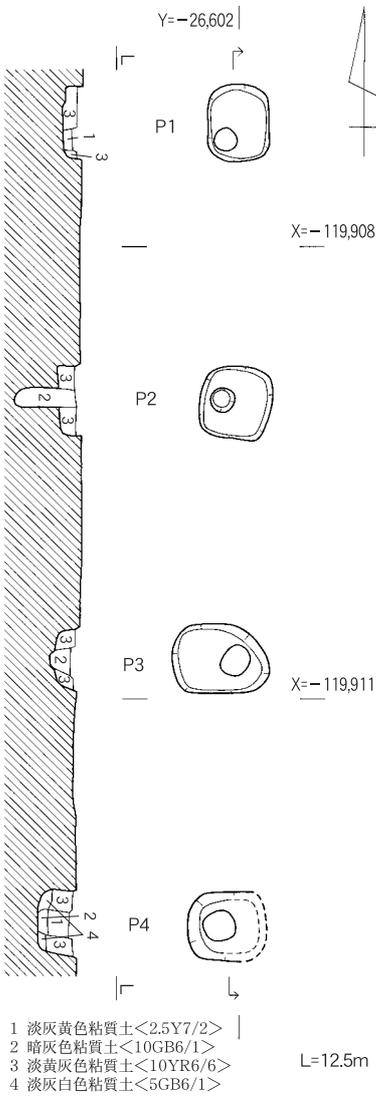


第16図 井戸側部材法量計測図



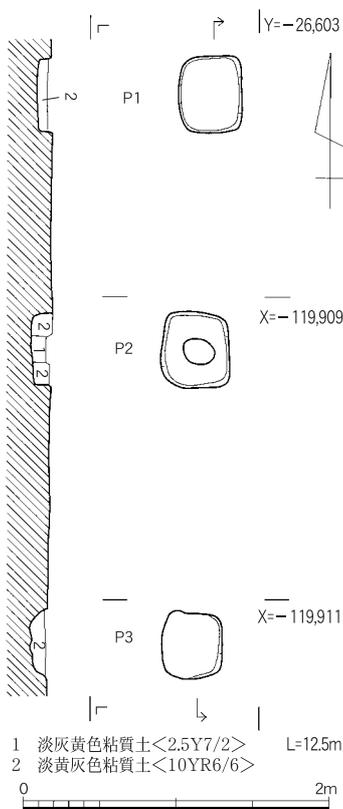
第17図 土坑SK12実測図 (1/50)

土坑SK12 (第17図) 調査区南東隅で検出した方形の土坑で、南北溝群の溝SD10・11より新しい時期の遺構である。土坑SK12はさらに東および南へ続くため全容を明らかにできなかったが、調査区内では東西4.9m、南北2.5m、深さ0.2m前後を測る。底部には小さな窪みが散見されるが、ほぼ平坦に掘削されたものと考えられる。土坑内には拳大の礫が多数含まれていたが、底部から数cm程度浮いた状態であり、礫の配置にも規則性が認められなかったことから、その性格は判然としない。出土遺物には土師器、須恵器、製塩土器、獣骨がある。



第18図 柵SA06実測図 (1/50)

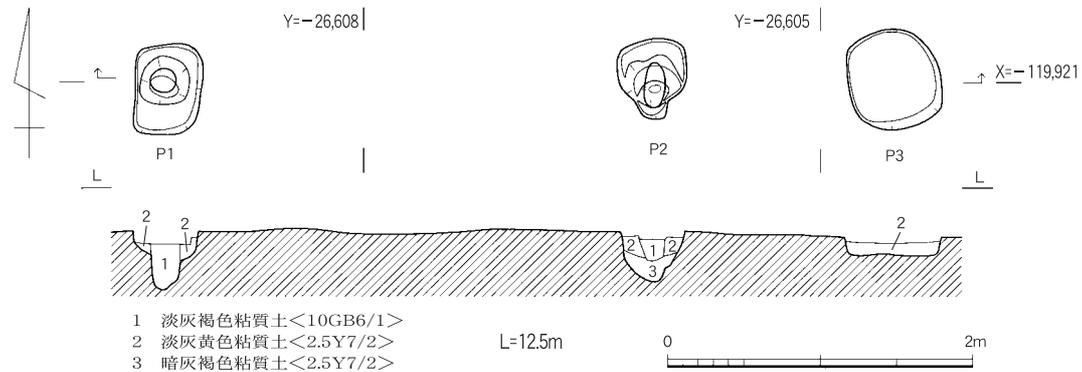
柵SA06・07 (第18・19図) 井戸SE05の北側で南北方向の柵2条を検出した。西側の柵SA07は溝SD11と重複しており、より新しい時期のものであることが分かる。東側の柵SA06は柱間3間で、柱間間隔は1.8m等間であった。柱穴P2～4では直径0.2m前後の柱痕跡を確認している。柱掘形は隅円方形ないし隅円長方形で、一辺0.4～0.6m、深さ0.3m前後を測る。出土遺物には土師器片があるが量は少ない。柵SA07は柱間2間で、柱痕跡を確認していないものの柱間間隔は1.8mと考えられる。柱掘形は一辺0.4m前後の隅円方形で、深さ約0.2mを測る。



第19図 柵SA07実測図 (1/50)

SA06は柱間3間で、柱間間隔は1.8m等間であった。柱穴P2～4では直径0.2m前後の柱痕跡を確認している。柱掘形は隅円方形ないし隅円長方形で、一辺0.4～0.6m、深さ0.3m前後を測る。出土遺物には土師器片があるが量は少ない。柵SA07は柱間2間で、柱痕跡を確認していないものの柱間間隔は1.8mと考えられる。柱掘形は一辺0.4m前後の隅円方形で、深さ約0.2mを測る。

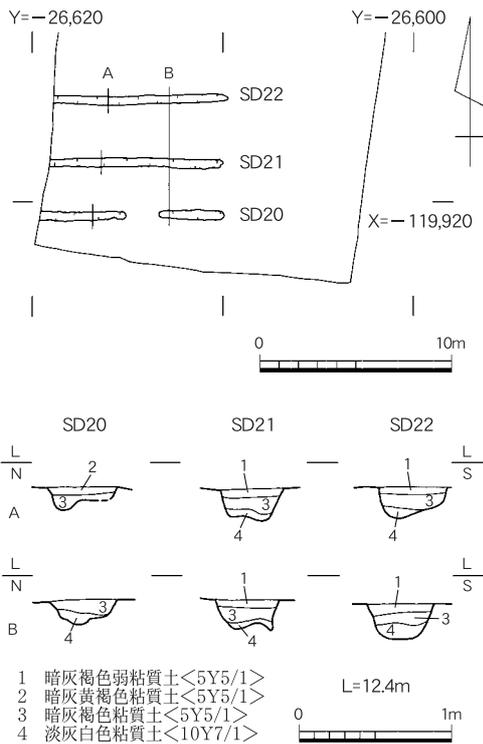
柵SA08 (第20図) 調査区南東部で検出した東西方向に並ぶ3基の柱穴を柵と考えた。中



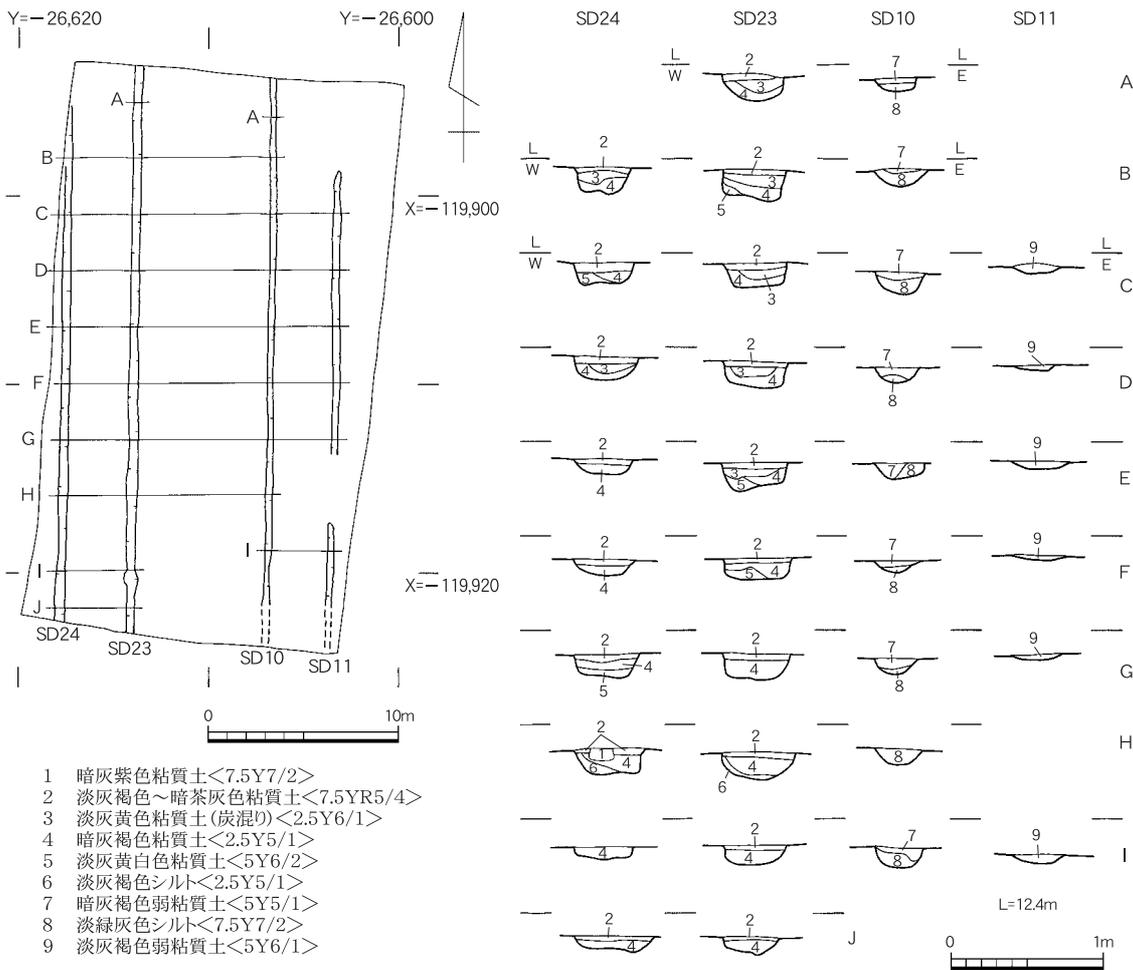
第20図 柵SA08実測図 (1/50)

央の柱穴P 2では直径0.15mの柱痕跡を確認しており、柵の柱間隔は西から3m、1.8mと考えられる。柱掘形は一辺0.4~0.6mの隅円方形で、深さ約0.2mを測る。柱穴P 2からは須恵器壺Mが出土している。

溝SD20~22 (第21図) 調査区南西部で3条の東西溝を確認した。いずれも調査区の中央部で途切れているが、最も南の溝SD20だけは幅0.1m前後、深さ約0.1mに規模を縮小した状態(溝SD09)で東へ続いている。溝心々間距離は南から2.7m、3.4mと不揃いで、溝SD20と溝SD22の溝心々間距離は6.1mを測る。溝SD20~22の規模は幅0.4m前後、深さ約0.2mで、他の溝に比べて出土遺物が多く含まれていた。溝SD20(09)はさらに東へ延びて、左京第102次調査の溝SD10220と接続するものと考えられる。



第21図 溝SD20~22土層図 (1/50・1/400)



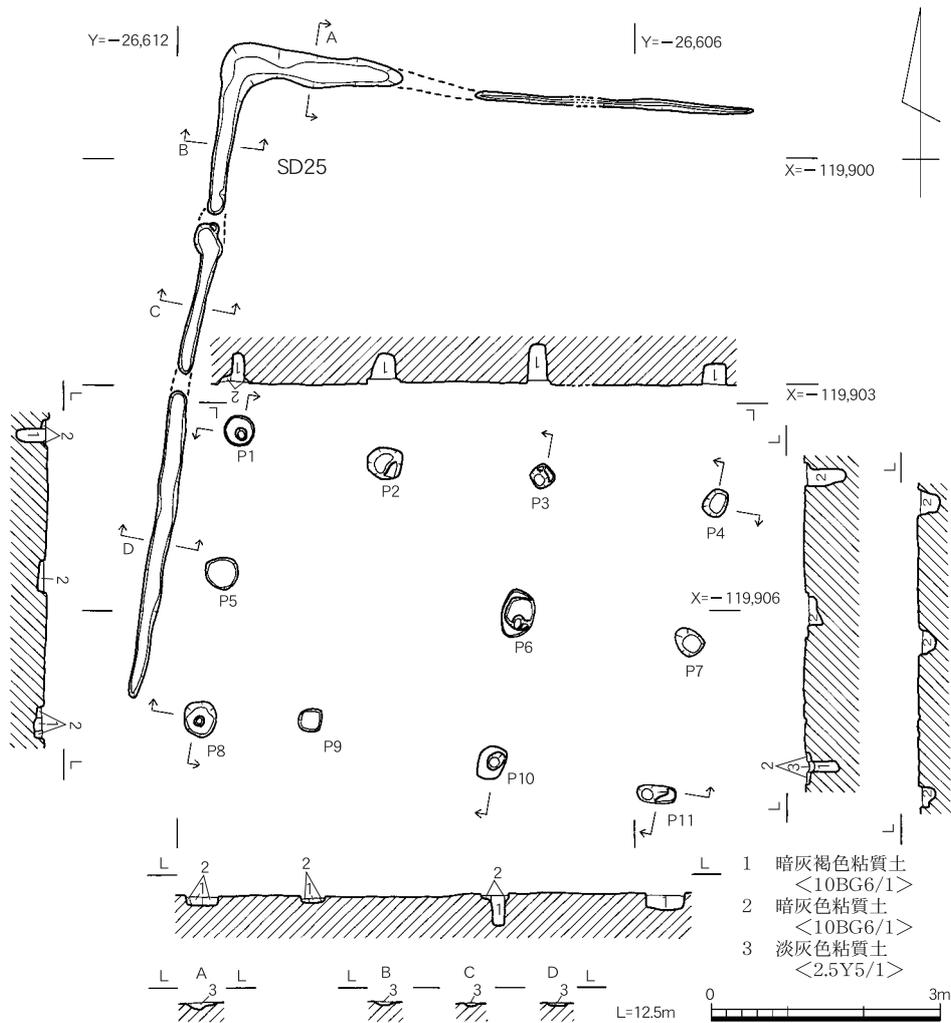
第22図 溝SD10・11・23・24土層図 (1/50・1/400)

2期

溝SD10・11・23・24 (第22図) 調査区を縦断する南北溝4条を検出した。南調査区検出遺構の4段階は多くがこの南北溝群との重複関係をもとにしており、南北溝群は2期に位置付けられる。溝心々間距離は東から3.5m、7.2m、3.7mで、溝SD23と溝SD10の間に幅広い空閑地が残されている。なお、溝SD10と溝SD24が10.8m、溝SD11と溝SD23が10.6mを測る。溝SD10・23・24は調査区の北側へさらに続いているが、溝SD11は北東部で途切れていた。溝の規模は西側の溝SD23・24が幅0.4~0.5mであるのに対し、東側の溝SD10・11では幅0.2~0.4mとやや狭いものであった。溝底部はいずれも北から南へ緩やかに傾斜しており、深さは溝SD10・23・24が0.1~0.2m、溝SD11は0.1mまでであった。埋土は灰褐色粘質土を主体としており、上層の淡灰褐色粘質土には土師器、須恵器、炭などが含まれていた。また、溝SD23・24ではウリ科の種子が、溝SD24では神功開寶が出土している。

3期

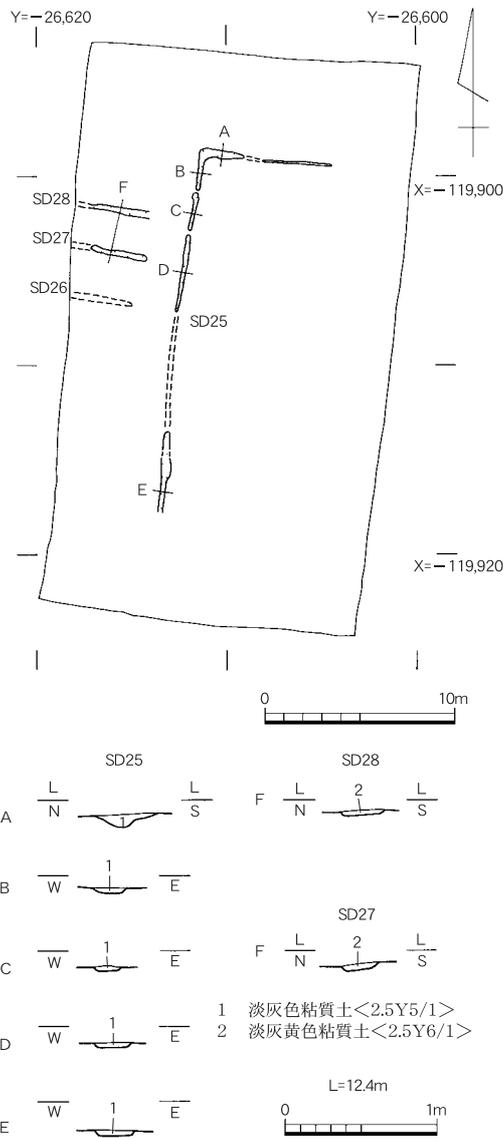
掘立柱建物SB19 (第23図) 調査区のほぼ中央部で検出した掘立柱建物で、南北溝群との重複関係は認められないが、溝SD25と同様な方位を取ることから古段階の遺構と推定した。建物は桁



第23図 掘立柱建物SB19・溝SD25実測図 (1/100)

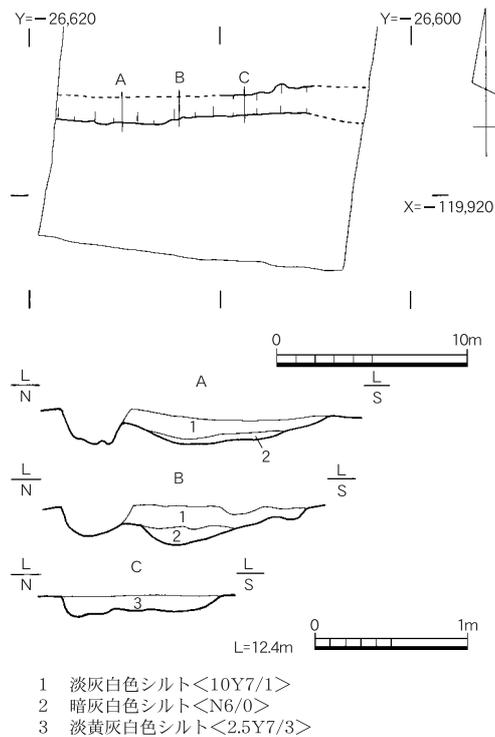
行3間、梁間2間の東西棟で、東から1間の位置に間仕切りを設ける。建物の棟方向はW12°Nで、西に対してやや北へ振っていた。数基の柱穴で直径15cm程度の柱抜き取り穴を確認しており、柱間隔は梁間方向が1.9m等間、桁行方向は南辺西が乱れるが1.9~2.1mを測る。柱掘形の形状は不整円形、隅円方形、隅円長方形など一様でなく、その規模にも長軸0.3~0.5mのものが認められる。また、柱抜き取り穴部分のみが深く掘削されている柱穴が5基認められた。出土遺物は限られていたが、北東隅の柱穴では土師器皿Aが出土している。

溝SD25 (第24図) 調査区の南西部から北へ延び、前述の掘立柱建物SB19の北側で東へ折れ曲がる(溝SD03)小規模な溝である。東西溝群の溝SD21・22と重複しており、より古い段階の遺構であることが分かる。溝の方向はN4~10°Eで、掘立柱建物SB19付近では建物の振れ角に近い方向を示している。溝埋土は部分的に炭化物を含む灰色系の粘質土ないしシルトで、土器などはほとんど含まれていない。幅0.1~0.4mを測るが深さ0.1mまでと非常に浅かったため、厳冬期の度重なる検出作業によって溝南方部の輪郭が失われてしまった。

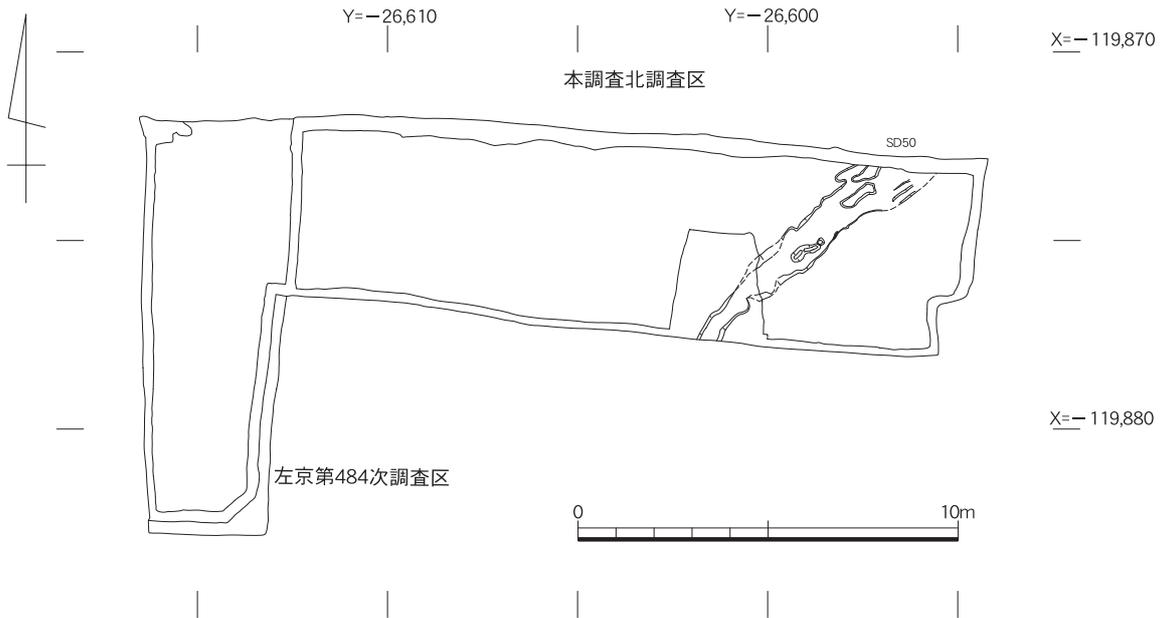


第24図 溝SD25・27・28土層図 (1/50・1/400)

溝SD26~28 (第24図) 調査区の中央西辺部で3条の東西溝を確認した。南北溝群の溝SD23・24より古い段階のもので、溝の方向(W10°N)が掘立柱建物SB19、溝SD25と類似することから古段階の遺構と考えた。東西溝群の溝心々間距離は北から2.3mと2.5mを測る。溝の幅は0.3m前後であるが深さが約0.1mと浅かった



第25図 溝SD31土層図 (1/50・1/400)



第26図 北調査区弥生時代検出遺構図 (1/200)

め、溝SD26では輪郭の記録ができなかった。溝SD26～28からは遺物が出土していない。

4期

溝SD31 (第25図) 調査区の南半部で確認した東西溝で、重複関係より新段階の井戸SE05、溝SD22、中段階の溝SD23・24、古段階の溝SD25に先行する遺構である。溝埋土からは少量ながらも長岡京期の土師器、須恵器が出土している。溝の輪郭は出入りがあり、また、溝SD22によって北肩の大部分が失われていたが、幅1～1.5m、深さ0.15～0.25mの規模が認められる。溝の方向はE 5° Nで、僅かながら東に対して北へ振っている。埋土は灰色系の砂質土・シルトが主体を占めていた。

轍SD01・02・04・13～17・29 (第13図) 調査区の北半部では9条の轍を確認している。いずれも遺物が出土しなかったため詳細な時期は分からないが、重複関係よりこれまでに記述してきた遺構より古い段階のものと考えられた。轍には東西方向(轍SD01・02・15～17・29)、北西から南東方向(轍SD13・14)、北東から南西方向(轍SD04)の軌跡が確認できたが、これらが同時期に残されたものか否かは分からない。3種類の方位は、東西方向のものが西に対して4～5°北、北西から南東方向のものが西に対して36°北、北東から南西方向のものが東に対して28°北へ振る値を示していた。今回検出した轍群は北から轍SD01・02、轍SD13・14、轍SD29・15、轍SD16・17が対になり、その間隔はいずれも1.5mを測る。なお、轍SD04に関しては対になる痕跡を検出できなかった。

D. 弥生時代の検出遺構

溝SD50 (第26図) 本調査で確認した弥生時代の遺構は、左京第102次調査でも確認されていた溝SD50に限られている。溝SD50は北に対して東へ40°程度振っており、溝底は南西に傾斜している。溝の輪郭には出入りがあるが、幅1～1.2mで深さ0.2mまでであった。

4 出土遺物

本調査の出土遺物には弥生時代、古墳時代後期、長岡京期、平安時代、鎌倉時代、江戸時代のものがある。総出土量は整理箱にして20箱を数えたが、多くは北調査区の礫敷遺構SX32を覆う淡灰色粘質土層から出土した鎌倉時代の遺物と、南調査区の第44層から出土した長岡京期のものであった。遺構に伴う資料では南調査区长岡京期の井戸SE05、土坑SK12から比較的まよとまって出土したが、その他の遺構は出土量が限られていた。

(1) 平安時代以降の出土遺物

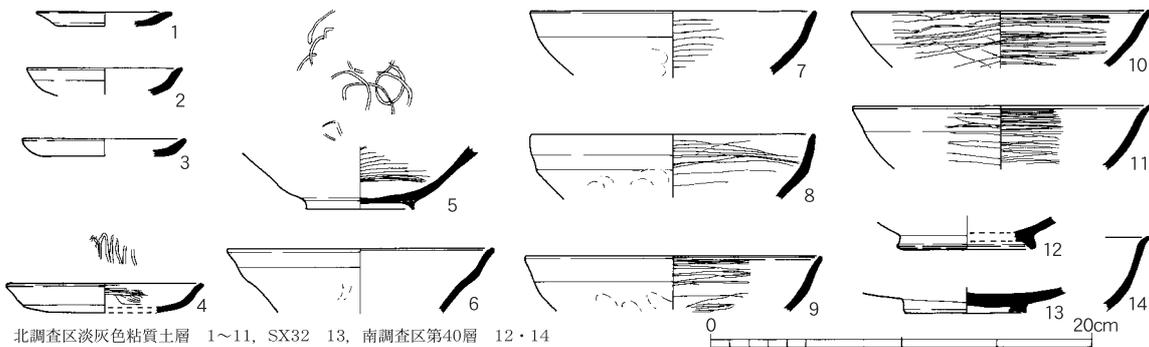
この時期の遺物には土器類、金属器、獣骨がある。遺物の大部分は北調査区の淡灰色粘質土層、礫敷遺構SX32から出土しており、南調査区ではほとんど認められなかった。

北調査区第21層（淡灰色粘質土層）出土遺物（第27・28図） 第21層は北調査区の礫敷遺構SX32を覆う土層であり、とくに調査区の東半部で厚く堆積していた。土師器の小皿（1～3）は直径7.2～8.6、器高1前後を測るものである。瓦器には小皿（4）、椀（5～11）、羽釜がある。小皿は口径10.4、器高1.6を測るもので、内面は底部に鋸歯状の暗文、口縁部に横方向のヘラミガキを施す。椀は出土量が多いものの、全形を窺うことのできる良好な状態のものが少なかった。口径14～15.6で、底部には断面三角形の高台が貼り付けられる（5）。外面調整は下半が未調整で成形段階の指頭圧痕を明瞭に残すもの（6～9）と、粗いヘラミガキが施されるもの（10・11）がある。内面はいずれもヘラミガキが認められるが、外面下半が未調整の7～9は粗く施されていた。5の底部内面には螺旋状の暗文が施される。

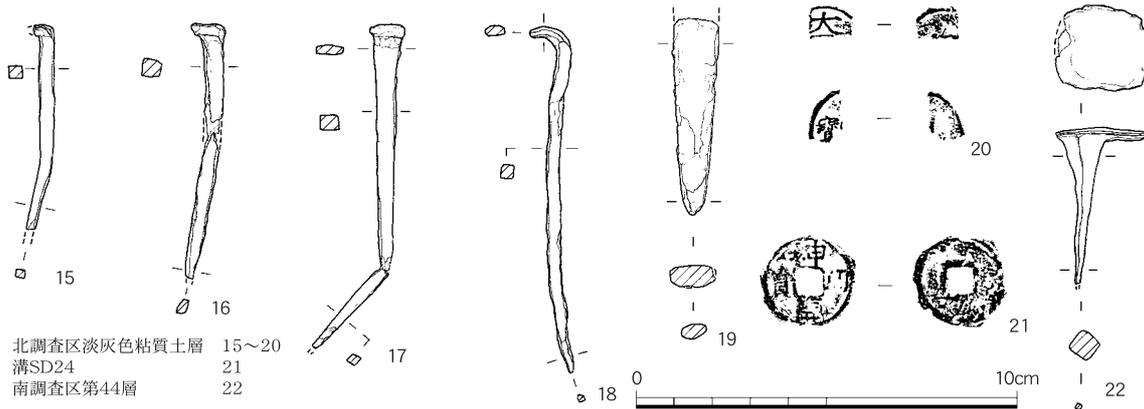
金属製品には鉄釘（15～18）、銭貨（20）、不明品（19）がある。鉄釘はいずれも断面が方形で、上端部が一方に折り曲げられていた。先端を欠損するものがあるが、釘は長さ約6～9.2

で、中程の厚さが0.3～0.5前後を測る。20の銭貨は直接接合しないものの同一個体と考えられる。銭文の配置などから北宋の1107年初鑄の大観通寶と考えられる。19の不明品は楔形を呈するもので、最大幅1、残存長5.2を測る。

礫敷遺構SX32出土遺物（第27図、図版12） 礫敷遺構SX32の遺物としたのは、礫除去段階のものと礫敷直下の窪みから出土したもので、その数は淡灰色粘質土に比べて少なく細片がほとんどであった。遺物には土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、獣骨があるが、このうち瓦器は礫敷の上



第27図 出土遺物実測図-1 (1/4)



第28図 出土遺物実測図-2 (1/2)

半部に混じていたもので、本来、前述の第21層（淡灰色粘質土層）に含まれていたものと考えられる。

緑釉陶器碗（13）は高台径が6.4 の底部片であり、釉色は淡緑色を呈し硬質に焼成されている。幅1 の高台は削り出されたものである。緑釉陶器は他にも口縁端部の破片が数点出土している。獣骨は15点あり、部位として馬の歯、顎部と考えられるものがある。獣骨は細片が多く、個体数の検討は行えない状況であった。また、出土状況が散在的であることから、屍体の不要部分のみが投棄され、さらに後世の耕作などによって攪拌されたものと考えられる。

南調査区第40層出土遺物（第27図） 第40層は長岡京期遺物包含層（第43・44層）の直上に堆積している。この層からは長岡京期の遺物とともに、無釉陶器、緑釉陶器、灰釉陶器など、平安時代の遺物が出土している。

無釉陶器碗（12）は高台径が7.3 の底部片である。灰釉陶器碗（14）は口縁端部片で、端部付近がやや外反していた。釉色は淡灰色を呈する。

（2）長岡京期の出土遺物

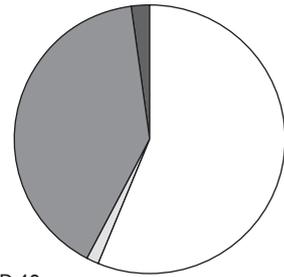
長岡京期の遺物が比較的多く出土したのは、北調査区の溝SD34・40、左京第484次調査区の溝SD41、南調査区の井戸SE05、土坑SK12、溝SD10・21～24・31である（付表-7）。とくに、井戸SE05からは質、量ともにまとまって出土している。また、井戸SE05、溝SD23など製塩土器が量的に目立つ遺構があり注目できる（付表-7）。

井戸SE05出土遺物（第29・30図） 井戸SE05から出土した土製品には、土師器の杯B・杯B蓋・皿A・皿C・碗A・高杯・甕・羽釜、須恵器の杯A・杯B・杯B蓋・皿A・壺G・壺L・壺M・壺蓋・鉢・甕、製塩土器、黒色土器、土馬、平瓦・丸瓦がある。土器類の多くは井戸埋土の上層と底部曲物内を含む下層から出土した。

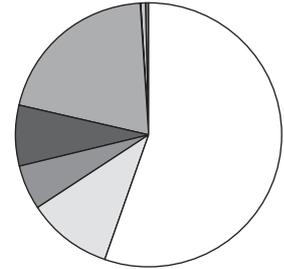
土師器の皿Aには口径14.8～18.5、器高2～2.5の皿A（23～28）がある。外面調整は底部のヘラケズリが口縁端部付近まで及ぶもの（27）と、口縁部をヨコナデするもの（23～26・28）がある。29も皿Aと考えられる破片であり、底部外面のほぼ中央部に「奈」の一文字が墨書されていた。皿C（30・31）は口径10前後、器高約2を測る。底部から口縁部下半の外面は未調

付表-7 長岡京期出土遺物比率

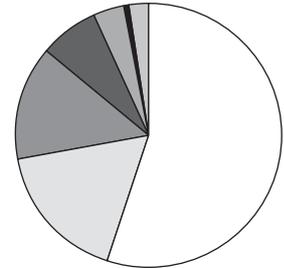
地区	期	遺構番号	総数	土師器		須恵器		製塩土器	黒色土器	祭祀関係	瓦	铸造関係	
				供膳	煮沸	供膳	貯蔵						
北調査区	1	溝 S D 40	137	79		58		0	0	0	0	0	
				77	2	55	3						
			溝 S D 33	4	2		2		0	0	0	0	0
				2	0	1	1						
			溝 S D 34	66	58		4		4	0	0	0	0
			46		12	4	0						
		溝 S D 35	5	1		4		0	0	0	0	0	
			1	0	2	2							
		溝 S D 36	3	2		1		0	0	0	0	0	
			1	1	0	1							
2	溝 S D 37	3	3		0		0	0	0	0	0		
			1	2	0	0							
	溝 S D 38	11	8		0		3	0	0	0	0		
			7	1	0	0							
	溝 S D 39	1	1		0		0	0	0	0	0		
		1	0	0	0								
L 4 8 4	2	溝 S D 41	95	84		8		1	0	0	2	0	
				76	8	6	2						
		溝 S D 42	32	29		0		0	0	0	3	0	
			28	1	0	0							
3	溝 S D 43	8	8		0		0	0	0	0	0		
			8	0	0	0							
	溝 S D 44	7	7		0		0	0	0	0	0		
		6	1	0	0								
4	溝 S D 47	2	2		0		0	0	0	0	0		
				0	2	0						0	
南調査区	1	井戸 S E 05	1572	1033		203		320	1	9	6	0	
				870	163	86	117						
			土坑 S K 12	961	693		203		36	6	23	0	0
					529	164	134	69					
			柵 S A 06	19	16		0		3	0	0	0	0
				11	5	0	0						
			柵 S A 07	10	9		1		0	0	0	0	0
				8	1	0	1						
			柵 S A 08	44	32		12		0	0	0	0	0
				31	1	6	6						
		溝 S D 09	12	12		0		0	0	0	0	0	
			12	0	0	0							
		溝 S D 20	66	48		9		8	0	0	0	1	
			38	10	8	1							
		溝 S D 21	235	188		21		26	0	0	0	0	
				172	16	18	3						
		溝 S D 22	246	163		42		40	0	1	0	0	
			131	32	25	17							
	2	溝 S D 10	93	75		4		14	0	0	0	0	
				57	18	4	0						
		溝 S D 11	34	22		2		8	2	0	0	0	
			18	4	2	0							
		溝 S D 23	589	416		51		115	0	4	3	0	
				369	47	39	12						
	溝 S D 24	321	239		44		31	1	2	4	0		
		207	32	31	13								
3	溝 S D 03	6	6		0		0	0	0	0	0		
			5	1	0	0							
		建物 S B 19	12	10		2		0	0	0	0	0	
			9	1	2	0							
		溝 S D 25	45	36		1		8	0	0	0	0	
		31		5	1	0							
	溝 S D 27	2	1		0		1	0	0	0	0		
		1	0	0	0								
4	溝 S D 31	78	74		4		0	0	0	0	0		
				74	0	2						2	



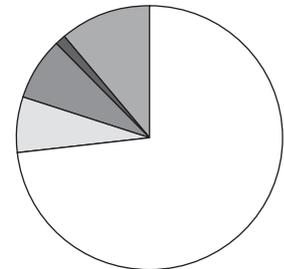
溝 S D 40



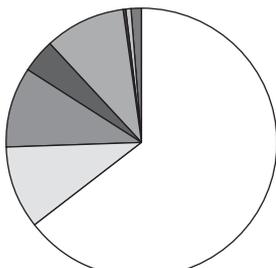
井戸 S E 05



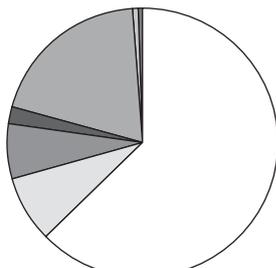
土坑 S K 12



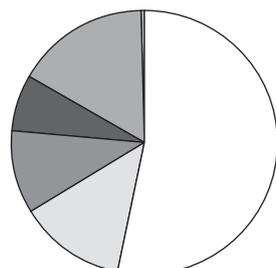
溝 S D 21



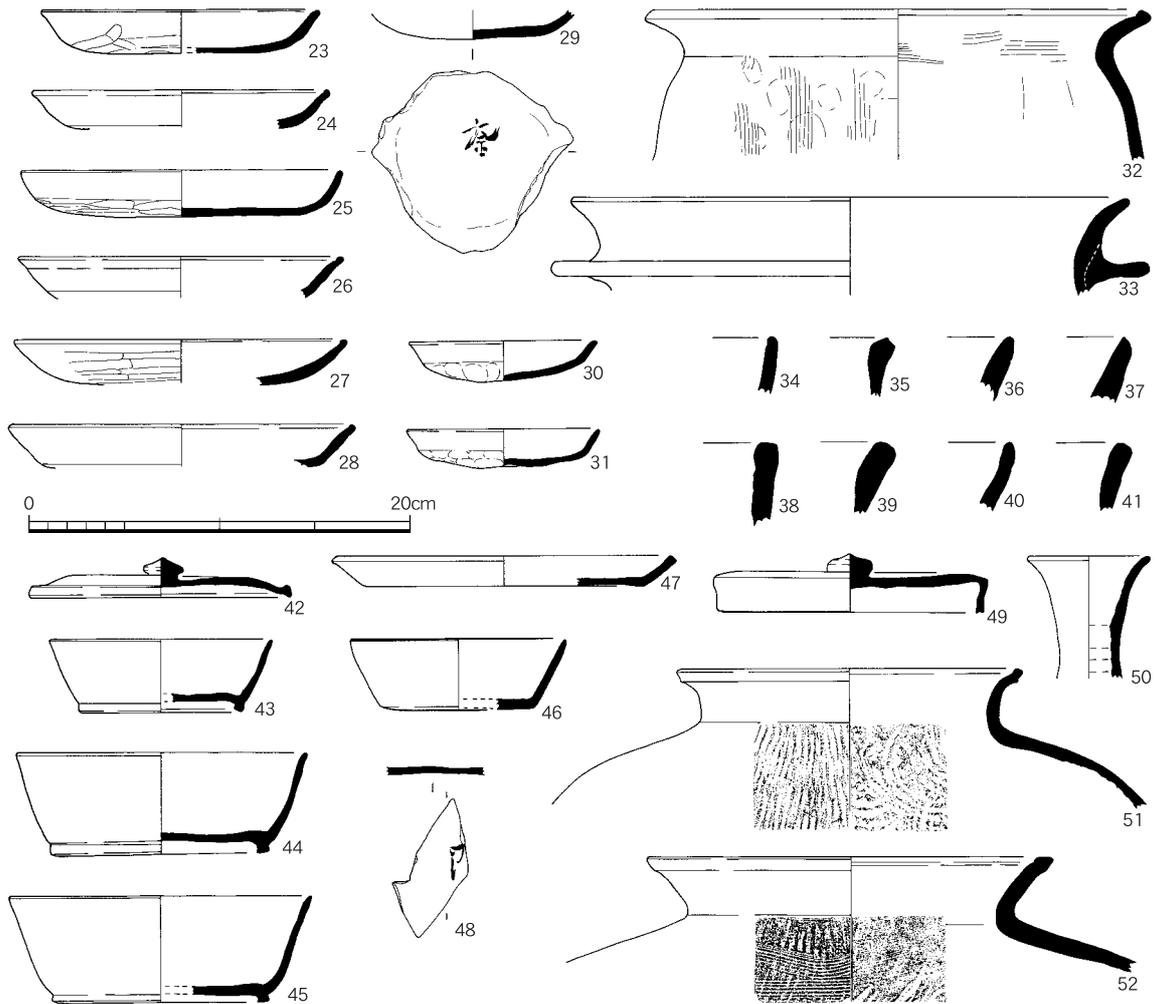
溝 S D 24



溝 S D 23



溝 S D 22

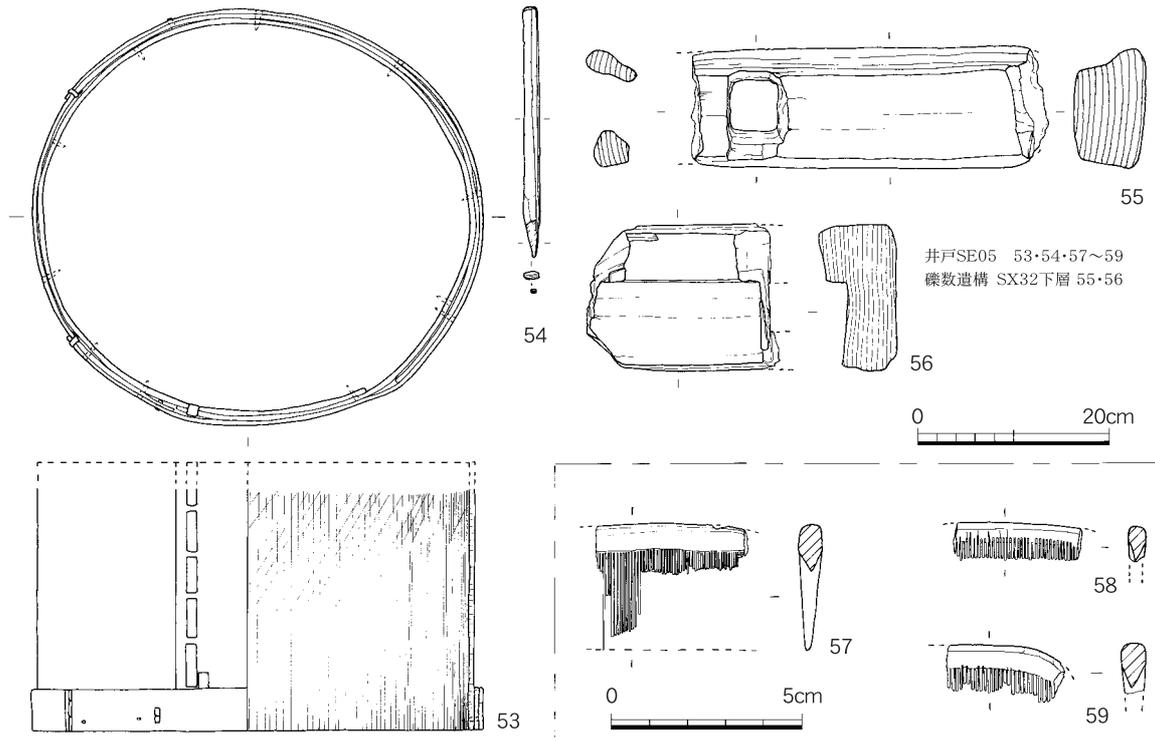


第29図 出土遺物実測図-3 (1/4)

整で成形時の指頭圧痕を残す。甕 (32) は口径26.6 の大型品で、外面にはタテハケと指頭圧痕が認められた。羽釜 (33) は口径29.4 の大型品で、鏝部の最大径が31.5 を測る。

須恵器の杯A (46) は口径11.4、器高3.8 の杯A であり、口縁部は直線的に外傾する。杯Bには口径11.8、器高3.9 の杯B (43)、口径15.4~16、器高5.5 前後の杯B (44・45) がある。杯B蓋 (42) は口径13.9、器高2.1 で、杯B に対応する製品である。皿A (47) は口径18.2、器高1.6 に復元できる破片で、皿A に相当する。48は須恵器供膳形態の底部片であり、外面には墨痕が認められた。壺A蓋 (49) は口径14.2、器高3.1 を測り、宝珠つまみの最大径は2.4 であった。外面には黄緑色の自然釉が認められた。壺G (50) は口頸部の破片である。口縁部径6.6 を測り、頸部下半の内面にはロクロナデの痕跡を明瞭に残す。甕には口径18.2 の51と21.4 の52がある。いずれも口縁端部がやや受け口状を呈しており、外側面には幅0.8 程度の端面が形成されている。いずれも内面はタタキを行ったのちナデを施すが、外面は51がタタキのみで終わるのに対し、52は横方向の粗いハケを施す。

製塩土器 (34~41) はいずれも残存高5 までの口縁端部付近の小片であり、口径を復元できるものはない。断面形状には、直線的なもの (34・40)、口縁部の端部付近が肥厚するもの



第30図 出土遺物実測図-4 (1/2・1/8)

(35・39・41)に分けることができる。

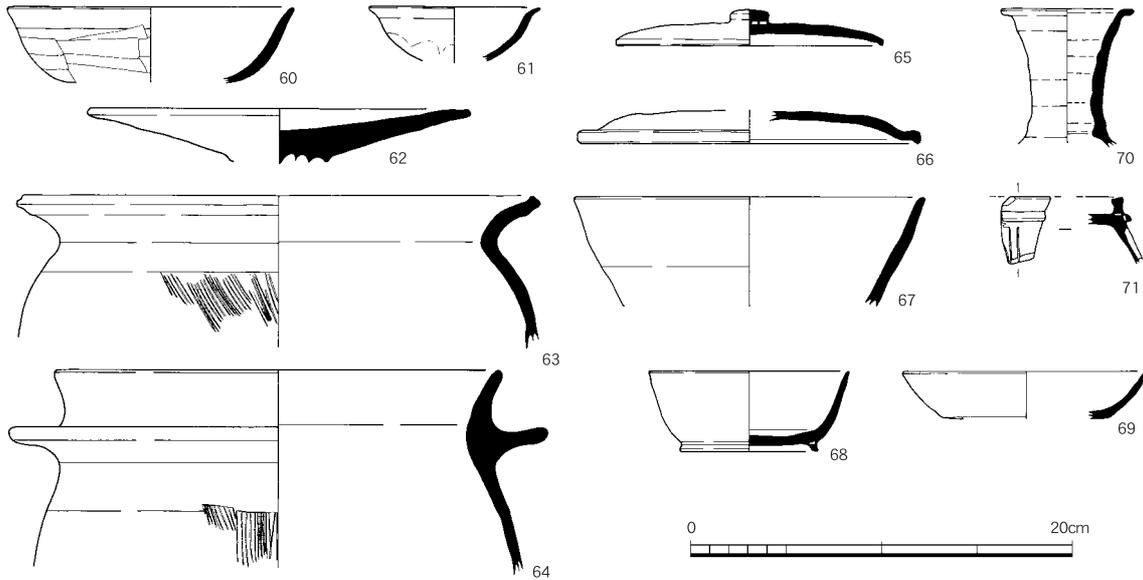
木製品には曲物、ちゅう木、櫛がある。53の円形曲物は、水溜め用の枡として底部に据え置かれていたもので、底板は出土しなかった。上端部が破損していたが、内法43.4で高さは24

程度に復元できる。曲物側板の内側は縦方向の切り込みが0.8程度の間隔で施され、上半部では右上がり方向の切り込みも認められた。曲物は一枚の側板を樺皮で一箇所留めたもので、樺皮材は幅1程度で厚さ約0.2を測る。底部には幅4の帯状の補強材が巡らされているが、この材は二枚で構成されており側板と同様に樺皮で綴じ合われている。底板は伴っていないが、曲物の下端部には木釘及び木釘が欠落した小孔が認められた。木釘跡は側板本体から打ち込まれたものが4箇所、補強材の上からが7箇所認められることから、まず、側板本体と底板を結合し、補強材を巡らした後に再度全体を結合させるため木釘を使用したものと考えられる。

櫛(57～59)はいずれも前述の曲物内部に堆積した埋土の上半部から出土した。最上部の厚さが0.6のもの(57・59)と0.4程度の薄いもの(58)が認められるが、歯は1あたり12本程度の細かいもの(57)と9～10本のもの(58・59)が認められた。最上部の厚さと歯の単位本数より、57～59は別個体と考えられる。

ちゅう木(54)は曲物内部の最下層から土師器、須恵器とともに出土したもので、長さ26.4、幅0.8前後、厚さ約0.5を測る。上端は方頭で下端はナナメ方向に尖らされており両面ともに粗く削られている。

土坑SK12出土遺物(第31図) 土製品には、土師器の杯A・杯B・皿A・椀A・高杯・甕・羽釜・壺C・ミニチュアカマド・ミニチュアカマコ、須恵器に杯A・杯B・杯B蓋・壺G・壺



第31図 出土遺物実測図-5 (1/4)

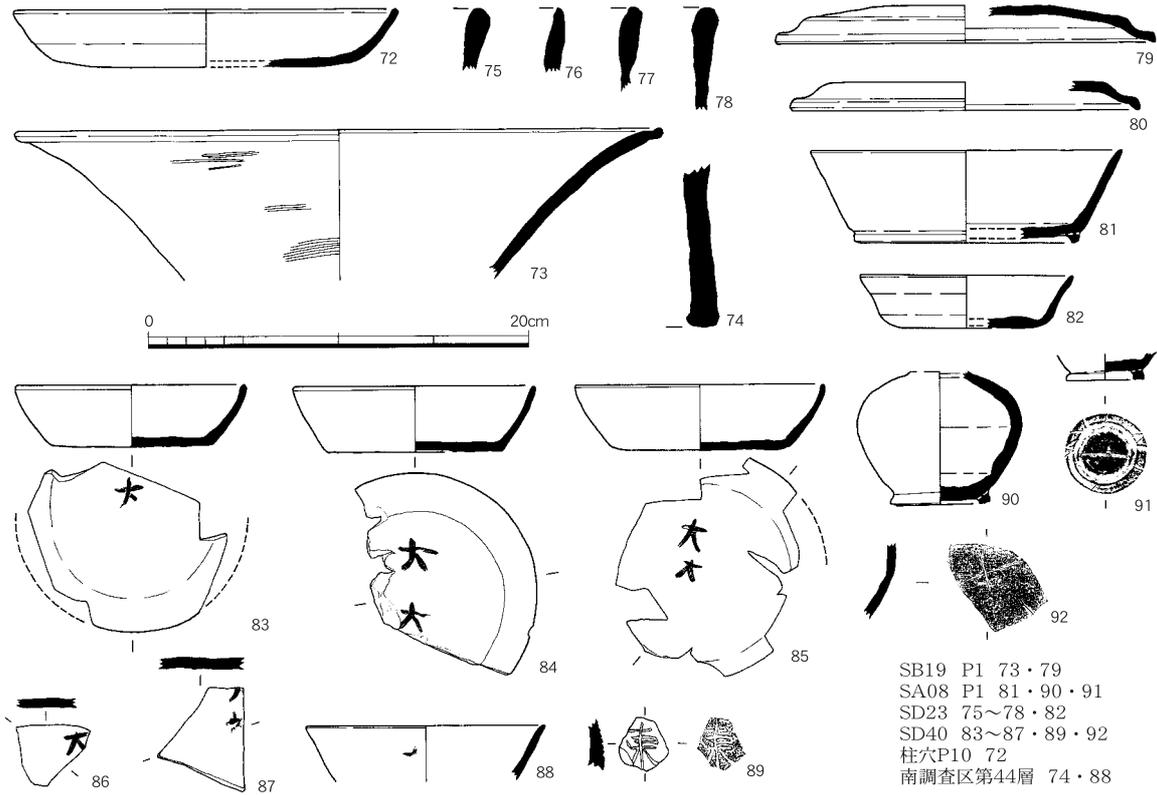
M・壺蓋・平瓶・甕、製塩土器、黒色土器、土馬がある。遺物の多くは埋土上層から出土した。

土師器の杯A (60) は口径15、器高4程度に復元できるもので、外面調整は口縁部下半までヘラケズリが施される。62は高杯の杯部と考えられるもので、口径約20を測る。外面には部分的ながらも粗いヘラミガキが施されていた。甕 (63) は口径26.6程度の大型品で、外面にはナナメ方向のハケメが認められる。口縁端部には外傾する端面が認められ、全体としてわずかに受口状を呈する。羽釜 (64) は口径23.2で鏝部分の最大径が26.2を測る。カマコ (61) は口縁部下半から底部が未調整で成形時の指頭圧痕を残す。口径約9、器高約3に復元できる。

須恵器の杯A (69) は内湾気味に外傾する口縁部を呈し、口径13、器高2.5の杯Aに復元できる。杯Bには口径18程度の杯B (67)と口径10.4、器高4.2の杯B (68)がある。68の口縁部形態は内湾気味に立ち上がる。杯B蓋は66の口径が18、宝珠つまみを残す65は口径13.8で器高1.9であった。壺G (70) は口縁部からの肩部までの破片である。端部が外側に屈曲しており、口径7を測る。71は円面硯である。小片のため全形を復元することができないが、脚部に方形の透孔と刻みを施すものと考えられる。

その他の遺構出土遺物 (第28・32図) 付表-7にも示したとおり、ほとんどの長岡京の遺構からは当該期の遺物が出土している。ここでは、井戸SE05、土坑SK12以外で比較的まとまった遺物が出土した北調査区の溝SD40、南調査区の柵SA08、溝SD23、掘立柱建物SB19について一括して記述する。

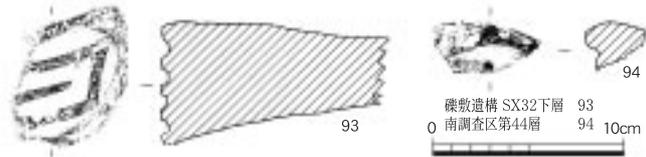
土師器の皿A・盤、須恵器の杯A・杯B・杯B蓋・壺M・器種不明の線刻土器、製塩土器を図示した。遺構との対応を示せば、須恵器杯A (83~87)、壺M (92)、器種不明線刻土器 (89) が溝SD40からの出土。須恵器杯B (81)、壺M (90・91) が柵SA08の柱穴P1。須恵器杯A (82)、製塩土器 (75~78) が溝SD23、掘立柱建物SB19では柱穴P1から土師器盤 (73)、須



第32図 出土遺物実測図-6 (1/4)

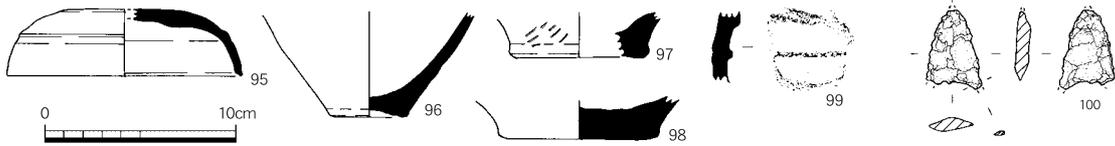
恵器杯B蓋 (79)、柱穴P10から土師器皿A (72) が出土している。

土師器皿A (72) は口径20.2、器高3.1の皿Aであるが、表面の磨耗が



第33図 出土遺物実測図-7 (1/4)

激しく外面調整は明らかではない。盤 (73) は口径35.1で残存高8の大型品である。外面は磨耗が激しいものの部分的にヘラミガキが認められる。須恵器の杯Aには口径11.3、器高2.7の杯A (82) と口径12.2~13.2で器高3.5程度の杯A (83~85) がある。83~85は底部から口縁部への屈曲が明瞭で、口縁部はやや内湾しながら立ち上がる共通した形態を示す。また、灰白色の色調と軟質に焼成される点も共通する要素である。また、これらの底部外面には「大」が一字ないし二字墨書されている。「大」墨書は単純な字体であるが、いずれも同一人物によって墨書されたものと推定できる。破片資料ではあるが86・87にも「大」と考えられる墨書が認められ、破片の色調や焼成の特徴などから、86・87も杯Aの底部片と考えた。杯B (81) は口径16.3、高さ4.9の杯Bである。杯B蓋には口径20で杯Bに対応するもの (79) と、口径17.9で杯Bに対応するもの (80) がある。79は胎土に砂粒を多く含み、焼成も軟質な特徴的なものであった。壺Mでは90が残存高7、底部径5.3、91が底部径4.2を測る。92は壺Mの体部下半と考えた破片で、外面に「×」状の線刻が認められる。91では底部外面の高台中央に横線がナデ描きされていた。器種不明の89は一辺3cmまでの小片で、小型壺の体部片とも想定できる。外面には焼成前に「東」が線刻されていた。金属製品では神功開寶 (21) 1点が溝SD24から出土して



第34図 出土遺物実測図- 8 (1/4)

いる。外縁部が部分的に欠損し銭紋も磨耗しているが、直径2.5、銭孔の内法は0.7を測る。

製塩土器(75~78)は残存高が6までの小片で、口径等を復元し得るものはなかった。断面形状には比較的直線的なもの(76)と端部付近が肥厚するもの(75・77・78)に分ける事ができた。

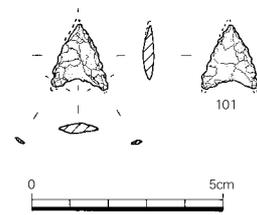
北調査区礫敷遺構SX32下層出土遺物(第30・33図) 北調査区礫敷遺構SX32の直下の窪みからは、軒瓦片(93)、建物部材(55・56)が出土している。93は重画文軒平瓦片で、平瓦部の凸面にはヘラケズリが認められるが、凹面は磨耗のため明らかでない。建築部材(55・56)は北調査区の東辺中央部から出土した。残存幅はそれぞれ37.5、20.2で、55には長辺7程度の長方形の柄穴が設けられている。

南調査区第44層出土遺物(第28・32・33図) 第44層は南調査区の長岡京期遺構検出面を覆う遺物包含層であり、土師器、須恵器、墨書土器、瓦、金属製品など多くの遺物が出土している。74は直線的な断面形態と端部の状況から甑と考えた。外面には粗いタテハケが施される。88は須恵器杯の口縁部片であり、外面には墨痕が認められるが、文字・記号の別は分からない。口径12.6を測る。94は軒丸瓦片であるが、縁辺部の破片であるため型式等は判然としない。22は南調査区の北辺部より出土した鋌状の製品である。先端部を欠損するが、長さ約4.2で上端部は一辺2~2.5程度に打ち延ばされている。

(3) 古墳時代以前の出土遺物(第34・35図)

古墳時代後期の須恵器(95)、弥生土器(96~99)、縄文時代から弥生時代の石鏃(100・101)がある。出土したのは北調査区の礫敷遺構SX32(98)、礫敷遺構SX32下層の窪み(95)、溝SD50(99)、南調査区の第44層(97・101)、長岡京期の溝SD20(100)、第53層上面(96)であり、当該期の遺構に伴うのは北調査区の溝SD50だけであった。

95の須恵器杯蓋は口径11、器高3.5を測るもので、古墳時代後期陶器窯TK10型式に相当する。96は弥生時代後期頃の壺形土器底部と考えられる。やや上底気味の底部形態を呈し、底部径4.2を測る。97・98は壺ないし甕形土器の底部であり、弥生時代中期頃のものと考えられる。97の外面にはタタキが認められる。99は弥生時代前期の壺形土器と考えられ、細い突帯の外端部に不明瞭な刻み目を施す。100・101はサヌカイト製の凹基式石鏃である。残存長はそれぞれ2.2、1.8を測る。



第35図 出土遺物実測図- 9 (1/2)

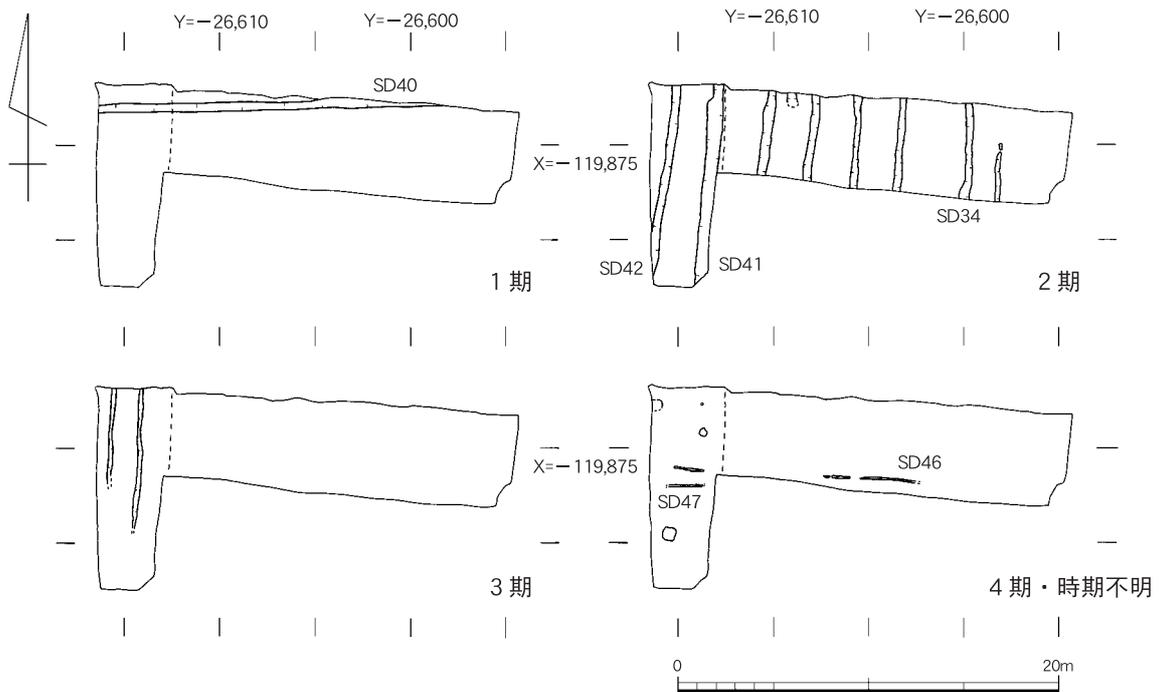
5 まとめ

本調査では長岡京跡左京六条一坊五町の宅地内遺構群、平安時代前後の礎敷遺構などを確認し、長岡京跡・雲宮遺跡・芝本遺跡に関する重要な資料を得ることができた。ここでは長岡京期の宅地内の状況、井戸について若干の記述を行いまとめとする。

(1) 左京六条一坊五町

本調査の南北調査区、左京第484次調査区では少なくとも4期にわたる遺構の重複状況を確認した。南北調査区間の対応関係は十分に解明できなかったが、東西溝、南北溝、轍など関連性を窺わせるものもあるため、各時期の南北調査区についてまとめて記述した。

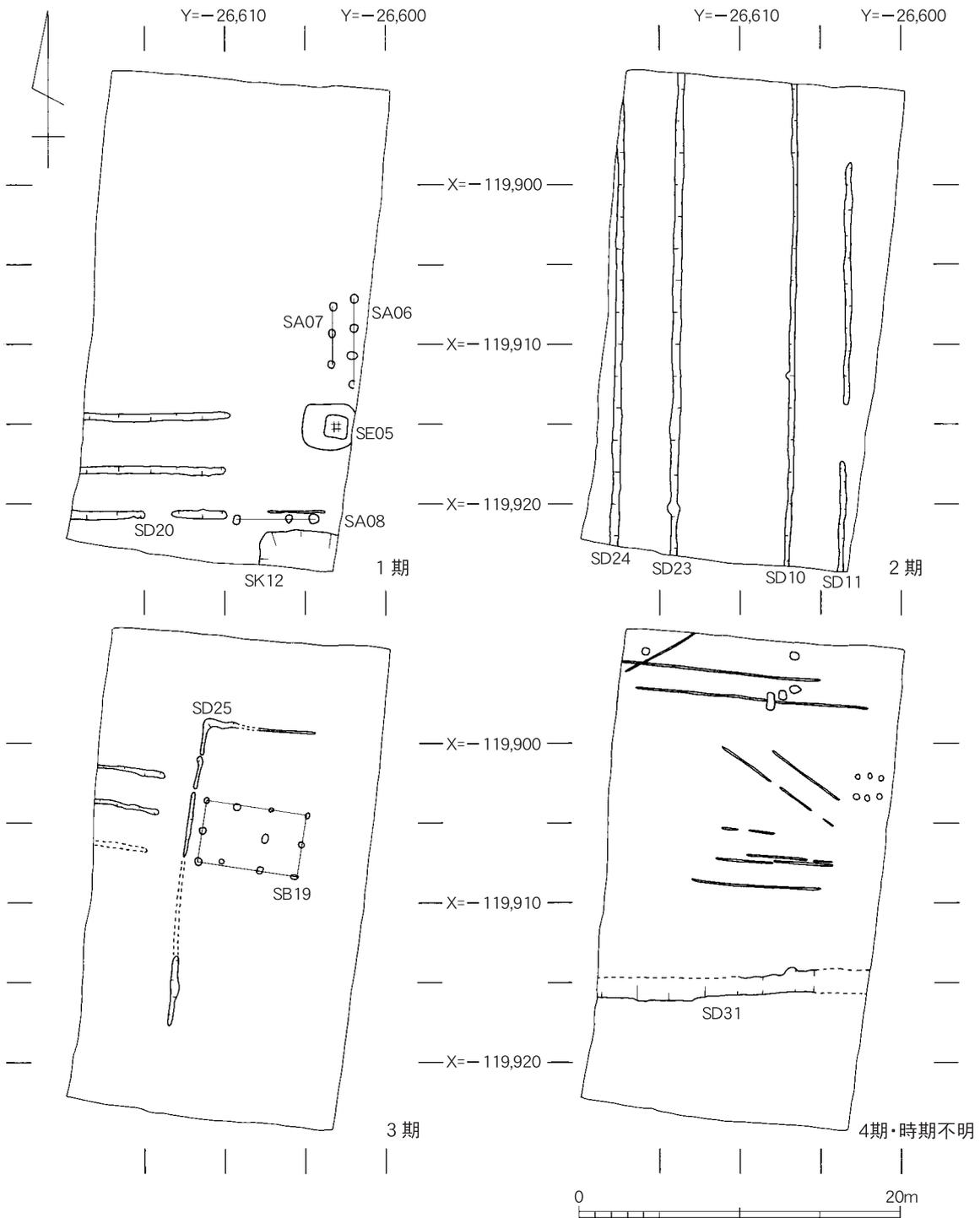
1期から4期とした遺構群のなかでも、最も重要な成果が得られたのが1期である。南調査区では東西溝の溝SD20が左京第102次調査の溝SD20と接続することが明らかで、五町を南北に四分割する位置に相当する。この溝と同じように宅地内区画溝と考えられるのが、左京第102次調査の溝SD21 ($X = -119, 889.03$) で、溝SD20の31.77m北にあり五町を南北に二等分する位置にあたる。井戸SE05・柵SA06・07は2条の宅地内溝に区画された範囲の東辺部に配されており、左京第102次調査では建物としての並びが分からないものの10基程度の柱穴も確認されている。また、左京第102次調査の井戸、建物も同様な位置にあり、五町域では道路に近い部分を生活空間として利用したことが窺える。このような遺構配置は長岡京跡五条以南の一般的な空間利用状況と言える。さて、左京第102次調査の井戸SE29 (中心座標 $Y = -26, 602.9$ 、 $X = -119, 886.1$) と本調査の井戸SE05では井戸側形式に違いが認められるが、井戸の中心位置はほぼ南北に揃い、その南北間隔は29.1mで10丈に近い値が得られる。このことから、溝SD21によって区画としては分割され



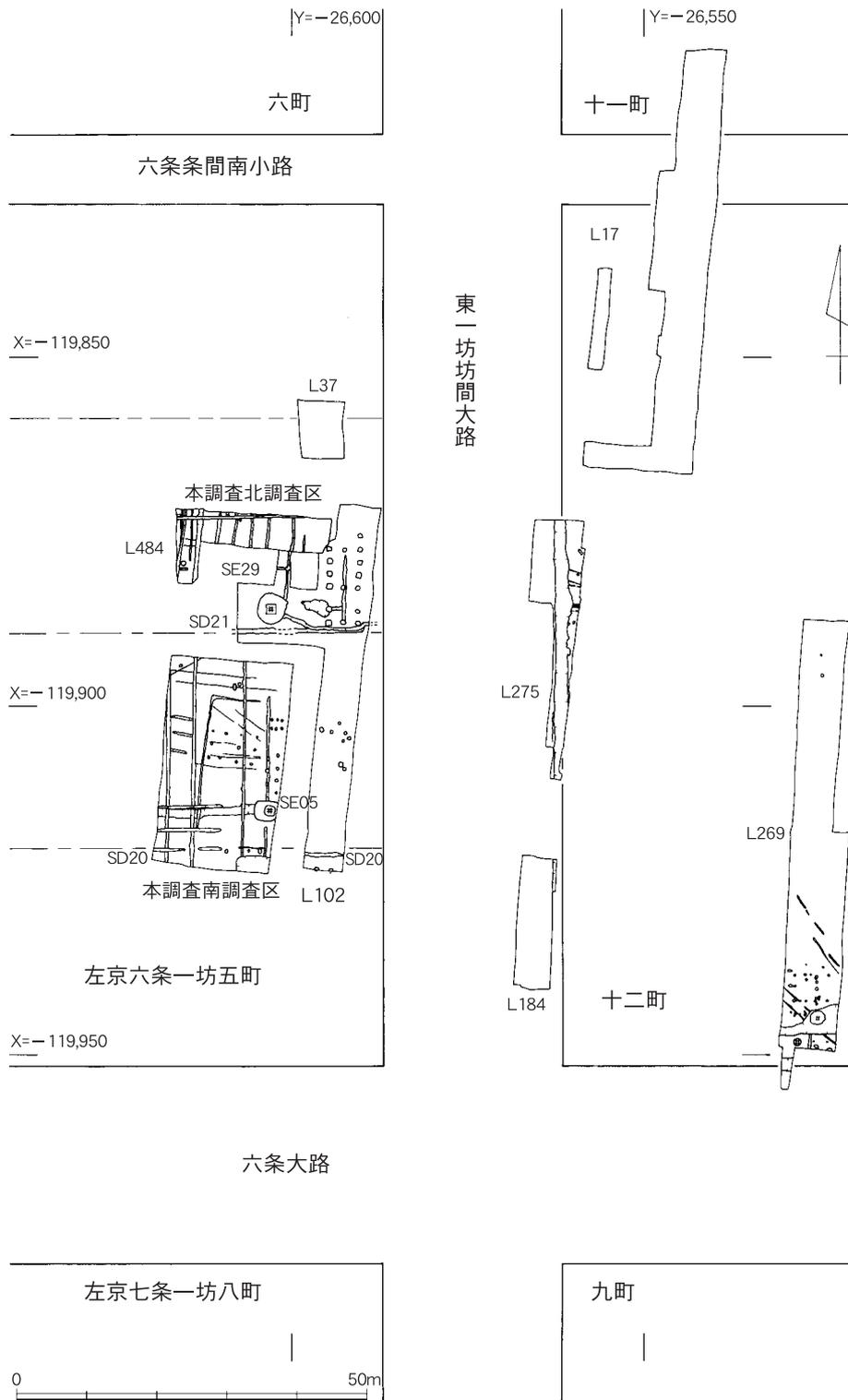
第36図 北調査区・左京第484次調査区长岡京期遺構変遷図 (1/400)

るものの、両区画に存在する2基の井戸および最も新しい時期の遺構は同一規格で配されたと推定できる。

2期では南北溝群を確認した。北調査区では溝SD34だけが左京第102次調査の南北溝と接続するが、溝SD35・36はその延長線上で確認されていない。一方、南調査区にも南北溝群があるが、溝SD11が同区内で収束することなどから、これら4条の南北溝も五町南半の2区画にのみ施されたものと考えられる。



第37図 南調査区长岡京期遺構変遷図 (1/400)



第38図 周辺地域の長岡京期検出遺構図 (1/1000)

3期では南調査区の中央部で小規模な建物と建物に伴う浅い溝が確認できる。4期はいずれの調査区でもおもに東から西を指向する轍を確認した。左京第102次調査区では轍が確認されていないが、五町の東隣にあたる十二町の左京第269・275次調査では同様な方向の轍が数条検出されている。とくに、左京第275次調査のものは条坊側溝に切られており、4期とした遺構のなかでも轍については奈良時代以前の古山陰道や長岡京造営時の資材搬入路の可能性も考えられる。

(2) 長岡京跡の井戸

これまでに検出された長岡京期の井戸は、144基（宮域7基、左京域109基、右京域28基）を数える。左京域の検出例が全体の7割を超えているが、これは1980年代後半以降に相次いだ長岡京跡左京域における大規模開発と、その成果を収めた報告書の刊行によるところが大きい。長岡京跡の井戸に関しては既に山本輝雄氏によって詳細な検討作業が行われている^(4・9)。本論では山本氏の研究以降に増加した井戸検出例の追加と、井戸側を中心とした若干の検討を行っている。

A. 井戸側の分類

井戸は大きく井桁、井戸側、水溜めの3者で構成され、このうち井戸側に関しては宇野隆夫氏⁽¹⁰⁾などの優れた研究がある。長岡京跡の検出例においても地表面上の構造物である井桁が確認された例はなく、本論の検討対象からは除外した。また、水溜めについても本論の主対象が井戸側であること、井戸側との識別の困難さ、すなわち水溜めとしての意識を持って設置されたものか判断が難しいことから特別な検討は行っていない。なお、以下に示す類例の番号は 付表-10 長岡京跡井戸一覧表における井戸番号である。

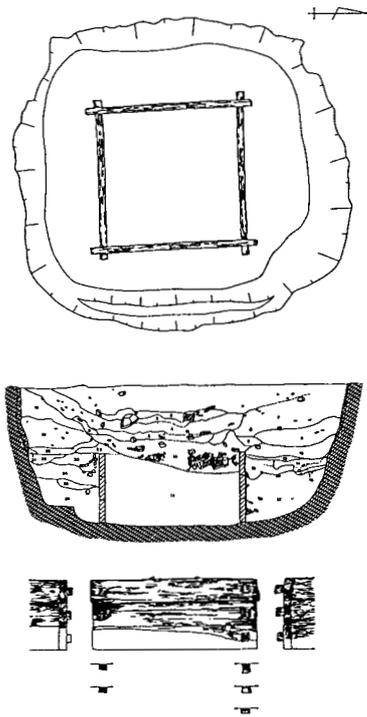
井戸側の分類では総数144基にのぼる検出例の中で、井戸側の残存状況が比較的良好で設置状況が窺えるものを主な対象とした。対象となった井戸は81基を数える。井戸側には石組を築くもの（109-右京第236次調査 井戸SE51）、須恵器を利用する例（98-左京第443次調査 井戸SE31）があるが、類例は少なく前述のものも井戸側の一部や補強材としての利用であった。このため、井戸側を分類するためのより上位の概念である井戸側構成材に関しては検討を行っていない。

井戸側は湧水層ないし貯水点までの空間を保持するために設けられた開放型の地中構築物であり、単一形態の井戸側とともに、必要な深さを得るために同種あるいは異なった井戸側を積み上げて全体を構築する複合形態が存在する。複合形態の上部井戸側として多用されるのが、縦板組隅柱横棧どめ、縦板組横棧どめ、縦板組といった縦板を主要材とする類型であり、とくに縦板組隅柱横棧どめ、縦板組横棧どめ井戸側は深度を得るための最適な形態であったことが分かる。本論の分類では、まず、より上位の井戸側形態によってA～F・Xの7類型に大別し、次にそれぞれの類型を下位井戸側の有無および下位井戸側の形態によって細分した。なお、X類型には下位に井戸側が残っているものの、上位の形態が明らかでない例をまとめている。また、素掘り井戸として報告されている例が散見されるが、これらに関しては井戸側抜き取りの可能性が否定できないため、検討対象としての類型には含めなかった。

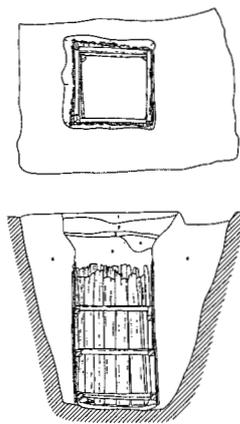
A類型 横板井籠組（6例）

厚さ10 前後の横板を出枿、入枿によって井籠形に組み合わせ、中央に設けられたダボにより横板を上へ上へと積み上げる。構造上井戸の開口部が広く、縦板組隅柱横棧どめ、縦板組横棧どめに比べて浅い井戸となる。東院で検出された97-左京第435次調査 井戸SE12は本類型の典型例であり、長岡京跡における最大規模の井戸である。A類型には複合形態の確実な例がなく細分を行っていないが、宮内第178次調査の2-井戸SE05では壁面に残る痕跡から井籠組と曲物の複合形態として報告されている。

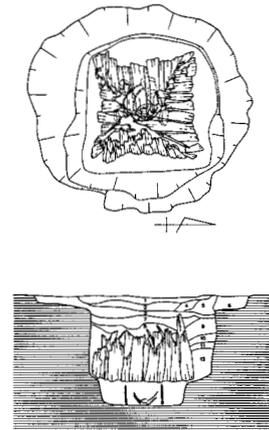
A 類型 (97-L435 SE12)



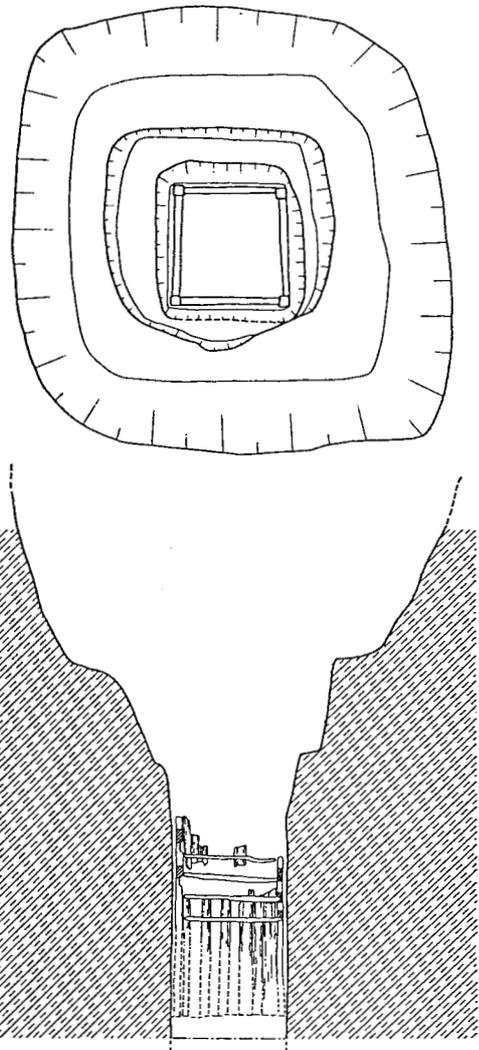
B 1 類型 (125-R688 SE16)



B 2 類型 (87-L384 SE108)



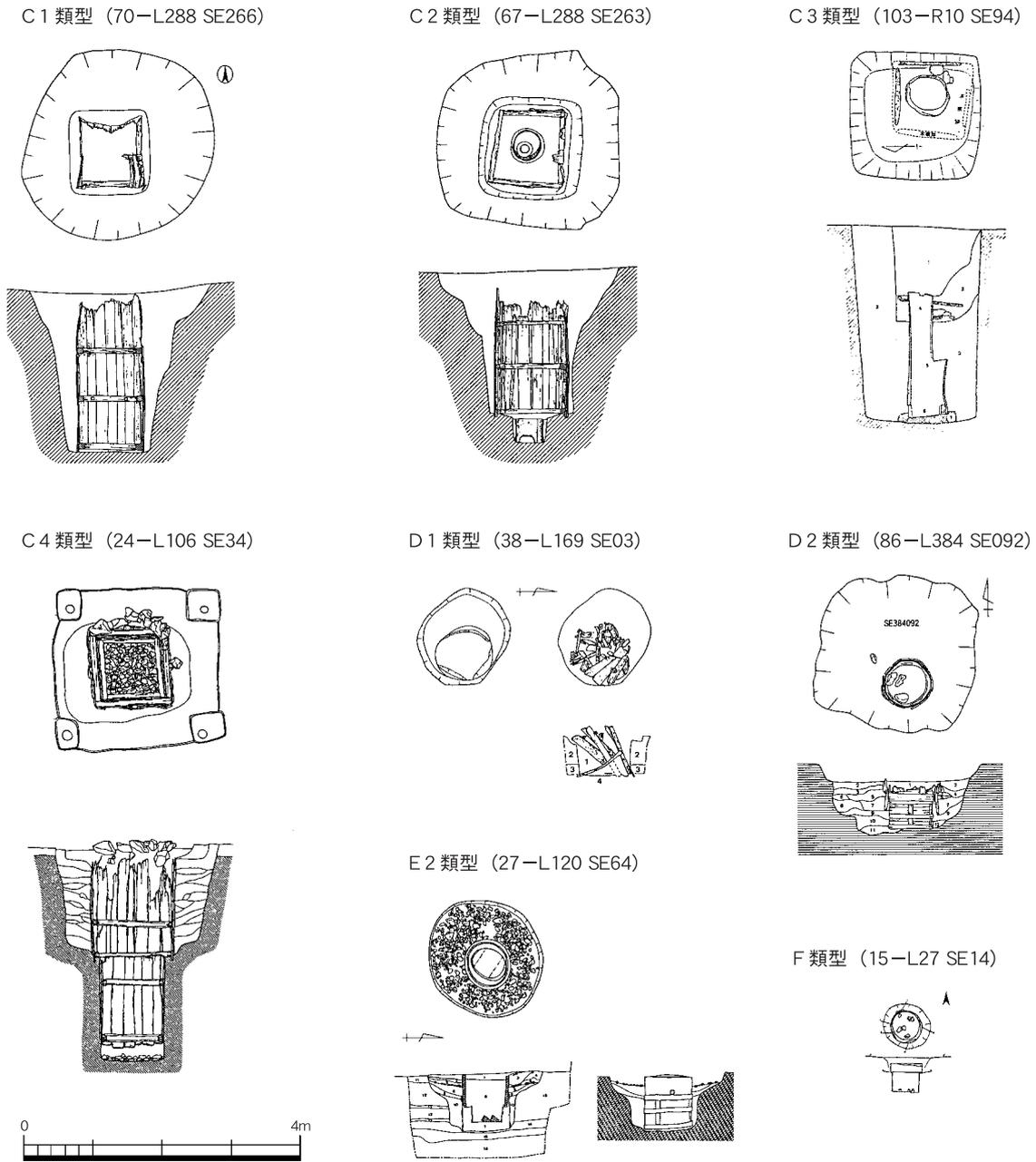
B 4 類型 (110-R240 SE01)



付表-8 井戸側類型一覽表

	宮内	左京	右京	合計
A 類型		3	3	6
B 1 類型		10	3	13
B 2 類型		1		1
B 3 類型			1	1
B 4 類型			1	1
C 1 類型	1	16	4	21
C 2 類型		2	1	3
C 3 類型			1	1
C 4 類型		2	1	3
D 1 類型		2		2
D 2 類型	1	6		7
E 1 類型				0
E 2 類型		1		1
F 類型		15		15
X 1 類型			1	1
X 2 類型	1	3	1	5
不明	4	48	11	63
合計	7	109	28	144

第39図 井戸側類型図-1 (1/100)



第40図 井戸側類型図-2 (1/100)

B 類型 縦板組隅柱横棧どめ (16例)

四隅の角材に設けた柄穴に横棧をはめ込み、隅柱と横棧によって縦板を保持する形態。この B 類型は下位の井戸側の有無・形態によって、井戸側がないもの (B 1 類型・13例)、曲物との複合形態 (B 2 類型・1例)、石組との複合形態 (B 3 類型・1例)、縦板組隅柱横棧どめ井戸側を複数段積み上げるもの (B 4 類型・1例) に細分できる。

C 類型 縦板組横棧どめ (28例)

隅柱を用いることなく、出柄、入柄で組んだ横棧により縦板を保持する形態。C 類型も下位の井戸側がないもの (C 1 類型・21例)、曲物との複合形態 (C 2 類型・3例)、丸太刳り抜

きとの複合形態（C 3 類型・1 例）、縦板組横棧どめ井戸側を複数段積み上げるもの（C 4 類型・3 例）に細分される。なお、B 類型にも丸太割り抜き井戸側などとの複合形態の存在が予想される。B 類型の下位井戸側形態としての縦板組横棧どめ井戸側、C 類型の下位井戸側形態としての縦板組隅柱横棧どめ井戸側が存在するか否かは、さらにそれぞれの技術的な検討を行う必要がある。また、本調査井戸SE05のように上下の横棧間に支柱を設置する例（67-左京第288次調査 井戸SE263）があるが、支柱は横棧の補強補助材であり、今回行った分類上の概念とは性格が異なるため検討対象には含めなかった。

D 類型 縦板組（9 例）

横棧を使うことなく、短い縦板を円形ないし方形に並べるもの。単一形態（D 1 類型・2 例）と、曲物との複合形態（D 2 類型・7 例）に分かれる。縦板の強度を考慮すれば、曲物以上に井戸全体の深さが増す井戸側とは複合しないものと考えられる。また、D 2 類型は曲物の補強材と考えることも可能であり再検討を要する。

E 類型 丸太割り抜き（1 例）

丸太割り抜き材を井戸側とするもので、検出例としては曲物との複合形態（E 2 類型・1 例）がある。単一形態の E 1 類型は E 2 類型よりその存在を想定したもので検出例はない。

F 類型 曲物（15 例）

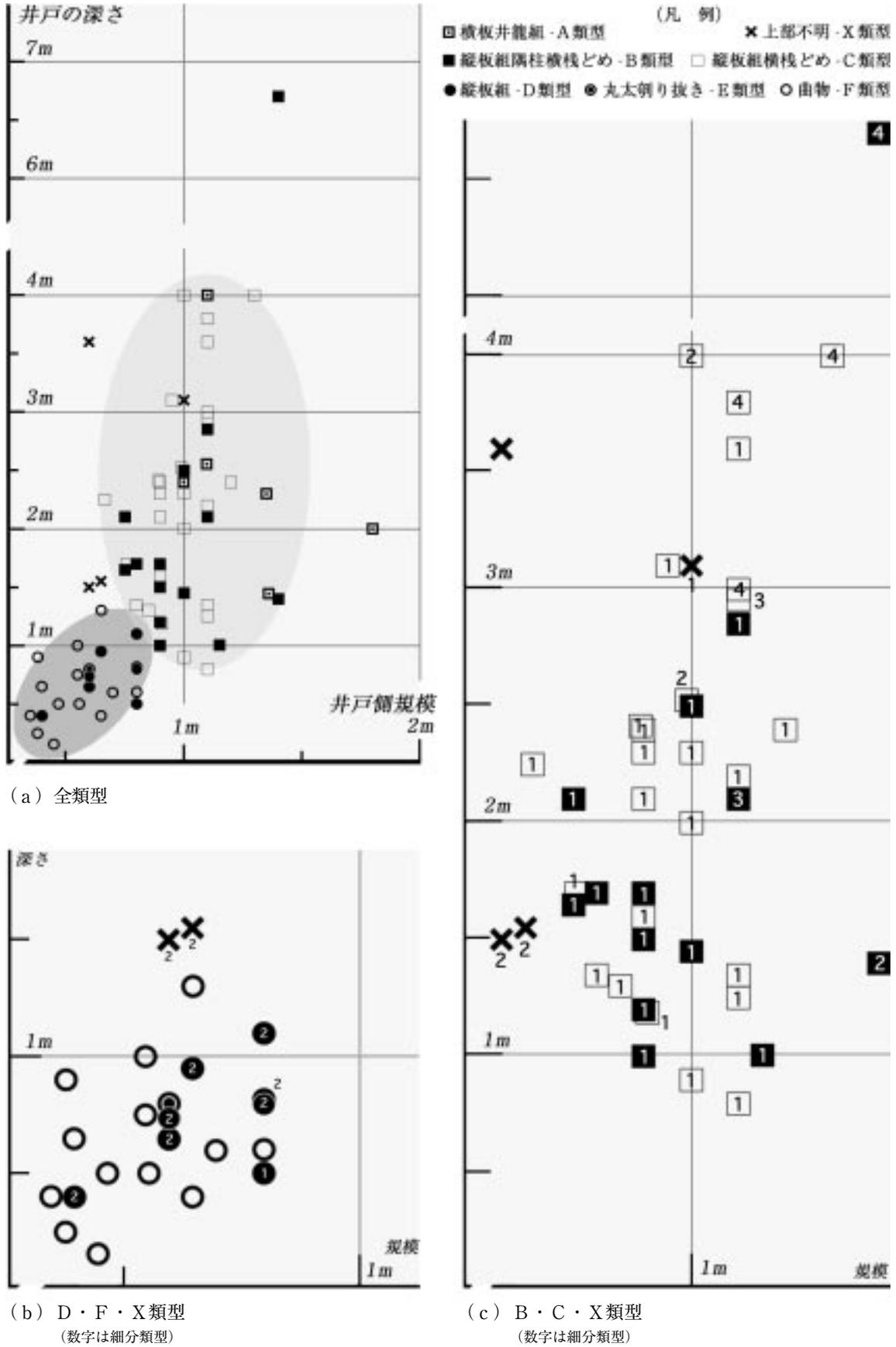
曲物を井戸側とするもので、複数段積み上げることで全体の深度を確保するものが多い。A～F 類型と比較して強度的に劣っており、最大径が曲物の大きさに制約されることから、下位井戸側に他の形態を用いることがない。井戸側として利用された曲物が全て生活道具の転用と判断し得るのか、井戸側専用の曲物の存在を検討する必要があるだろう。

X 類型 上位井戸側不明（6 例）

A～F 類型とは分類概念が異なるが、下位に井戸側が残存するものの抜き取りによって上位の井戸側形態が判然としない例を集めた仮類型である。下位形態に丸太分割井戸側を用いるもの（X 1 類型・1 例）、曲物を用いるもの（X 2 類型・5 例）があり、これらは複合形態ないし同一井戸側を積み上げた形態と考えられる。

B. 井戸側類型と井戸の深さ

第41図の分布グラフでは井戸側の平面規模と、検出面から底部まで井戸全体の深さの関係を示した。グラフ（a）には全類型が含まれており、A 類型、B・C 類型、D・F 類型が法量的なまとまりを示すことが理解できる。すなわち、A 類型は井戸の開口部が広く、長い縦板を横棧で支持する B・C 類型は開口部の広さに比べて深い井戸が構築される。また、曲物を用いる D 2・F 類型は開口部と深さが 1 対 2 となる比率を中心に分布している。グラフ（c）では縦板組の B・C 類型と上位井戸側が明らかでない X 類型を抽出した。各細分類型は開口部の広さに大きな違いが認められないが、大まかに見て単一形態の B 1・C 1 類型、異なった井戸側との複合形態の B 2・B 3・C 2・C 3 類型、同一形態を積み上げる B 4・C 4 類型の順に深さが増すことが分かる。また、B 類型と C 類型の関係、すなわち隅柱の有無は法量的なまとまり



第41図 井戸側の平面規模と井戸の深さ

として反映されないことが指摘できる。B類型はその構造からC類型と比較してより強度が期待でき、長岡京跡の井戸のなかで最も深い例（110-右京第240次調査 井戸SE01）も認められる。しかし、110は同一形態の井戸側を積み上げたB4類型であり、上位井戸側が1段と想定されるB1～3類型は全体の深さが3mまでに限られ、多くは深さ1～2m弱の間に分布している。このような分布の背景には隅柱として用いられる角材の長さに井戸側全体の深さが制約を受けた状況が推測され、対するC1～3類型では過半数が深さ2mを超えている。

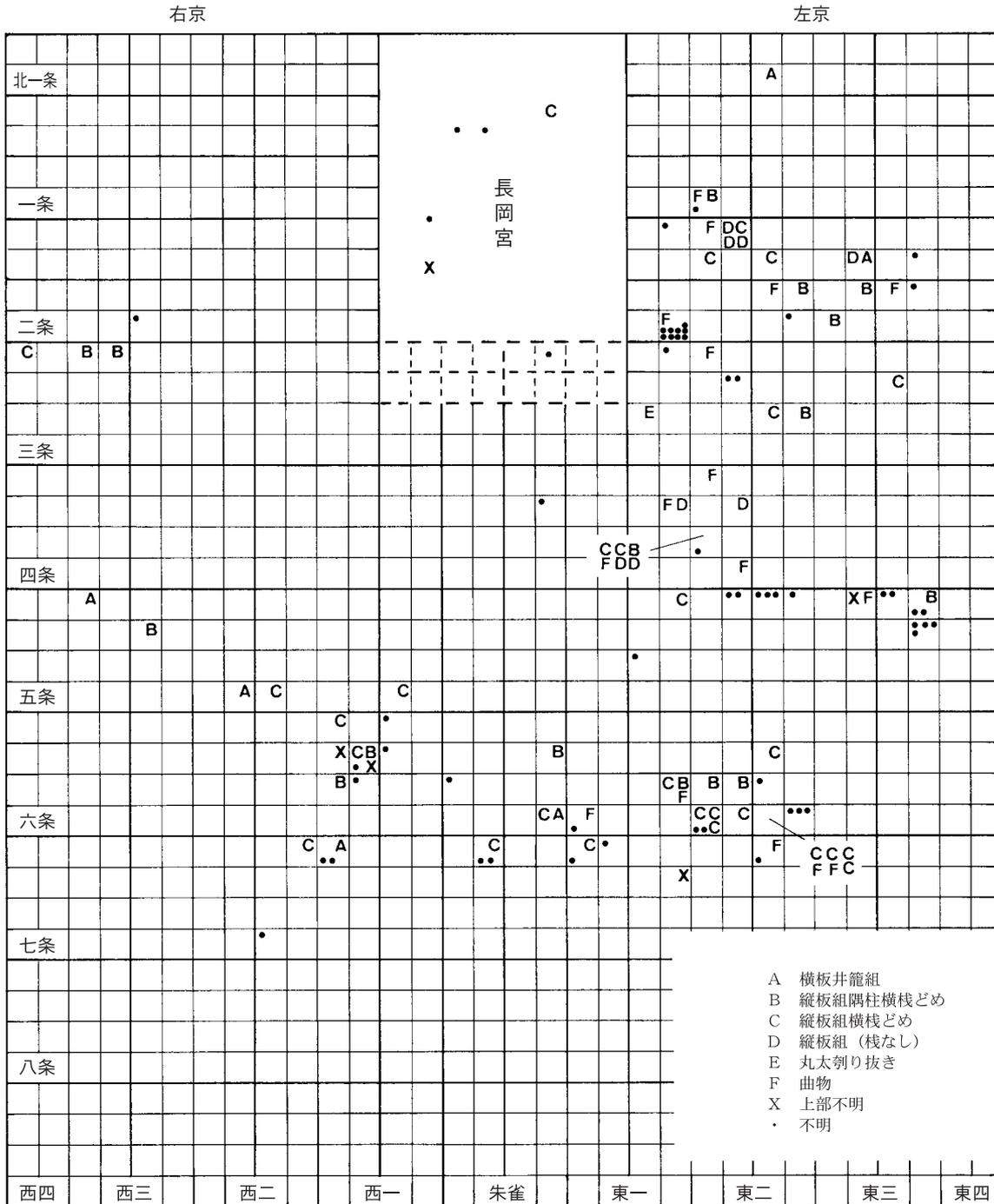
単一形態の確認を再度行わなければならないが、B1・C1類型を見れば深さ0.8～1.7m、2～2.5m、そして3mを超えるものにグループ化できる。この分布は井戸検出面から底部までの深さで検出面の削平を考慮しなければならないが、地中に納められる縦板の長さ、すなわち、入手可能な縦板に大・中・小の規格が存在した可能性が推察される。今回、資料の提示はできなかったが、B・C類型における縦板の最大残存長は2.3mを測り、2m弱、1.5m前後、1m前後のまとまりが予見される。また、C4類型では完全な状態で残されていた下位井戸側から、井戸構築時の縦板の長さ1.1m（47-左京第210次調査 井戸SE37）、1.3m（24-左京第106次調査 井戸SE34）、1.9m（124-右京第668次調査 井戸SE01）の値が得られた。縦板の長さ規格と納めることのできる井戸側の高さとの検討作業は、井戸側抜き取り痕跡や掘形の形態とともに、上部井戸側形態が明らかでないX類型、完全に井戸側が抜き取られ対象から除外した井戸掘形の井戸側復元や性格解明の手段となるだろう。例えば、底部に曲物を伴うX2類型の浅いもの（2-宮内第178次調査 井戸SE05、17-左京第53次調査 井戸SE17）は全体の深さが曲物積み上げによるものではなく、高さ1m強の小規模な縦板組横棧どめ井戸側との複合形態と考えることができる。また、119（右京第408次調査 井戸SE03）では、大規模な縦板組横棧どめないし二段積み上げの縦板組横棧どめとの複合形態の可能性が指摘できる。

C. まとめ

今回の検討作業では井戸という対象の大きさに対する力量不足が災いし、多くの重要な検討課題に言及できなかった。井戸側内部では横棧や横板の規格性、「濾過」施設と判断されている底部の礫や炭の役割、水溜め構造の検討などが挙げられる。また、井戸掘形や出土遺物の検討も残された課題である。さらに、長岡京跡では宅地内における井戸付随施設と溝・建物・柵・門などを含めた配置状況の確認が他の都城に比べて容易であり、井戸という性格の明らかな遺構が基本的なレイアウト（導線）の復元に果たす役割は大きいと言える。長岡京跡全域における井戸や井戸側タイプの分布（第42図）には予想される水位と井戸の深さとの関連（井戸底部の標高をもとにした水位の復元）、井戸検出例が著しい宅地の存在など、有意なまとまりを見出せる要素は非常に限られている。逆に、右京六条一坊十一・十二町では大規模な発掘調査が行われているにも関わらず井戸が確認されておらず、井戸をほとんど必要としない特別な施設の存在が予想されている。他の都城や乙訓地域における井戸の変遷など、残された多くの課題については、さらに検討を行い他日改めてその様相を提示したい。

付表-9 井戸側と井戸掘形対応表

井戸側類型		掘形の形態					
		円形	楕円形	不整形	長方形	方形	不明
横板井籠組	A	1				5	
縦板組隅柱横棧どめ	B 1~4	2				11	3
縦板組横棧どめ	C 1~4	5	1		1	20	1
縦板組	D 1・2	5	1			2	1
丸太刳り抜き	E	1					
曲物	F	9	2		1	1	1
不明+曲物	X	4				1	
不明		17	6	1	1	22	18



第42図 長岡京跡井戸分布図

付表-10 長岡京跡井戸一覧表

区域	番号	調査回数	遺構番号	推定地	井戸側	類型	井戸側規模	掘形	掘形規模	文献
宮内	1	P99	S E 01	内裏南方官街	不明	-	径1m×1.2m	円形	不明	(11)
	2	P178	S E 05	朝堂院西方官街	不明+曲物	X 2	不明×1.6m	円形	辺1.6m	(12)
	3	P217	S E 24	北辺官街 (北部)	縦板組・曲物+楕円形曲物	D 2	径0.8m×0.81m	円形	径1.67m	(13)
	4	P248	S E 31	朝堂院北西官街	不明	-	不明×1.7m	方形	長2.9m	(14)
	5	P262	S E 40	北辺官街 (南部)	不明	-	不明	-	不明	(15)
	6	P263	S E 30	北辺官街 (南部)	縦板組横棧どめ	C 1	辺1.1m×1.35m	方形	辺0.9m	(16)
	7	P278	S E 30	北辺官街 (南部)	不明	-	不明×3.8m	楕円形	長1.9m	(17)
左京	8	L4	S E 10	四条二坊七町	縦板組	D 1	辺0.7m×不明	-	不明	(18)
	9	L10	S E 04	一条二坊五町	曲物+曲物	F	径0.56m×0.5m	楕円形	径1.0m	(19)
	10	L15	S E 18	四条二坊十一町	円形縦板組+曲物	D 2	径0.6m×0.65m	円形	径0.9m	(20)
	11	L22	S E 06	三条二坊八町	不明	-	不明×2.5m	円形	径1.5m	(21)
	12	L27	S E 02	四条二坊十一町	縦板組隅柱横棧どめ	B 1	辺0.75m×2.1m以上	円形	径3.5m	(20)
	13		S E 05	四条二坊十一町	縦板組横棧どめ	C 1	辺0.67m×2.25m以上	円形	径1.6m	
	14		S E 08	四条二坊十一町	円形縦板組+曲物+曲物	D 2	径0.6m×0.75m	円形	径1.5m	
	15		S E 14	四条二坊十一町	曲物+曲物	F	径0.47m×0.5m	円形	径0.7m	
	16		S E 25	四条二坊十一町	不明	-	不明×1.15m	円形	径1.7m	
	17	L53	S E 17	七条二坊七町	不明+曲物+曲物	X 2	径0.65m×1.55m	-	長1.2m	(22)
	18	L59	S E A 01	五条四坊八町	縦板組隅柱横棧どめ	B 1	辺0.8m×1.7m	円形	径1.5m	(23)
	19		S E 01	五条四坊一町	不明	-	不明×1.2m	方形	辺3.2m	
	20	L67B	S E 03	五条三坊十六町	不明+曲物+曲物	X 2	径0.6m×1.5m	円形	径2.5m	(24)
	21	L70	S E 32	四条二坊九町	曲物	F	径0.65m×0.4m	円形	長1m	(25)
	22	L76	S E 01	五条四坊一町	不明	-	不明	-	不明	(26)
	23	L102	S E 29	六条一坊五町	横板井籠組	A	辺1.35m×2.3m	円形	長4.35m	(4)
	24	L106	S E 34	五条二坊八町	縦板組横棧どめ+縦板組横棧どめ	C 4	辺1.1m×3m	方形	辺2.5m	(27)
	25	L118	S E 08	一条二坊十二町	不明	-	不明×1.3m	円形	径1.6m	(28)
	26		S E 18	一条二坊十二町	縦板組隅柱横棧どめ	B 1	辺1m×1.45m	方形	辺3.6m	
	27	L120	S E 64	三条二坊三町	丸太削り抜き+曲物	E 2	径0.6m×0.8m	円形	径1.7m	(29)
	28	L130	S E 09	二条二坊九町	曲物	F	径0.8m×0.6m	円形	径0.8m	(30)
	29	L133	S E 134	三条四坊二町	縦板組横棧どめ	C 1	辺1m×2.0m	楕円形	長2.6m	(31)
	30	L140	S E 2	五条三坊十六町	曲物+曲物+曲物	F	不明×1m	円形	径1.4m	(32)
	31		S E 150	五条三坊一町	不明	-	不明	円形	不明	
	32		S E 215	五条三坊一町	不明	-	不明	方形	辺2.4m	
	33	L145	S E 20	四条二坊十五町	縦板組+曲物+曲物	D 2	径0.4m×0.4m	円形	径1.7m	(33)
	34	L157	S E 04	一条二坊十二町	曲物	F	径0.45m×0.16m	円形	径0.54m	(34)
	35	L159	S E 16	二条三坊三町	曲物+曲物+曲物	F	辺0.4m×0.65m	長方形	辺1.4m	(35)
	36		S E 33	二条三坊二町	縦板組横棧どめ	C 1	辺1.1m×1.25m	方形	不明	
	37	L169	S E 01	二条二坊十六町	円形縦板組+曲物	D 2	径0.8m×1.1m	円形	長1.5m	(36)
	38		S E 03	二条二坊十六町	円形縦板組+曲物	D 2	径0.8m×0.8m	楕円形	長1.4m	
	39		S E 04	二条二坊十六町	縦板組横棧どめ	C 1	不明×0.8m	方形	長2.4m	
	40		S E 16	二条二坊十六町	方形縦板組	D 1	長0.8m×0.5m	方形	辺1.3m	
	41	L172	S E 08	二条三坊五町	不明	-	不明×0.6m	楕円形	長1.6m以上	(37)
	42	L204	S E 20	七条一坊九町	不明	-	不明×2.3m	円形	径1.6m	(38)
	43		S E 37	七条一坊九町	縦板組横棧どめ	C 1	辺1.1m×0.8m	円形	径4.5m	
	44		S E 45	七条一坊十六町	不明	-	不明×1.05m	方形	辺1.6m	
	45	L209	S E 10	二条二坊十五町	不明	-	不明×0.8m	方形	辺2.7m	(39)
	46		S E 23	二条二坊十五町	不明	-	不明×0.7m	楕円形	長1.8m	
	47	L210	S E 37	六条二坊十三町	不明+縦板組横棧どめ+縦板組横棧どめ	C 4	辺1.1m×3.8m	方形	長3.1m	(40)
	48	L214	S E 59	三条三坊三町	縦板組横棧どめ	C 1	辺0.76m×1.7m	長方形	長1.85m	(41)
	49	L215	S E 02	五条二坊三町	不明	-	不明×0.8m	楕円形	長1.4m	(42)
	50	L230	S E 23	六条二坊十二町	縦板組横棧どめ	C 1	辺1.1m×2.2m	方形	辺3m	(43)
	51	L242	S E 14	四条二坊十三町	曲物	F	径0.38m×0.25m	楕円形	長1.1m	(44)
	52	L267	S E 06	二条三坊十二町	縦板組隅柱横棧どめ	B 1	辺0.9m×1m	方形	径1.5m	(45)
	53	L269	S E 16	六条一坊十二町	曲物+曲物+曲物	F	径0.55m×1m	円形	径1.1m	(2)
	54		S E 17	六条一坊十二町	不明	-	不明×2.1m	方形	辺2m	

区域	番号	調査回数	遺構番号	推定地	井戸側	類型	井戸側規模	掘形	掘形規模	文献
左	55	L276	S E 11	二条二坊五町	不明	-	不明×0.5m	方形	長3m	(46)
	56		S E 12	二条二坊五町	不明	-	不明×0.6m	方形	長2.6m	
	57		S E 13	二条二坊五町	不明	-	不明×0.7m	円形	長2.6m	
	58		S E 14	二条二坊五町	不明	-	不明×1.2m	方形	長2.7m	
	59		S E 15	二条二坊五町	不明	-	不明×1.1m	方形	長2.6m	
	60		S E 16	二条二坊五町	不明	-	不明×0.8m	円形	長3.3m	
	61		S E 17	二条二坊五町	不明	-	不明×0.6m	円形	長2.5m	
	62		S E 18	二条二坊五町	不明	-	不明×0.8m	円形	長2.3m	
	63		S E 19	二条二坊五町	不明	-	不明×0.8m	不整形	長2m	
	64	L287	S E 11	二条二坊十町	縦板組横棧どめ+曲物+曲物	C 2	辺0.8m ×1.35m	方形	長1.9m	(47)
	65	L288	S E 261	六条三坊四町	曲物	F	径0.55m×0.75m	円形	径1m	(48)
	66		S E 262	六条三坊四町	縦板組横棧どめ	C 1	辺1m×2.3m	円形	径1.2m	
	67		S E 263	六条三坊四町	縦板組横棧どめ+曲物	C 2	辺1m×2.5m	方形	辺2.5m	
	68		S E 264	六条三坊四町	不明	-	不明×1.2m	楕円形	長3.3m	
	69		S E 265	六条三坊四町	不明	-	不明×0.75m	円形	径1.2m	
	70		S E 266	六条三坊四町	縦板組横棧どめ	C 1	辺0.9m×2.4m	円形	径2.7m	
	71		S E 267	七条三坊一町	不明	-	不明×0.7m	円形	径1.2m	
	72		S E 268	七条三坊一町	不明+曲物	F	径0.38m×0.9m	円形	径1.1m	
	73	L295	S E 25	六条三坊二町	縦板組横棧どめ	C 1	辺0.9m×2.1m	方形	辺1.5m	(49)
	74	L297	S E 07	六条二坊十二町	不明	-	不明×1.7m	円形	径3.5m	(50)
	75		S E 09	六条二坊十二町	不明	-	不明×1.8m	円形	径2m	
	76	L298	S E 501	三条二坊九町	曲物	F	径0.35m×0.4m	円形	長0.9m	(51)
	77	L299	S E 15	四条一坊七町	不明	-	不明×0.6m	方形	辺1.4m	(52)
	78	L306	S E 258	六条三坊三町	不明	-	不明×1m	楕円形	長2.2m	(48)
	79		S E 259	六条三坊四町	縦板組横棧どめ	C 1	辺0.85m×1.3m	円形	径1.3m	
	80		S E 260	六条三坊四町	不明(曲物か)+曲物	F	径0.65m×1.3m	円形	径1.3m	
	81	L333	S E 002	二条四坊三町	不明+曲物	X 2	不明×1.1m	円形	径1.3m	(53)
	82	L334	S E 007	二条四坊七町	不明	-	不明×2.2m	方形	長2.4m	
83	L341	S E 03	二条三坊六町	縦板組隅柱横棧どめ	B 1	辺0.9m×1.2m	方形	長1.93m	(54)	
84	L363	S E 084	二条三坊十五町	横板井籠組	A	辺1.1m×2.55m	方形	辺2.3m	(53)	
85	L364	S E 269	六条三坊五町	不明	-	不明×1m	長方形	長1.9m	(48)	
86	L384	S E 092	二条三坊十五町	縦板組+曲物+曲物	D 2	径0.65m×0.95m	方形	辺2.2m	(53)	
87		S E 108	二条三坊十四町	縦板組隅柱横棧どめ+曲物	B 2	辺1.4m×1.4m	方形	辺1.8m		
88	L385	S E 537	二条四坊六町	不明	-	不明×0.8m	円形	径1.2m		
89	L407		六条二坊六町	縦板組隅柱横棧どめ	B 1	不明	-	不明		
90			六条二坊六町	縦板組横棧どめ	C 1	不明	-	不明		
91			六条二坊六町	曲物	F	不明	-	不明		
92	L414	S E 23	六条二坊十二町	縦板組横棧どめ	C 1	辺1.2m×2.4m	方形	辺2.7m	(55)	
93		S E 39	六条二坊十二町	縦板組横棧どめ	C 1	辺0.9m×2.4m	方形	長2.5m		
94		S E 59	六条二坊十一町	縦板組隅柱横棧どめ	B 1	辺1.2m×不明	-	不明		
95		S E 78	六条二坊十四町	縦板組隅柱横棧どめ	B 1	辺0.9m×1.7m	方形	長2m		
96		S E 150	六条二坊十一町	縦板組横棧どめ	C 1	辺0.9m×1.2m	方形	長1.8m		
97	L435	S E 12	北一条三坊二町	横板井籠組	A	辺1.8m×2m	方形	長4.2m	(56)	
98	L443	S E 31	四条二坊七町	曲物+曲物+曲物	F	径0.7m×0.6m	方形	辺2.5m	(57)	
99	L444	S E 19	六条一坊七町	縦板組隅柱横棧どめ	B 1	辺0.9m×1.5m	方形	辺3m	(58)	
100	L479	S E 05	六条一坊五町	縦板組横棧どめ	C 1	辺0.9m×2.3m	方形	長3m以上	本書	
101	XL8316	S E 3	三条三坊六町	縦板組隅柱横棧どめ	B 1	辺1.15m×1m以上	-	不明	(59)	
右	102	R10	S E 40	七条一坊一町	不明	-	不明×5.4m	方形	長3.5m	(60)
	103		S E 94	七条一坊一町	縦板組横棧どめか+丸太削り抜き	C 3	辺1.1m×2.94m	方形	辺1.9m	
	104	R28	S E 80	七条一坊一町	不明	-	不明×4m	方形	長3.7m	(61)
	105	R111	S E 15	七条二坊九町	縦板組横棧どめ	C 1	辺1m×0.9m	方形	辺1.2m	(62)
	106	R128	S E 06	七条二坊十三町	不明	-	不明×0.7m	円形	径1.6m	(63)
	107	R155	S E 12	六条二坊七町	不明+丸太分割削り抜き	X 1	径1m×3.1m	方形	長4.4m	(64)
	108	R196	S E 03	六条一坊十五町	不明	-	不明×2.5m	方形	辺2.8m	(65)

区域	番号	調査回数	遺構番号	推定地	井戸側	類型	井戸側規模	掘形	掘形規模	文献	
右京	109	R236	S E 51	三条四坊一町	縦板組隅柱横棧どめ+円形石組み	B 3	辺1.1m×2.1m	方形	辺3.2m	(66)	
	110	R240	S E 01	三条四坊八町	不明+不明+縦板組隅柱横棧どめ	B 4	辺1.4m×6.7m	方形	辺5.8m	(67)	
	111	R246	S E 01	五条四坊八町	横板井籠組	A	辺1.1m×4m	方形	長4.8m	(68)	
	112	R279	S E 03	六条一坊六町	不明	-	不明×4m以上	方形	辺4m	(69)	
	113	R304	S E 01	六条二坊三町	不明	-	不明×3.6m	方形	辺4.4m	(70)	
	114	R314	S E 06	六条二坊二町	縦板組隅柱横棧どめ	B 1	辺1.1m×2.85m	方形	長2.6m	(71)	
	115	R364	S E 09	七条二坊八町	不明	-	不明×1.9m	方形	辺1.5m	(72)	
	116	R365	S E 02	六条二坊二町	縦板組横棧どめ	C 1	辺1.1m×3.6m	方形	長2.8m	(73)	
	117	R370	S E 40	五条三坊四町	横板井籠組	A	1m×2.4m	方形	辺2.5m	(74)	
	118	R389	S E 14	五条二坊十三町	縦板組横棧どめ	C 1	辺0.9m×1.6m	方形	長2.8m	(75)	
	119	R408	S E 03	六条二坊二町	不明+曲物	X 2	径0.6m×3.6m	方形	辺3.3m	(76)	
	120	R442	S E 24	六条二坊八町	縦板組横棧どめ	C 1	辺0.95m×3.1m	方形	辺2m	(77)	
	121	R479	S E 14	七条二坊八町	不明	-	不明	方形	長1.2m	(78)	
	122	R513	S E 24	五条一坊十三町	縦板組横棧どめ+曲物	C 2	1m×4m	方形	長2.7m	(79)	
	123	R663	S E 02	五条三坊十五町	縦板組隅柱横棧どめ	B 1	辺0.75m×1.65m	方形	長1.73m	(80)	
	124	R668	S E 01	三条四坊十六町	縦板組横棧どめ+縦板組横棧どめ	C 4	辺1.3m×4m	方形	辺2m	(81)	
	125	R688	S E 16	六条二坊六町	縦板組隅柱横棧どめ	B 1	辺1m×2.5m	方形	辺2.1m	(82)	
	126	XR81006	S E 01	六条二坊二町	不明	-	不明	方形	長2.4m	(83)	
	127	XR84109	S E 01	二条三坊十三町	不明	-	辺0.9m×3.2m	方形	辺3m	(84)	
	128	XR93300	S E 25	七条二坊八町	横板井籠組	A	辺1.36m×1.44m	方形	長2.8m	(85)	
	129	XR96065	S E 01	六条一坊十六町	不明	-	不明×2m以上	方形	辺2.2m	(86)	
	左京	130	L 2			不明	-	不明	-	不明	(87)
		131	L14	S E 08	二条二坊八町	不明	-	不明	-	不明	(88)
		132	L38A	S E 01		不明	-	不明	-	不明	
		133	L62	S E 01		不明	-	不明	-	不明	
		134		S E 409		不明	-	不明	-	不明	
		135	L93	S E 80	五条三坊八町	不明	-	不明	-	不明	(89)
		136	L164	S E 379	五条二坊十六町	不明	-	不明	-	不明	(90)
		137		S E 405	五条二坊十六町	不明	-	不明	-	不明	
138		L174	S E 2	五条四坊八町	不明	-	不明	-	不明	(91)	
139			S E 3	五条四坊八町	不明	-	不明	-	不明		
140			S E 4	五条四坊九町	不明	-	不明	-	不明		
141			S E 5	五条四坊九町	不明	-	不明	-	不明		
142			S E 6	五条四坊九町	不明	-	不明	-	不明		
143			S E 7	五条四坊九町	不明	-	不明	-	不明		
144			S E 45	五条三坊一町	不明	-	不明	-	不明		

(付表-10) 長岡京跡井戸一覧表の凡例

- ・一覧表は宮・左京・右京の順に記載したが、左京域の詳細不明のものは最後にまとめて記載した。
- ・調査回数のうち頭文字に「X」と表記したものは立会調査である。
- ・推定地は新条坊名称であり、『年報 都城10 (付図) 長岡京条坊復原図』財団法人向日市埋蔵文化財センター 1999年を参考にした。
- ・井戸側規模は 平面規模×深さ を表記している。平面規模は井戸側の最大幅を、深さは検出面から底部までの値である。
- ・掘形規模は掘形検出面の最大幅を示した。

- 注1) 原 秀樹「長岡京跡左京第275次調査概要」『長岡京市報告書』第29冊 1992年
- 2) 岩崎 誠「左京第269次調査略報」『長岡京市センター年報』平成3年度 1993年
- 3) 岩崎 誠「長岡京跡左京第37次調査概要」『長岡京市報告書』第14冊 1985年
- 4) 山本輝雄・近澤豊明「長岡京跡左京第102次調査概要」『長岡京市センター報告書』第2集 1985年
- 5) 岩崎 誠「長岡京跡左京第23次調査概要」『長岡京市報告書』第14冊 1985年
- 6) 未報告
- 7) 中尾秀正「長岡京跡左京第184次調査概要」『長岡京市報告書』第20冊 1988年
- 8) 中島皆夫「長岡京跡左京第484次調査概要」『長岡京市報告書』第45冊 2003年
- 9) 山本輝雄「長岡京の井戸」『長岡京古文化論叢』同朋舎出版 1986年
- 10) 宇野隆夫「井戸考」『史林』第65巻5号 1982年
- 11) 竹原一彦「長岡宮跡第99次発掘調査概要」『向日市報告書』第7集 1981年
- 12) 渡辺 博「長岡宮跡第178次発掘調査概要」『向日市報告書』第22集 1988年
- 13) 中塚 良「長岡宮跡第217次発掘調査概要」『向日市報告書』第25集 1989年
- 14) 中塚 良「長岡宮跡第248次発掘調査概要」『向日市報告書』第37集 1993年
- 15) 中塚 良「長岡宮跡第262次調査」『向日市センター年報』平成3年度 1992年
- 16) 國下多美樹・清水みき「長岡宮跡第263次発掘調査概要」『向日市報告書』第36集 1993年
- 17) 秋山浩三・國下多美樹「長岡宮跡第278次発掘調査報告」『向日市報告書』第57集 2002年
- 18) 高橋美久二「長岡京跡左京三条二坊第2次発掘調査概要」『京都府概報』1976年
- 19) 高橋美久二「長岡宮跡昭和51年度発掘調査概要」『京都府概報』1977年
- 20) 山中 章「長岡京跡左京第15・27次発掘調査概要」『向日市報告書』第6集 1980年
- 21) 山中 章・丸 嘉樹「長岡京跡左京第22次発掘調査概要」『長岡京ニュース』第16号 1980年
- 22) 奥村清一郎他「長岡京跡左京第53次調査概要」『長岡京市報告書』第14冊 1985年
- 23) 『長岡京－京都市計画道路1等大路第3類第46号外環状線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
『埋蔵文化財発掘調査報告書』昭和55年度 1981年
- 24) 『京都市埋蔵文化財報告書』昭和55年度 1981年
- 25) 長谷川浩一他「長岡京跡左京第70次発掘調査概要」『向日市報告書』第8集 1982年
- 26) 鈴木久男他「左京四条二坊・三坊・四坊」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和56年度 1983年
- 27) 宮原晋一他「長岡京跡左京第106次発掘調査概要」『向日市報告書』第17集 1985年
- 28) 長谷川 達他「長岡京跡左京第118次発掘調査概要」『京都府センター概報』第15冊 1985年
- 29) 秋山浩三他「長岡京跡左京第120次発掘調査概要」『向日市報告書』第18集 1986年
- 30) 松崎俊郎・清水みき「長岡京跡左京第130次発掘調査概要」『向日市報告書』第27集 1989年
- 31) 鈴木廣司・長宗繁一「長岡京左京二条三・四坊」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和60年度 1988年
- 32) 鈴木廣司他「長岡京左京四条二・三坊」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和60年度 1988年
- 33) 國下多美樹他『向日市報告書』第51集 2000年
- 34) 山中 章「長岡京跡左京第157次発掘調査概要」『向日市報告書』第22集 1988年
- 35) 國下多美樹・清水みき「長岡京跡左京第159次発掘調査概要」『向日市報告書』第27集 1989年
- 36) 國下多美樹「長岡京跡左京第169次発掘調査概要」『向日市報告書』第30集 1990年
- 37) 秋山浩三「長岡京跡左京第172次発掘調査概要」『向日市報告書』第27集 1989年
- 38) 山本輝雄「左京第204次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和63年度 1990年
- 39) 秋山浩三「長岡京跡左京第209次発掘調査概要」『向日市報告書』第32集 1991年
- 40) 小田桐 淳「左京第210次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和63年度 1990年
- 41) 國下多美樹他「長岡京跡左京第196・214次発掘調査概要」『向日市報告書』第34集 1992年
- 42) 千喜良 淳「左京第215次調査略報」『長岡京市センター年報』平成元年度 1991年
- 43) 小田桐 淳「左京第230次調査略報」『長岡京市センター年報』平成元年度 1991年

- 44) 戸原和人他「長岡京跡左京第216・241・242次右京第349・357発掘調査概要(1)長岡京跡左京第241・242次」『京都府センター概報』第47冊 1992年
- 45) 石尾政信・鍋田 勇「名神高速道路関係遺跡発掘調査概要(1)長岡京跡左京第241・267・268次 向日工区」『京都府センター概報』第51冊 1992年
- 46) 秋山浩三他「長岡京跡左京第276次発掘調査概要」『向日市報告書』第36集 1993年
- 47) 山中 章・梅本康広他『向日市報告書』第56集 2003年
- 48) 長宗繁一・木下保明他『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第17冊 1998年
- 49) 中島皆夫「左京第295次調査略報」『長岡京市センター年報』平成4年度 1994年
- 50) 小田桐 淳「左京第297次調査略報」『長岡京市センター年報』平成4年度 1994年
- 51) 松崎俊郎「長岡京跡左京第298次発掘調査報告」『向日市報告書』第53集 2001年
- 52) 國下多美樹「長岡京跡左京第299次発掘調査概要」『向日市報告書』第38集 1994年
- 53) 平良泰久・小池 寛他『京都府遺跡調査報告書』第28冊 2000年
- 54) 中島信親「長岡京跡左京第341次発掘調査概要」『向日市報告書』第45集 1997年
- 55) 山本輝雄「左京第414次調査略報」『長岡京市センター年報』平成9年度 1999年
- 56) 梅本康広他『向日市報告書』第55集 2002年
- 57) 山口 均「長岡京跡左京第443次発掘調査報告」『向日市報告書』第58集 第1分冊 2002年
- 58) 小畑佳子「左京第444次調査概報」『長岡京市センター年報』平成12年度 2002年
- 59) 家崎孝治「長岡京跡(NG16)」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和58年度 1984年
- 60) 山本輝雄・久保哲正「長岡第九小学校建設にともなう発掘調査概要 長岡京跡右京第10次調査」『長岡京市報告書』第5冊 1980年
- 61) 山本輝雄・久保哲正「長岡第九小学校建設にともなう発掘調査概報 長岡京跡右京第28次調査」『長岡京市報告書』第5冊 1980年
- 62) 小田桐 淳「右京第111次調査概報」『長岡京市センター年報』昭和57年度 1983年
- 63) 山本輝雄「右京第128次調査概報」『長岡京市センター年報』昭和58年度 1984年
- 64) 岩崎 誠「右京第155次調査概報」『長岡京市センター年報』昭和58年度 1984年
- 65) 木村泰彦「右京第196次調査概報」『長岡京市センター年報』昭和60年度 1987年
- 66) 小田桐 淳「右京第236次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和61年度 1988年
- 67) 石尾政信「長岡京跡右京第240次発掘調査概要」『京都府センター概報』第23冊 1987年
- 68) 小田桐 淳「右京第246次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和61年度 1988年
- 69) 岩崎 誠『長岡京市センター報告書』第4集 1989年
- 70) 原 秀樹「右京第304次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和63年度 1990年
- 71) 小田桐 淳「右京第314次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和63年度 1990年
- 72) 中島皆夫「長岡京跡右京第364次調査概要」『長岡京市報告書』第27冊 1991年
- 73) 小田桐 淳・中島皆夫『長岡京市センター報告書』第10集 1997年
- 74) 山本輝雄・木村泰彦「右京第370次調査略報」『長岡京市センター年報』平成3年度 1993年
- 75) 原 秀樹「右京第389次調査概報」『長岡京市センター年報』平成3年度 1993年
- 76) 山本輝雄「右京第408次調査概報」『長岡京市センター年報』平成4年度 1994年
- 77) 木村泰彦「右京第442次調査概報」『長岡京市センター年報』平成5年度 1995年
- 78) 原 秀樹他「長岡京跡右京第479次調査概要」『長岡京市報告書』第33冊 1995年
- 79) 原 秀樹「右京第513次調査概報」『長岡京市センター年報』平成7年度 1997年
- 80) 山本輝雄「右京第657・663次調査概報」『長岡京市センター年報』平成11年度 2001年
- 81) 小田桐 淳『長岡京市センター報告書』第21集 2001年
- 82) 中島皆夫「右京第688次調査略報」『長岡京市センター年報』平成12年度 2002年
- 83) 中尾秀正・白川成明「長岡京跡第8106次立会調査概要」『長岡京市報告書』第9冊 1982年

- 84) 小田桐 淳・岩崎 誠「立会調査」『長岡京市センター年報』昭和59年度 1985年
 85) 花村 潔「第93300次立会調査概報」『長岡京市センター年報』平成5年度 1995年
 86) 花村 潔「立会調査」『長岡京市センター年報』平成8年度 1998年
 87) 高橋美久二「長岡京跡左京三条二坊第1次発掘調査概要」『京都府概報』 1975年
 88) 戸原和人「長岡京跡左京第14次」『長岡京ニュース』第9・10号 1978年
 89) 長宗繁一・本 弥八郎「左京四条三坊」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和57年度 1984年
 90) 鈴木廣司・長宗繁一「長岡京左京四条二・三坊」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和61年度 1989年
 91) 長宗繁一他「長岡京左京四条三・四坊」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和62年度 1991年

付表-11 報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうあとさきょうだい479じはくつちょうさほうこく
書名	長岡京跡左京第479次発掘調査報告
副書名	
シリーズ名	長岡京市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第32集
編著者名	中島 皆夫
編集機関	財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
所在地	〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10-1

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょうあと 長岡京跡 (左京第479次) くもみやいせき 雲宮遺跡 しばもといせき 芝本遺跡	ながおかきょうしこうたり 長岡京市神足 しばもと 芝本地内	26209	107 088 087	34度55分 07秒	135度42分 31秒	20021202) 20030328	734	消防庁舎 建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡 (左京第479次)	都城跡	長岡京期	井戸・土坑・溝・建物	土師器・須恵器・黒色土器・製塩土器・曲物・櫛・瓦など	左京六条一坊五町の宅地
雲宮遺跡・芝本遺跡	集落跡	弥生時代 平安時代以降 鎌倉時代 江戸時代	溝 礫敷遺構 溝 溝・流路	弥生土器・石器 緑釉陶器・灰釉陶器 瓦器・金属製品など 土師器・染付	左京第102次調査に次いで礫敷遺構を確認した。

緯度経度の測点は南調査区の中央部。また、緯度経度は国土座標旧測地系の数値から換算した。

図 版



(1) 北調査区平安時代以降全景 (南東から)



(2) 礫敷遺構SX32 (南西から)

長岡京跡左京第479次調査

図版二



(1) 礫敷遺構SX32検出状況 (西から)



(2) 礫敷遺構SX32第5・6区検出状況 (東から)



(3) 礫敷遺構SX32東半部 (東から)



(4) 礫敷遺構SX32 (東から)



(1) 左京第484次調査区から第1区



(2) 第1区から第2区



(3) 第2区から第3区



(4) 第3区から第4区



(5) 第4区から第5区



(6) 第5区から第6区

長岡京跡左京第479次調査

図版四



(1) 北調査区長岡京期全景 (北東から)



(2) 北調査区長岡京期全景 (西から)



(3) 北調査区長岡京期全景 (南東から)



(1) 南調査区长岡京期全景 (北東から)



(2) 南調査区长岡京期全景 (南東から)

長岡京跡左京第479次調査

図版六



(1) 井戸SE05・溝SD20~22 (東から)



(2) 井戸SE05・柵SA06~08 (北から)



(3) 土坑SK12 (西から)



(4) 溝SD23 (北から)



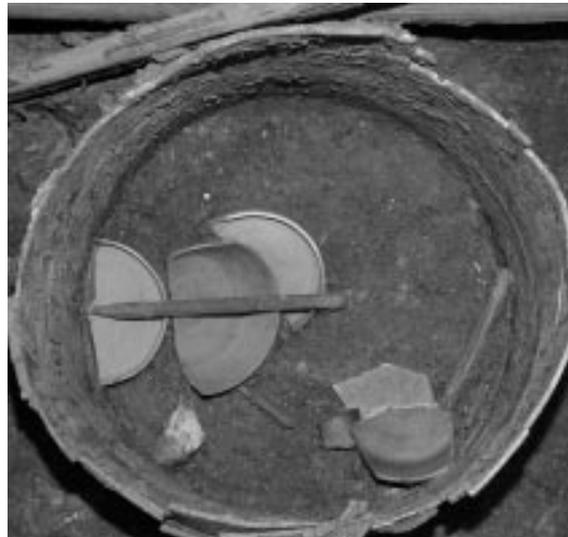
(1) 井戸SE05堆積状況 (南から)



(2) 井戸SE05須恵器出土状況 (南から)



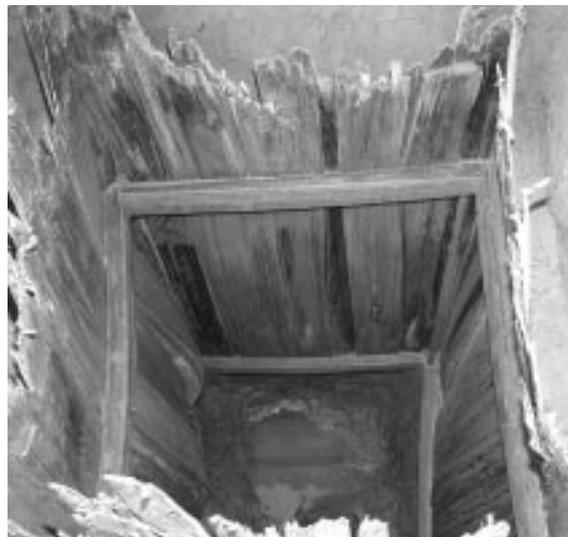
(3) 井戸SE05曲物出土状況 (南西から)



(4) 井戸SE05曲物出土状況 (南から)



(5) 井戸SE05井戸側と底部 (南から)



(6) 井戸SE05井戸側内完掘状況 (南から)

長岡京跡左京第479次調査

図版八



(1) 井戸SE05井戸側北西部 (南東から)



(2) 井戸SE05井戸側北東部 (南西から)



(3) 井戸SE05井戸側南東部 (北西から)



(4) 井戸SE05井戸側南西部 (北東から)



(1) 井戸SE05井戸側外部と掘形 (南から)



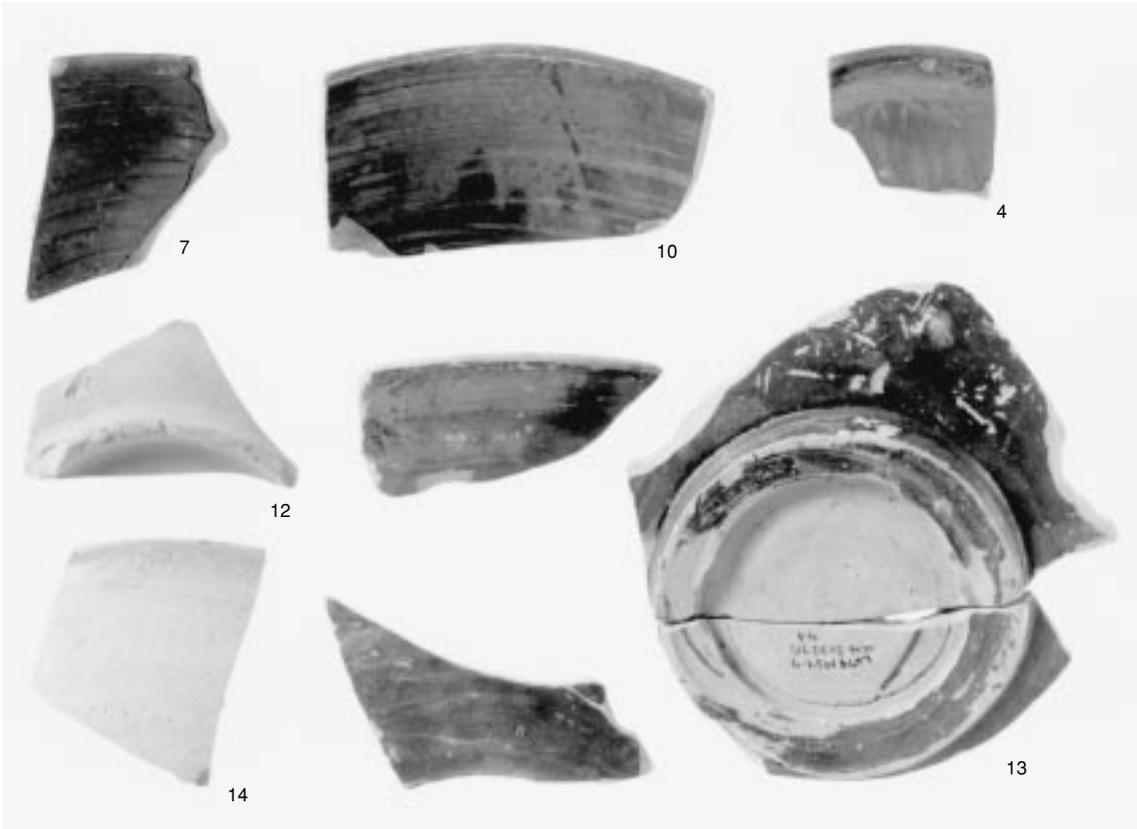
(2) 井戸SE05井戸側内部と掘形 (南から)



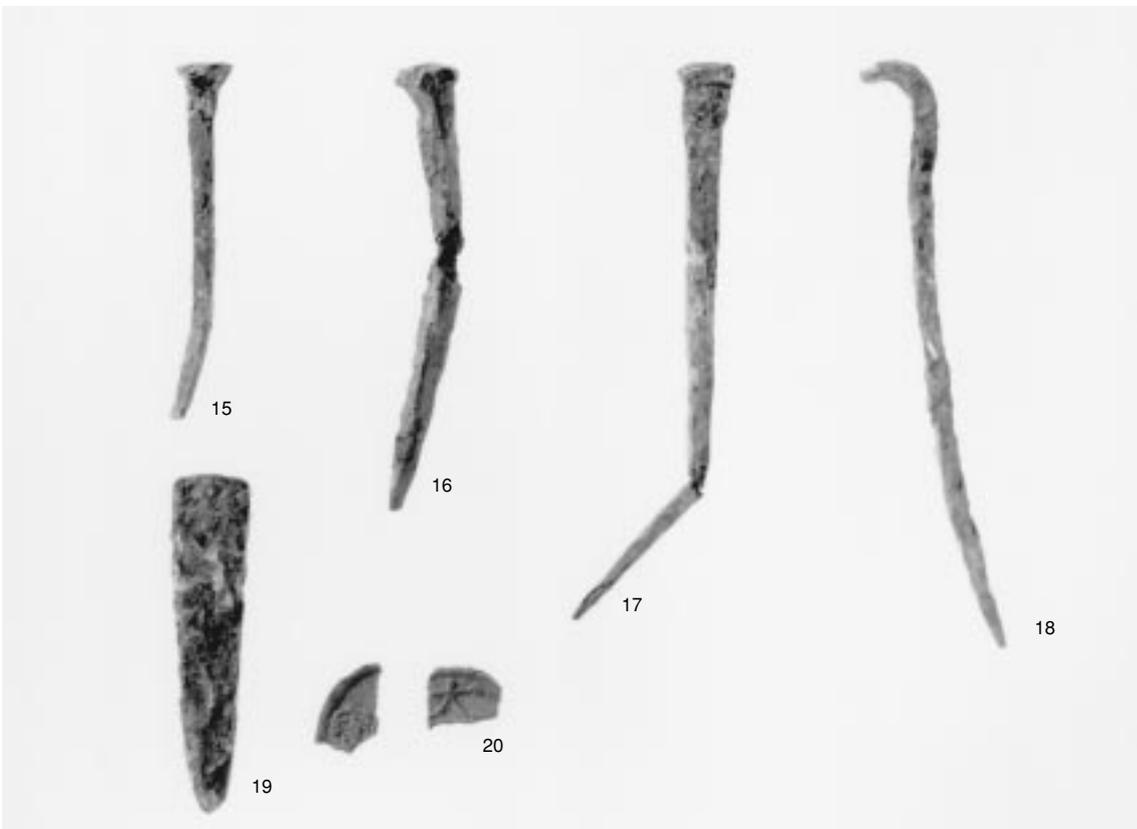
(1) 掘立柱建物SB19 (南東から)



(2) 溝SD31 (東から)



(1) 平安時代から中世の土器



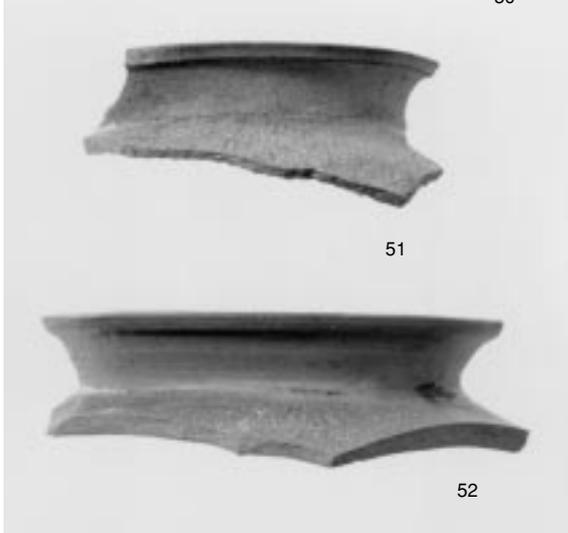
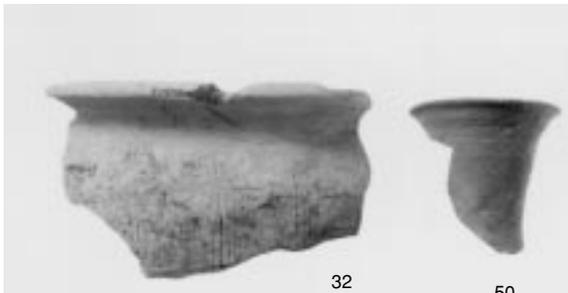
(2) 平安時代から中世の金属製品



(1) 礫敷遺構SX32出土獸骨顎部



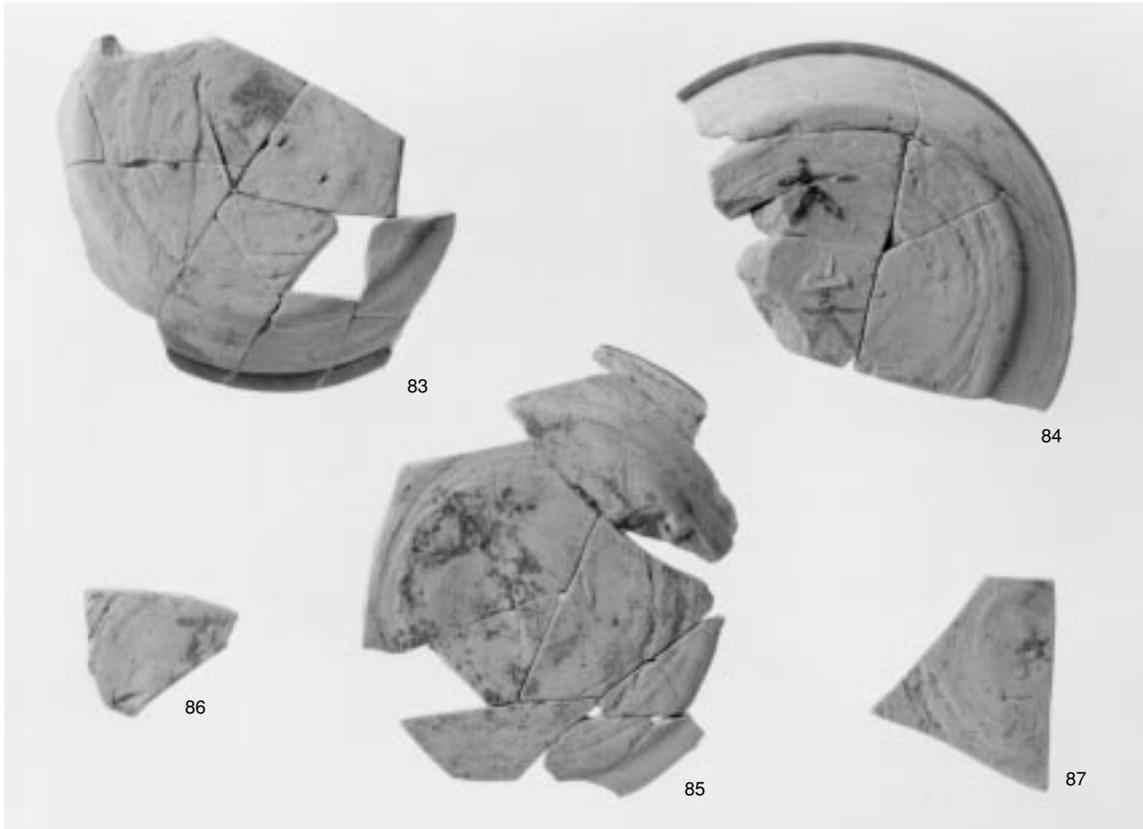
(2) 礫敷遺構SX32出土獸骨



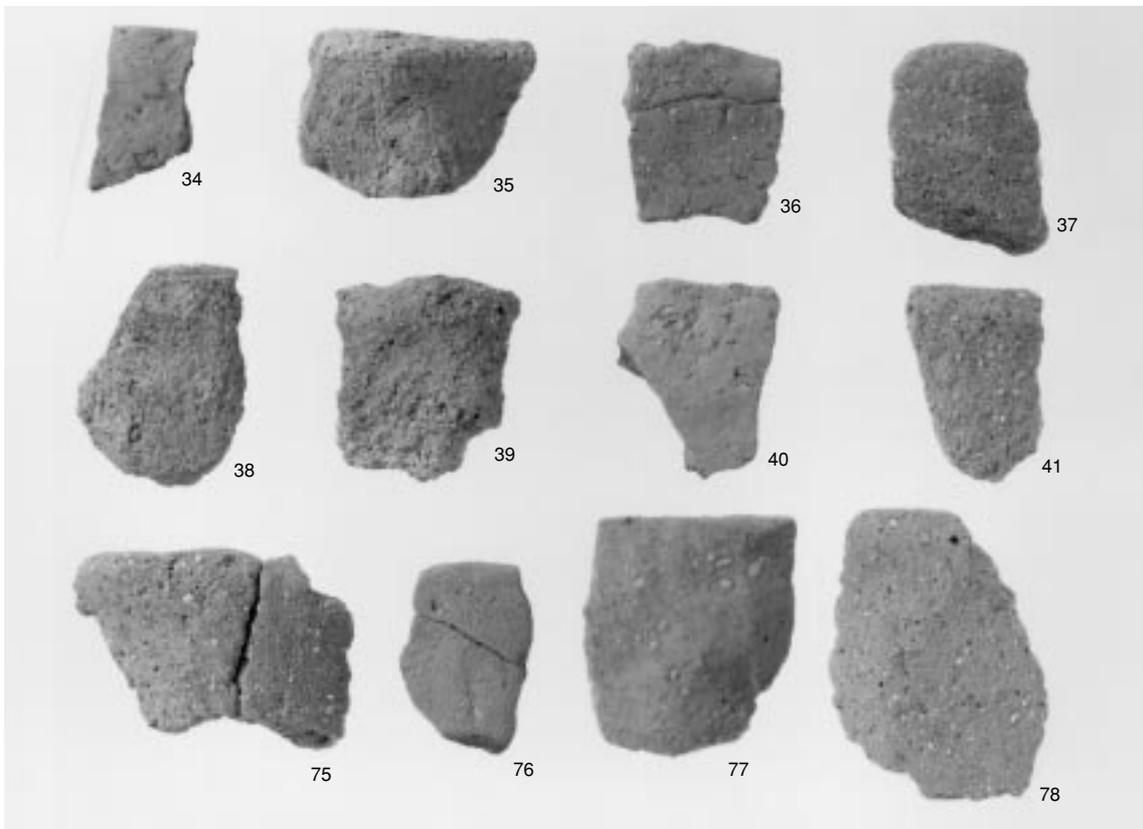
井戸SE05出土土器

長岡京跡左京第479次調査

図版
一四



(1) 溝SD40出土墨書土器



(2) 井戸SE05・溝SD23出土製塩土器



(1) 「東」線刻土器



(2) 壺M底部



(3) 軒平瓦



(4) 櫛



(5) 鋌



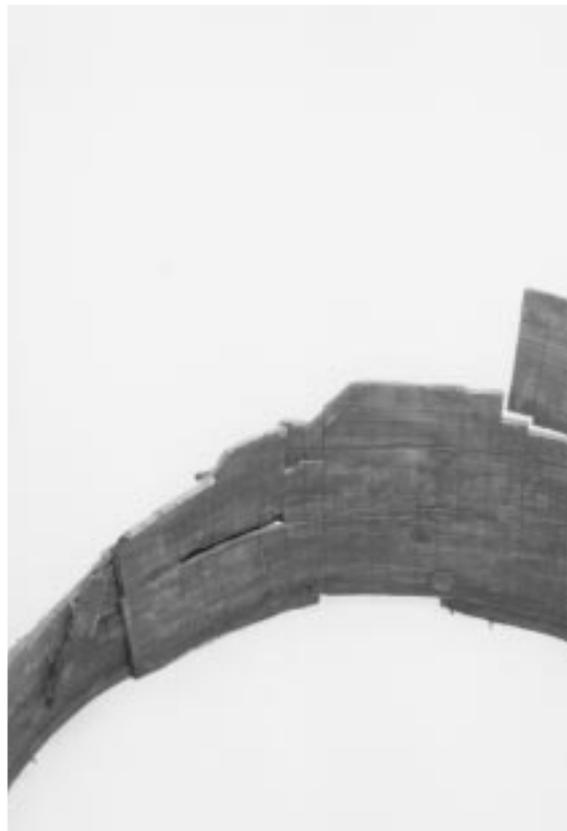
(6) 神功開寶



(1) 曲物



(2) 曲物接合部



(3) 曲物内面